

# 東方三界黃龍伝

— 東京編 —



東方三界黃龍伝

東京編  
(前編)

小龍

# 目次

1	異邦人	5
2	くれぐれも誰も信用しないように	29
3	瀕死のカニと戦うの巻	42
4	ロシアからの電話、北海道からの手紙	57
5	甲斐国の竜王町	74
6	盲目の爺々	88
7	春コートよりも激辛担担麺をください	107
8	美少年はご機嫌斜め	118
9	世の中ギブアンドテイクだから私はパンダになります	140
10	僕の叔父さん	164
11	江戸川くんの試練	184
12	素敵な契約	203
13	勝敗が決まっているものを賭けとはいわない	222

22	北天の雄	420
21	熊野神社	391
20	その果てにあるもの	369
19	斬られても文句は言うなよ	345
18	交錯	324
17	宿命	306
16	氷川神社の男、初めての茶碗蒸し	286
15	なかったらパンツアーフアウストで	270
14	東京は誰のもの？	242

# 1 異邦人

小雨降る二月の東京はどこまでも暗かった。

車窓から見える景色には、色が一つしかない。

灰色の街――。

それが、リーシャロン李沙龍の見た、東京という街の第一印象だった。

細く角ばった高層ビルがによきによきと突き出している風景は上海と大して変わらないのだが、なにかが決定的に違う。

それはゴミ一つ落ちていない無機質で機械的な街並みのせいなのか、誰とも視線を合わせようとせずに行く人々のせいなのか、それとも、これは異国に紛れ込んでしまった自分の心細さが見せる風景なのか。

しかし、沙龍自身は、心細いという自覚はなかった。

地球上のどこであろうと生きていける自信はある。自分にはそれだけの力と、詰め込まれたサバイバル術があるからだ。

「とうとう雪になったみたいですよ。東京ではあまり降らないんですけどね」  
助手席に座っていた男が、振り向いて言った。

かすが  
春日という日本人のサラリーマンで、貰った名刺には沙龍も知っている企業の名と部長という肩書きが記してあった。年齢は四十過ぎに見える。つまり、チャンタールコ  
張大哥と同じくらいだが、あの色男との共通点はなにひとつ見つけられそうにない。

日本のサラリーマンはとにかくよく頭を下げて愛想笑いをするものだ、と聞いていたが、春日はびっくりするくらい「そのもの」だった。真面目で、腰が低く、仕事とあらば子供相手にも馬鹿丁寧な敬語を使う。

「雪……?」

窓外を見る。

冷たい小雨がいつの間にか雪に変わっていた。

「積もりそうですね」

運転席の若い男が不安そうに呟いた。春日の部下である。日曜日に空港までどこかのVIPを迎えにいかなければならないという、厄介な仕事に借り出されて

いるというのに、終始、自制心のきいた無表情を貼り付けていた。無駄口も一切きかない。

〈デイグニティ〉が静かに停車した。センチユリーやレクサスにも引けをとらないといわれている、日本の高級車である。

沙龍は車から降りて、宙に舞う白いものを確認した。

そして、次に、目の前の灰色の建物を見上げる。二つの塔が引っ付いているよ  
うな、この奇妙なビルが庁舎らしい。

高速道路から見えたこの建物に反応したら、春日が「近くまで見に行きますか？」と言って連れてきてくれたのだ。

頬に冷たい結晶が触れては落ちていく。建物の最上階あたりは、厚い雪雲のせいで見えなかった。上海のテレビ塔ほど高いわけではないが、見える範囲ではこの建物より高い建築物は見当たらなかった。

「雪、見るの初めてですか？」

「いえ……」

雪を見ていたわけではないのにそう言われたので、拍子抜けした。わざとじゃ

ないのだとしたら、観察眼も注意力もなさすぎる。有名企業の部長という地位にまで出世できたのはなにかのコネだろうか。

「上海でもたまに降ります」

沙龍は硬い声と日本語で言った。

「あ、そうでしたね。ほとんど気候は変わらないという話ですから」  
春日が話す言葉はとても聞き取りやすいし、分かりやすい。

外国人相手ということ、意識的にそうしてくれているのだろう。

さらに、瀋陽に二年滞在したことがある、と言っていたこのサラリーマンは、カタコトの中国語も喋れるので意思疎通は問題なくできていた。

「甲斐さんは、ご両親が日本人だと聞きましたが……、日本語はやはり向こうでお父様やお母様から習ったんですか？」

都庁の展望台にのぼる途中、そんな話をした。

『甲斐』というのは沙龍の日本名である。

「両親は早くに亡くなりました。日本語は今回の来日にあたり、付け焼刃で勉強してきたんです」



「そうでしたか。無神経なことを聞きました。申し訳ありません」

「お気になさらず」

「しかし、それにしてお上手ですね。ほとんどネイティブと変わらないですよ」

「昔から耳だけはいいみたいで……」

愛想笑いをしてみせると、春日もホツとしたような顔を見せた。空港で会ってからこっち、沙龍の表情があまり変わらないことにあれこれ要らぬ気を回して、心配していたようだ。

しかし、沙龍に言わせれば春日は愛想笑いのしすぎで、少々気味が悪い。日本人は大体そういうものだ、と知っていなければ、不審に思っただろう。

（とりあえず、私の日本語は問題ないみたいだ）

ネイティブの人に（お世辞だとしても）褒められたということは、一応、どこでも通じるということだろう。

沙龍の日本語教師は二人居る。

一人は董天で、彼は他にも色々な語学に精通している国際人である。が、それ

らは全てビジネス用の硬い言葉だ、と自分でも言っていた。

もう一人は、沙龍が数年前に上海で出会った日本人の雀士で、こちらは正反対のくだけた下町風の言葉を使っていた。

どちらの喋り方にしても、発音だけは完璧に再現できている、という自信がある。沙龍が今言ったように、耳がいい人というのは、総じて発音がいいものだ。

意味は分からなくとも、耳で聞いた音を忠実に再生すればいいのである。広東語も、上海語もそうやって耳から覚えたのだ。

その後、雪がひどくなってきた、道路もうつつすらと白くなりはじめていた。

春日の部下は雪道には自信がないと言い出し、春日を困らせていたが、この部下の言い分も尤もである。慣れぬ雪道で事故を起こしたら元も子もない。

沙龍は、特に気を悪くすることもなく、

「じゃあ、ここからは一人で行きます。スーツケースは明日以降、届けてくれればいいですから」

そう言った。

春日はいい顔をしなかったが、四月からの生活のためにも、東京に早く慣れて

おきたい、という沙龍の主張には頷かざるを得なかった。

「でも、本当に大丈夫ですか？ この雪だとタクシーも危険ですよ」

「地図を見ると、歩いても行けそうな距離です。地下鉄もあるし」

沙龍が見ているのは、空港で買った、小さなポケットサイズの地図である。

確かに、関東近郊ならこの一冊あればどこでも行ける、と販売員は自信満々に言っていたのだが……。

「……」

春日は内心驚いていた。

十七歳の、日本に来るのは初めての少女が、外国語で書かれた地図を、さっと一目で理解できるものなのか？ しかも、新宿といえ、世界有数の大都市である。

日本人さえも迷うこの複雑な街を、日本に来た初日に歩こうというのだ。こんな雪の日に。

中国支社の責任者からは「大事な取引先のお嬢さん」と聞いていたので、どうせお金持ちのわがまま娘だろう、と思っていたのだが、どうも様子が違うな、と

春日は思った。

「すみません……。北海道出身の同僚だったら、こんな雪道でも平気だったんですが」

そう言ったのは、春日の部下である。

最初に挨拶した時以来の会話だ。

無口なのは性質ではなく、仕事だとそうなる、というだけの話かもしれない。た。

「ホツカイドー？」

「あ、日本の地名です。北国の——」

「そうだね、保科君だったら、チェーン巻くのも慣れてただろう」

春日が口をはさむ。

「スーツケースは、自分が責任を持ってお届けます。雪がやめば今夜にでも」

部下の青年は、おずおずと名刺を差し出し、携帯電話の番号もその裏に書いてくれた。

さらに、沙龍が今日から暮らすことになるマンションについても色々教えてく

れた。

「どうやら、彼が準備をしてくれたようだ。」

「家具類はだいたい運び込んであります。気に入らないようだったら仰って下さい。すぐに取り替えますから。水道、ガス、電気は使えるようになってはいます。です」

「えっと……、ミスター・シュイサン？ 日本語ではどう読めば？」

名刺の漢字は分かるが、日本語の読み方が分からない。

「ここは、似て非なる国だ、とつくづく思う。使っている文字は同じでも、読み方が違えば、それはやはり異国の言葉である。」

「水上<sup>みなかみ</sup>です」

「ありがとうございます、ミスター・ミナカミ。ミスター・カスガも、今日はわざわざ空港まで迎えに来てくれて、ありがとうございます」

「いえ、お役に立てたら幸いです。なにかあったら遠慮なくご連絡くださいね」

「はい。じゃあ、また。再見」

そうして、サラリーマンコンビと別れ、沙龍は駅の方に向かった。

素直に北上すればマンションにたどり着けるのは分かっていたが、身軽に街を歩いてみたかったのだ。

大きなスーツケースは水上に預けているので、荷物は小さなリュックサック一つである。

冗談のようにどこかかと降ってくる雪は、日曜の静かな都庁前では、物音を全て吸収していたが、駅の周辺は賑やかだった。人混みにホツとする。

目が慣れてくると、灰色一色だと思った街にも、色んな色があることに気付いた。

並木道の緑、レンガ色の建物、牌坊のような赤――。

(ん？ なんだあれ……？)

人混みのど真ん中に、牌坊のような、鳥居のようなものがあって、それが沙龍の目を引いた。

歌舞伎町の入り口にある、電飾の門である。

外国人の沙龍にはそれが不思議な光景に見えた。

(なるほど、この先は繁華街か)

規模は違うが、上海の暗黒街と同じ匂いがする。

今はまだ夕方にもなっていないし、いかがわしい人間がうろろしているわけでもないのだが、沙龍の危険を嗅ぎ分ける感覚は鋭い。

こういった勘のよさがなければ、『蒼龍会』のトップに座ることはできない。『蒼龍会』は中国全土に支所を持っている。その影響力は東南アジアや周辺各国にまで及んでおり、日本にも多少のコネクションがあった。

沙龍が春日や水上に賓客のような扱いを受けているのも、『蒼龍会』の幹部があれこれ手を回してくれたおかげなのだ。

勿論、春日たちは沙龍の正体など知らない。日本に留学するためにやって来た、富裕層の家の令嬢だと思っているはずだ。

四月からとある私立高校の三年に転入することになっているのは事実だが「留学」ではない。日本人が日本の高校に編入するだけ、という体裁を取っていた。

事実、沙龍は日本人なのである。

日本人の両親が、十七年前に中国に渡って、とある山村で沙龍を産んだのだ。

そこには、沙龍も知らない、複雑な事情がある。

——なぜ、彼らは日本での安穏な暮らしを捨てて中国に渡ったのか？

沙龍が、両親とは逆に、中国での贅沢な暮らしを捨てて、単身日本に渡って来たのは、一つにはその理由が知りたかったからである。

といっても、優先順位をつけるなら、それはかなり下の方に回されるはずだった。

東京に来た理由があるとするとするなら、「ここにはなにかがある」と直感で思ったからにすぎない。

（そう。私の探している、なにか、だ——）

上海が魔都なら、ここ、極東の一千萬都市も、また得体の知れぬ妖都である。

これだけ人のひしめく場所には、神も鬼も、妖も魔も、必ず居るものだ。

去年末に新築されたという三十階建ての分譲マンションは、やはり濃い灰色と



薄い灰色だけでできていた。日本人はカラフルな色が嫌いなのだろうか。赤いネクタイをしていた春日あたりからは違う答えが返ってきてきそうだが、どうも街並みを見ているとそうとしか思えない。

正面玄関のガラス戸を抜けると、二重ドアになっていて、暗証番号を打ち込むエリアがあった。セキュリティは一応やっています、という感じだ。

しかし、こんなものはプロにかかれば、紙のようなものである。アメリカのネイビーシールズあたりにかかれば、このタワー型マンションなど、十分に制圧されるだろう。

そこまではいかないとしても、『蒼龍会』の誇る第三部隊なら——。などと途中まで真剣に考えて、沙龍は苦笑した。

董天曰く、

『日本はあきれほど平和ですから、とりあえず、どこかのギャングに襲撃されたり、マフィア同士の抗争に巻き込まれるなんてことはないでしょう』  
とのこと。

しかし、その後で、やかましいくらいに念を押された。

『沙龍様が特になにもしない限り、平和に過ごせることと思います。そう、なにもしない限り、です。間違っても、喧嘩を売られたり、買ったり、はなされませんように。ナンパは……、まあ、されないとはいませんが、極力、暴力で撃退したりしないように。いいですね？』

逐一あの小舅の言葉を思い出して、なんだかムカムカしてきた。

「『されないと思いますけど』ってなんだよ。仮にも年頃の女の子に、なんて言い草だ」

ぶつぶつ口の中で言いながら、自分の部屋の鍵を開けた。

真新しい建築資材の匂いが充満している。

電気をつけると、思ったより「色」があっただのでホツとした。

外装と同じく、内装も無機質なモノトーンで統一されているのかと思ったのだが、水上が揃えてくれた家具は華やかなものが多く、これは彼の好みというよりも、ここに住むであろう人間のことを調べて、その好みを推し量った結果ではないか、と思う。

上品なアンティーク調のアジアン家具は、やはり、「中国」を意識している

し、寝室のベッドは派手すぎないシンプルな感じで、若者向けだ。

2LDKの仮住まいは、一人で暮らすには広すぎる気がしたが、これも董天曰く、

『沙龍様には日本の狭いワンルームは耐えられないでしょう』

とのことで、日本の住宅事情を知らない沙龍は素直にその言葉に従うしかない。

確かに、上海では贅沢し放題だった。

週末はリッツカールトンで過ごし、平日ですら、租界時代からの高級ペンthouseでお手伝いさんになにかもやってもらっていたのだ。

お腹がすけば三ツ星料理店のVIPルームでコース料理が提供され、移動は黒塗りリムジンで、必ず屈強なボディガードが同乗する。

それらは、数万の構成員を養う、骨の折れる仕事の見返りとしての贅沢と言えるかもしれないが、実際の仕事は董天を始めとする幹部連中がやっていたので、沙龍は椅子にふんぞり返っているだけでよかった。

ただ、その椅子に座るまでには五年という歳月と血生臭い掃除を必要とした。

(あ、コーヒー淹れる道具がないな……)

スーツケースが届かないことを見越して、着替えとタオルと歯磨きセットは買ってきたのだが、コーヒーまでは頭が回らなかった。

そこに、いいタイミングで固定電話が鳴った。

受話器を取る前から、相手は分かっている。

「ハロー？」

咄嗟にそう言ったら、明るい笑い声が聞こえた。

『甲斐さん、やっぱり、外国人なんですわねー。あ、すみません、もしもし？ 水上です』

「はい。分かります」

『雪がやまないようなので、スーツケース、今日はお届けできそうにないんですが……、大丈夫ですか？ なにか足りないものがあれば、言って下さい。まだ会社に住みますから』

彼の部署は新宿のビル街にあるらしい。つまり、ここからも近い。

本社は丸の内と言っていたが、沙龍には東京の地理はまだよく分からない。春

日は、その丸の内の方に居るらしい。

「一通り、駅前を買ってきましたから、大丈夫です」

『そうですか。たくましいなあ』

これが、素直な賞賛なのか、世話ができなくて残念だという意味なのか、いまいち分からぬ。

時間もあることだし、少し探ってみよう、と沙龍は軽い気持ちで思った。

「あ、でも、一つだけ……」

『はい？』

「缶コーヒーやマクドナルドのじゃない、濃くて美味しいコーヒーが飲みたいんですが、どこで飲めますか？」

『んー、そうですね……。そこからだったら、ヒルトンのラウンジという手もあります……。もう少し、くだけた雰囲気がいなら、アイランドタワーの中にもあったかな。三十分ほど待ってください。迎えに行きますから、ご案内しますよ』

実際には、水上が到着するまで四十五分かかったが、それもこれも東京には珍

しい大雪のせいで、沙龍は大して気にしていない。

が、水上は遅刻をしたことを一生の不覚のように何度も謝っていた。

これもまた、沙龍にとってはカルチャー・シヨツクのひとつであった。

「なぜそんなに謝るんだ？」

「それは……、時間が読めなかったのは、自分のミスですし」

「その程度のミスが『ごめんなさい』に値するのか？」

「ハイ？」

「中国人は、めったに『ごめんなさい』は言わないんだぜ。面子が死ぬほど大事な民族なので、自分が悪くてもそれを認めたららないからな」

「……」

水上が、そんな丁寧な言葉遣いじゃなくていいですよ、と言うので、ビジネス日本語をやめたのだ。しかし、その直後に、引きつった顔をみせるようになった。何故だろう。なにかおかしいのだろうか。

「つまり、貴女の感覚だと、十五分遅刻したくらいで、何度も謝る必要はない、ということですか？」

「うん」

結局、アイランドタワーの中のコーヒーチェーン店に入った。

もう九時は過ぎていているし、この大雪なのに、人の賑わいがあるのが不思議だった。

「日本人は、特に、日本のサラリーマンは時間厳守が基本ですから。実は日本人は、小さい頃から秒単位で動くように訓練されるんです」

「アハハ……」

それが冗談だと分かるくらいには、コミュニケーションが取れている。

水上のこともこの三十分で大体分かった。

水上慎太郎。二十七歳。

リーダーになりたがるタイプではないが、かといって控えめに徹するというタイプでもない。よくも悪くも「中庸」である。

中肉中背で、外見的特徴もこれといってないが、どこもかしこも「薄い」という印象はあった。眉毛も薄いし、唇も薄い。目は薄いというより、やや細めだ。

地方出身だが、大学に入学した時から十年間、ずっと東京で暮らしているの  
で、もう東京人のつもりだという。

「まあ、東京で暮らしてる人の多くはそんなもんですよ。純粹な江戸っ子は少  
ないんじゃないかな」

「“江戸っ子”？」

「おじいちゃんの代から東京で暮らしている人たちのことをそういうんです」

「ふーん。上海もそうだよ。地方出身者が多いから、地元っ子は意外と少ない  
だよね。私も“地方出身者”になるんだけど……」

「甲斐さんは……、うん、と、下の名前は？」

「カオル」

「どういう字？」

「馨<sup>シン</sup>」

と言っても、音だけで水上に分かるはずもなく、沙龍はペンを借りて紙ナプキ  
ンの上に書いて見せた。

「ああ、井上馨の字か」



「イノウエ？」

「うん、歴史上の人なんだけど……。これ、男の人につける字だよ。少なくとも日本ではね。お父さん、変わり者だったのかな」

独り言のように言っている。

その声が少し疲れていた。

「さあ、会ったことねーからワカンネエな」

「……」

とうとう、水上は前言撤回することにした。

「自分で言っておいてなんだけど、ビジネス用の言葉のほうがいいみたいです」

「そうですか。じゃあ、変えます。やっぱり、どこかへんなんですか？」

「アハハ、一気に変わるなあ……。うん、まあ、正直に言うと、年頃の女の子の使う言葉じゃないんですよね。その日本語教えてくれたの、男の人でしょ？」

「はい」

「それも、かなり……。なんていうか、アウトローみたいなの……。？」

「“ろくでなし”という意味なら、そうです」

「ハハ……」

苦しい愛想笑いをする水上を、沙龍はまた不思議なものを見るような目で見つめていた。

悪い人ではないのは一目瞭然なのだが、人物像がよくつかめない。

ただ、朝から休日出勤をさせられて疲れているというのに、こうしてコーヒーに付き合ってくれるというのは、よほど真面目な社員なのだろう。会社と仕事に身を捧げているとしか思えない。

なんにせよ、しばらくはこの街と人を観察してみるしかない。四月まではまだ時間がある。

水上は、とりあえず間に合わせに、と言って、このチェーン店で売っていた挽いたコーヒー豆とドリップの道具一式を買ってくれた。

「ありがとうございます」

「淹れ方、分かりますよね？」

「はい、多分」

「多分、か」

そう言つて、何故か、水上は笑つていた。

それは、なんともいえない、綺麗な笑い方だった。てのひらに舞い降りたひとかけの雪が、風に飛ばされて、あつという間に消えてしまひそうな儚さだ。

不吉な話だが、自殺する人間は、もしかしたらこういう人かもしれない、と沙龍は思った。

しかし、

(こゝも至れり尽せりだと、居心地が悪いな……)

コーヒーのお土産くらいならどうってことはないが、新築マンションを家具付きで用意するなど、どう考えても尋常ではない。

『蒼龍会』の幹部の誰かが、春日の会社の中国支社の中国支社のトップと知り合いで、そのツテで便宜を凶つてくれているのは分かるのだが、ここまで恩を売つても、春日たちに利はないような気がするのだ。

(あるいは、カスガか、その中国支社のスタッフが、蒼龍会の連中になにか弱みでも握られて脅されてるとか……?)

そんな風にも考えたが、あまり詮索しないことにした。

沙龍はもう蒼龍会の『ラオハン老板』(※ボスの意味)ではないし、今後、あそこに戻るつもりはないのだ。

水上と別れ、雪道を歩いてマンションに戻る途中、都庁の方を振り返って見た。

黒い夜空に灰色の建物。そして、白い雪――。  
改めて、知らない街に居るんだな、と感じた。

2 くれぐれも誰も信用しないように

翌日は快晴。雪は少し残っていたが、それも昼過ぎにはほとんど溶けてなくなっていた。都会の変わり身は早い。

夜になって社用車（「デイグニティ」でスーツケースを届けにきてくれた水上は、春日からのプレゼントだといって、携帯電話も置いていった。

都市では普及しはじめたとはいえ、高校生はほとんど持っていないであろうこの通信機器をポンと買い与えるのも、お金持ちの国、日本ならではの接待なのだろうか。（※東京編の舞台は一九九八年）

沙龍が少々困惑した顔をしていると、水上もそれに気付いて、

「なんでも、保護者の方から、携帯電話を持たせてやってくれ、という要請があつたみたいですよ？ 上海では使っていたからって」

それを聞いて、ため息をつきたくなった。

保護者だって？

そんなの、張か董天か、どちらかに決まっている。

「確かに使ってはいましたが……」

あの頃は、仕事に必要なだから“仕方なく”使っていたのである。

こんなものが要らない生活をしたくて上海を出てきたというのに、まったく、張も董天もどういうつもりなのだろう。

(……といっても、ミナカミに愚痴っても仕方ないんだよな)

そう思ったので、あやふやに誤魔化しておくことにした。

水上はというと、沙龍を誘い出したい様子だったが、そこには気付かないふりをして、丁寧にお礼を言い、ドアを閉めた。

とりあえずはスーツケースの中身を整理しなければならぬし、今日、量販店で買ってきたパソコンもセットアップしなければならぬのだ。

しばらくは黙々とそれらの仕事をしていたが、ふと、静か過ぎることに気付いて、テレビをつけた。

テレビはいい教科書である。つけっぱなしにしておくだけで、ネイティブの発音は耳に入るし、流行の日本語も覚えることができる。うるさくなれば消せばいい

いのだ。

パソコンのセッティングをマニュアル通りにサクサク済ませ、弟の偃月えんげつと、義姉へきえんの碧媛へきえんにそれぞれメールを送った後、

(上海にもメールくらいは送っておくか……)

そう思った。

気は進まないながらも、義理はある。

沙龍は、上海を出ることによって『蒼龍会』とは縁を切る予定だったが、事はそう簡単ではない。

宿と学校の手配だけでいいと言ったのに、いざ空港に着いてみれば迎えは来ているし、用意されたマンションは明らかに賓客用だ。

これからどうやって『蒼龍会』の影を薄めていくかを考えると、時間がかかりそうに頭が痛い。

『東京着。ミスター・カスガに手配してもらった部屋にて新生活をスタート。今のところ無問題』

そんな素っ気ない一文で済ませた。

『蒼龍会』というのは沙龍にとって、最も説明するのが難しい場所である。つまり、仇敵であり、家でもあるからだ。

八年前。

『蒼龍会』の第三部隊が湖北の名もなき山村を襲撃し、九歳の女の子を拉致した。

少女の名は李沙龍。日本名、甲斐馨——。神獣『黄龍』こうりゅうの力をその身に宿す少女だった。

なぜ、普通の少女がそのような人外の力を持つに至ったのか。

なぜ、その山村にだけ、『神獣の保持者』が育つ土壤があつたのか。

当然、そこには一言では語れない事情と歴史があるのだろう。それらの謎全てを知る者はこの地上には居ない。



山村の襲撃から三年、『蒼龍会』の本部に軟禁されていた沙龍が、組織のトップである『黒猫』を葬るといふ一大事件があった。

要は囚われのお姫様が周囲の協力を得て反撃した、ということなのだが、こういつた大きな組織にありがちなこととして、内部は常に一枚岩ではない。機会と人員が揃えば、一見、難攻不落に見えていた牙城も突き崩すことは簡単だった。

そうして、十代の沙龍がこの組織の長に成り代わることになった。

優秀な『老板』だったというのは自他共に認めるところだ。

しかし、いかんせん、若すぎる。周囲も沙龍自身も、この状態が長続きするとは思っていなかった。

「私が心配しているのは、沙龍様がいつ『やーめた』と言い出すかって事なんですかね」

いつだったか、一番のお目付け役だった董天が、そう言ったことがある。

「そりゃ、いつまでもこんな陽の当たらない場所でお姫様をやってる気はないさ。でも、その時はお前を殺して出て行くから安心しろ。後の事を憂う必要はないぞ」

冗談半分に脅したが、その可能性はゼロではないと沙龍はずっと思っていた。目の前で祖父を殺された怨みを忘れるつもりはなかったからだ。

ただ、だからといって、沙龍は、その恨み一つを胸に抱いて、この組織の老板に成り上がったわけではない。

奇妙な話だが、沙龍は無理矢理連れてこられたはずの上海に、いつしか馴染んでしまっていたのだ。

『蒼龍会』の連中は沙龍を我が子のように大切に、時として過保護に扱った。

それまでは妖怪のような年寄りたちがロクでもない権力争いを繰り返してきた組織である。沙龍のような老板は、単純に新鮮だったというのもあるだろう。

沙龍は、荒んだ半生を送ってきたような男たちを惹きつける人心掌握術というもの的心得ていた。多分、これは、天性のものだろう。

ある日、上海での暮らしにだいぶ慣れてきた頃、董天に聞いたことがある。

「お前達は、なぜ、私の故郷を襲ったんだ？」

「ようやくそれを聞く気になりましたか」

当然ながら、沙龍はそれまで、一方の主張しか知らなかった。

生まれ育った村と、九年間一緒に暮らした家族が沙龍の全てだったからだ。

地図にも載っていない、現代社会に完全に置き去りにされたような小さなあの村には、『龍穴』りゅうけつを護るといふ使命だけがあった。

『龍穴』——、中華と呼ばれる大陸の隅から隅まで、近隣の海にもそのネットワークを広げている『龍脈』りゅうみやくを統べる場所のことだ。

小さな中継地点となっている『龍穴』は他にもいくつか存在するが、大本命とも言える場所は、その名もなき山村にある一つのみだった。

『黄龍』はその一箇所の『龍穴』にだけ現れる、唯一無二の神獣である。

「先代の『黒猫』が『黄龍』の力を欲しがった——、というだけの話ですがね」  
董天は、淡々と答える。

「なら、どうやってあの村の場所をつきとめた？ それと、何故、私がそうだと分かった？」

「『蒼龍会』の情報網とプラスアルファで、なんとか……といったところでしょうか」

「じゃあ、あの村を全滅させなければならなかった理由は？」

「沙龍様の視点ではそうなるのでしようが、私たちから見れば、正当防衛ですよ。貴女一人を隠密にさらおうとしたところで、あの村の者たちが大人しくさらわせてくれるはずがない。侵入者は全員殺すっていうのがあの村の姿勢ですからね」

「正当防衛、ねえ……」

一人の少女をさらって来いと言われ、現場に乗り込むと、そこには『蒼龍会』の第三部隊ですらてこずる戦闘のプロ集団が居た——、となれば殺し合いは必須である。

董天たちが無事作戦を遂行できたのは、わずかに近代兵器という利があったからだろう。

「しかし、あの村の連中は、何百年も『龍穴』の場所を秘匿してきたのに、なぜお前たちはあっさり見つけることができたんだ？」

「まあ、多少のタネあかしをしますと『龍穴』の場所が分かったわけじゃないんですよ。私が感知できたのは沙龍様、貴女の気配に他ありません」

「気配……?」

「私には『黄龍』の気配というものが分かります。特殊能力みたいなものです」

「例の、四神の力か」

「そうです」

一体、どれだけの犠牲と労力を払って、あの村の住人たちが『それ』を世間の目から隠してきたのか、沙龍は長老たちの話でしか知らないが、彼らは「この龍穴の場所も、保持者の存在も、CIAにだって見つけられるはずがない」と言っていた。それを「特殊な魔法の力で見つけました」とは、身も蓋もない話である。

「四神は黄龍と共にあり、黄龍の力を調整すべき存在です。お互い、切っても切れない繋がりがああるんですよ」

「でも、それは架空の存在だろう」

沙龍が言うのと、董天がククツと笑った。

「架空だと思われている力をその身に抱えている方の言葉とは思えませんね」

「そうは言っても、私は生まれた時からこうなんだからしょうがないだろう」

「なら、貴女の身に起きたのと同じようなことが、他の者に起きてもおかしくは

ないでしよう？ つまり、私の場合、ある日突然『青龍』の天啓を受けたってことになりますね」

『青龍』——、東方を司る、守護神である。

それが、董天の力の秘密だという。

出身、経歴、年齢、全てが不詳のこの男が、そんな魔法の力を持っているというのだ。

とても信用できたものではない。

そして、その信用できない男が、口癖のように言っていた言葉がある。

「沙龍様、くれぐれも誰も信用なさらないように」

ジョークにしか聞こえない。

信用できない男が「信用するな」と言う。

「貴女は、この闇の世界にあつては光であり、大樹です。その大いなる神獣の力の下に、群がってくる者は後を絶たないでしょう。そして、大樹の下に身を寄せらる者たちは、貴女を利用することしか考えてません。ですから、誰も信用しないように——」

なんとも、胡散臭い話ではないか。

沙龍は、リビングルームにスーツケースを広げたまま、休憩してコーヒーを飲んでいた。

スーツケースには当面の着替えしか入っていないのだが、よく考えてみれば、服など日本の方が安くていいものが買えるはずである。わざわざ持つてくる必要などなかった、と後悔した。

現地調達は旅の基本だ、と上海を出る時にも、弟の偃月にメールで言われた。

それは、自称遊牧民だった偃月の祖父の口癖でもあったのだが、沙龍とその祖父は血が繋がっていない。偃月とは異母兄弟なのである。

(確かに、冬っぽい服がないな……)

昼間、すれ違ふ人達から少し驚いたように視線を向けられる理由は、十人目くらいでやっと気付いた。どうやら、自分の格好に問題があるらしい。雪の積もった通りを歩くのに、半袖のTシャツは確かにちよつと寒かったが、我慢できない

ほどでもないので、そのまま出かけたのである。

上海に冬がないわけではない。昨日、春日が言っていたように、上海と東京の気候はそれほど変わりはない。

ただ、沙龍はもともと寒さを感じない特殊体質なので、上海の冬も、半袖で過ごしていたのである。

中国では、みな、他人の格好をじろじろ観察するほど暇ではないし、実際のところ、そんな余裕もないのだろう。貧困層などは常に寒そうな格好をしている。

そんな土壌の中では、沙龍一人が奇異な視線を浴びることはなかったのだが、東京では「周囲と違うこと」は注目を浴びるらしい。来日二日目にして、早くもそれを学んだ。

（注目を浴びるのはどうってことないけど『極力面倒を起こすな』ってというのは張大哥の至上命令だから、守らなければなるまいよ……）

上海を出るにあたって、後のことを全て任せてきた張は、董天と同じくらいの過保護さで沙龍のことを心配していた。

「面倒を起こすな」というのは、つまり、警察沙汰になるようなことはする



な、という意味である。

上海ではなにをやっても、最悪、人殺しで捕まったとしても、金とコネの力でなんとかなる。警察すら買収しているからだ。

しかし、バックボーンのない東京で警察沙汰を起こせば、それは、裏街道を歩いてきた沙龍の身の破滅である。

着る服ひとつに神経質になることもないだろうが、「目立たないこと」に越したことはなかった。

テレビでは、夜のニュース番組が流れていた。首都圏を襲った一夜だけの大雪がトップニュースで、雪道で転んだという人に街頭インタビューをしている。

本当に、ここは平和な国だった。

### 3 瀕死のカニと戦うの巻

生活に必要なものをこまごまと買い揃えているだけで一週間は過ぎてしまった。

沙龍はそれまでのお姫様暮らしが祟って、生活するのになにが必要なのかということが分かっていない。駅前の百貨店でバスタオルを買って、それだけで帰ってくる。マンションに戻ってから、ハンドタオルも必要だったということに気付く。それを繰り返し、五日目くらいにやっと、最初からリストアップしていけばいいのだと思いついたのだが、その頃になると大体買い物は済んでいた。

食事は外食とインスタント食品が半々で、自分で作るという選択肢はない。料理はしたことがないのだ。

日本に来てから既に何個目かのカップラーメンを食べている最中に呼び鈴が鳴った。

そろそろ夕方になろうという時間だ。

「甲斐さーん」

玄関の向こうで、あまり馴染みのない自分の名前を呼んでいる男が居る。表札も出してないのにいったい誰だろう、と思ったが、

「甲斐さーん、宅急便です」

もう二度、三度、呼び鈴が鳴って、しつこく急かすような声が聞こえた。まるで、銀行のATMのようなせつかちさだ、と沙龍は思った。彼らは秒速で動かないと死ぬ病気にでも罹っているに違いない。

「タツキュービン？ 誰からですか？」

玄関を開け、若い配達員に聞くと、荷物を両手に抱えた彼は顔を横に向け、「えーと、北海道の保科さんほしなって方からですね」

「ホシナ……？」

その名前は知らないが、北海道という言葉はどこかで聞いた記憶がある。

確か、雪国の地名ではなかったか……？

「中身はなんですか？」

用心深く聞いた。

日本国内に知り合いなど居ないし、この住所に『甲斐馨』が住んでいることを知っている者などごく限られているだろう。怪しいことこの上ないので、場合によっては突き返そうと思ったのだが――。

「カニですね」

ありがたくもらっておくことにした。

恐らく、春日か水上が手配したのだろう。貢物なら、遠慮せずにもらっておくのではないか。

「じゃあ、ハンコお願いしますね」

「ハンコ……？」

「あ、サインでも結構です」

と言われ、思わず「李」と書きそうになったのを堪えた。新しい名前にも早く慣れなくてはならない。

ただ、どちらが本当の名前なのかといわれれば、厳密には、どちらも本当の名前ではない。

『李沙龍』というのは、中国での通り名みたいなものである。育ててくれた家

のファミリーネームが『李』であり、『沙龍』というのは血の繋がらない祖父が冗談半分に呼んでいたのがいつの間にか定着してしまったのだ。『沙』という文字には、砂粒のように小さい、という意味がある。

日本名の『甲斐』というのは、養父が教えてくれた、実の父親の苗字である。『馨』というのは、その父親がつけた名前らしいが、この前、水上が言っていたように、その字はふつう男性に使われる。もしかしたら、そこにはなにか意味があるのかもしれない、と沙龍はなんとなく思った。

昔の風習などで、男の子にわざと女の子の名前を付けたりする例はよくある。

自分の場合も、そんな迷信のような謂われがあるのかもしれない。

高級そうな包装紙をビリビリに破いて、いそいそと発砲スチロールの箱を開けてみると、大きなカニが三匹も入っていた。

伝票には「タラバガニ」とある。見慣れている上海蟹とは色も形も違っていた。サイズもこちらのほうが一回り大きい。が、なによりも特筆すべきは、それらがまだ動いていることだった。

「……えーと？　これをどうしろと？」

茹でるなり、煮るなりして、食べるのだろが、調理方法など分かつは  
ない。

解凍すればすぐ食べられるような状態を期待したのは甘かつた。生きた状態  
届いてしまつては途方に暮れるしかない。

日本人的思考なら、お隣さんにでも引越しの挨拶がてら一匹だけ持つてい  
つて、ついでに調理方法を聞くという手もあるが、中国生まれ中国育ちの沙龍には  
それがない。そもそも、隣はまだ空き部屋だつたはずである。

(うーん、どうしようか……)

今まで密封されていた蓋が開いて、へばつていたカニたちがその解放感を喜ん  
でワラワラと這つて出てくる。

どうせ弱つてゐるのだからとタカをくくつて放置してゐたのだが、これが意外  
にも元気で、気付けば三匹が三匹とも、てんでバラバラの方向に逃げ出してし  
まつた。

一匹目を捕まえて、風呂場に閉じ込めたところで携帯電話が鳴る。相手は水上  
だつた。

「北海道から、荷物、届きました？」

「やっぱりミスターだったんですか。これは、こういったものなんですか？」

「この前、雪が降って、ご迷惑かけたでしょう？」

「ああ、あれは仕方ないですよ」

「いえ、違うんです。実は、あの日はもともと保科というスタッフが運転手をする予定だったんですが、当日、急用が入ってしまいまして、交代で私が行くことになったんです」

田舎の母親が入院したので急遽帰省したのだという。

幸い、命に別状はなかったのですが、翌日には戻ってきたのだが、水上から東京での話を聞いて、「自分が行っていれば、雪道ごときでスタックしなかったのに」と息巻いていたという。

「まあ、そのお詫びといいまししょうか……。北海道の名産でも送っておく、と言っていたので」

「それでわざわざカニを？」

「え？ カニなんですか？ また、面倒なものを……」

水上は笑っていた。

「今も、二匹が逃走中です」

沙龍も笑って言っていてやった。

そして、

「ところで、ミスター・ミナカミは、料理できます？」

思いつきで言ってみる。

「え？ 料理？ 本格的に勉強したことはないですけど、普通に、煮る焼く、くらいならなんとか」

「じゃあ、このカニを食べられる状態にしてくれませんか？ 勿論、食べるのは一緒について意味ですけど」

「フム、カニ料理、かあ……。鍋なら簡単なのかな。いや、茹でて酢醤油つてのが一番簡単か……。？」

水上はひとしきり唸っていたが、その後、ふと気付いたように、

「いや、ちよっと待って？ 僕がそこに行っていていいの？」

ビジネス口調がはがれて、第一人称が変わっている。



しかし、そろそろメツキは剥がれてもおかしくなくらいの時間は経っていた。

「はい。なにか問題でも？」

「いや……、まあ……」

語尾を濁すも、水上のこの反応はごく常識的なものである。一人暮らしの若い女性の部屋に上がりこむのを躊躇するのは、良識ある成人男性なら当然だろう。

しかし、沙龍はそのあたりの危機感というものがほとんどない。

沙龍にとって男というものは、黒いスーツを着て自分の命令を聞く人間でしかないのだ。もし違ふというのであれば、それは「ねじ伏せるべき敵」であり、事実、今まではそうしてきた。つまり、敵か、味方か。その単純な見分けさえできればよかったのである。

二時間後、買い物袋を両手にさげてやって来た水上は、可憐な（少なくとも水上にはそう見えたらしい）少女に頼まれた手前、大いに頑張った。二人で瀕死のカニと戦い、やがて三匹はあえなくお縄となる。手足をタコ糸で縛られたタラバガニたちは、もはやその後の運命を受け入れ、大きな鍋の中でその一生を終え

た。

ちなみに、この大鍋は、水上が同僚夫婦の家から借りてきて、社用車のトランクに詰め込んできたものだが、持ってきて正解だった。沙龍のマンションには調理器具がほとんどなかったのだ。

二匹分くらいは沙龍が平らげただろうか。

そうして、さんざん飲み食いした後、水上は帰る段階になって、やっと忠告めいたことを言うことに成功した。

「君は外国人で未成年だからね。もう少し、警戒心は持っておいて損はないと思うよ」

「……？」

意味がよく分からない、という顔をしている沙龍に、水上は精一杯相手の気を悪くしないように気をつけながら言った。

「つまり、平和な日本とはいえ、いい人ばかりじゃないってことです」

「ああ……」

なぜ、水上が今日ここに来ることを渋ったのか、料理中も、食事中も、ずっと

心配するような顔をしていた理由も、やっと分かった。

ここで沙龍が「拳法をマスターしてますから大丈夫ですよ」と言ったところで、意味はない。水上慎太郎という人間は、自分が信じる良識というものの上でのみ成り立っていて、それ以外のものを持っていないからだ。良くも悪くも善人なのである。

「そうですね、気をつけます」

その言葉で、彼とは距離を置くことにした。

が、水上の方は沙龍の心情には気付かなかっただろう。

翌日は、ボスの春日の方から連絡があった。水上を使ったことに対するお小言でも言われるのかと思ったのだが、違った。

電話はご機嫌伺いから始まり、その後、奇妙な話になったのだ。なんでも、自分が沙龍の接待役に選ばれたのは、瀋陽に滞在したことがあるからではなく、春日という家名にあるのだという。

『私の実家は山梨の方にあるんですが、ご先祖様は、代々、辺り一帯を治めていた殿様の家来だったんですね。まあ、うちは分家なので、全然大したことはない

んですけど』

「はあ……。ヤマナシ、ですか」

『東京から二、三時間くらいの盆地です。新宿の東西を走る甲州街道という大きな道があるでしょう？ あれをずーっと西に行く到着くんですよ。まあ、車で行くなら高速を使ったほうが早いんですが』

「はあ……」

それで、ヤマナシという田舎がどう関係してくるのだろう。

辛抱強く待った。

『実家は、山梨の甲府というところで小さなお店をやってまして、兄が継いでます。私は一年に一回、田舎に帰るぐらいですね』

東京で働く者たちは、大抵が田舎出身なのだという。

水上也、春日も、カニを送ってくれた保科もそうである。

『今でも、地元の人間はことあるごとに「武田様、武田様」ですよ。あ、その殿様の姓が武田っていうんです。武田信玄っていう有名な武将が居ましてね。ご存知ですか？』

「はい。風林火山の人ですよ。」

春日は、沙龍の返答に少し驚いたようだった。

信玄が好んで使った『風林火山』は、もともと『孫子』の一節なのである。春日は当然それを知っているが、年若い沙龍が知っていたのが意外だったのかもしれない。

といっても、中国人全員が『孫子』の内容を知っているわけではない。さらに、その『孫子』の一節を島国の武将が旗印にした、などという逸話を知っている中国人はだいぶ限られるだろう。日本人とて『風林火山』は知っていても、その出典まで知っている者は少ないのだ。

『たまに「敵に塩を送ってもらった人」なんて言われ方もされちゃいますけどね』

春日が言っているのは、有名な戦国時代のエピソードで、武田信玄のライバルだった上杉謙信が、困窮していた信玄に実際に塩を送って助けたという話である。

沙龍も、その逸話はおぼろげに知っていた。

が、なぜだろう、とふと自分でも思う。

沙龍は、特殊な環境下で育ったので、学校には行かず、勉強は家庭教師たちに教わった。彼らは人の急所や銃の撃ち方を教える一方で、微分方程式や硫酸ナトリウムの化学式も教えてくれた（もつとも沙龍がそれらを覚えているかどうかは甚だ怪しい）。語学も歴史も音楽も家庭科も一通りやった。

そのカリキュラムの中で『日本史』という授業があったわけでもないのに、武田信玄の話も、上杉謙信の話も、やけにすんなりと入ってくるのが不思議だった。

戦国時代の本を読んだことがあるというわけでもないのに、だ。

（小さい頃に聞いたことがある、とか……？ でも、そんな記憶はないんだよね……）

『そこで、やっと本題に入りますが』

「あ、はい」

『その山梨の一带を、昔は甲斐国かいのくにと呼んでました。地名なんです、実際、甲斐姓の人も多いんです』

「甲斐——」

オウムのように繰り返す。

まだ人事（ひとじん）に聞こえるが、一応、自分の名前である。

『ですから、甲斐さんのお父様も、もしかしたら山梨出身かもしれないので、そのあたりのことを調べてほしい、ということ、私に白羽の矢が立ったわけです』

「えっと、つまり、中国支社からそういう指示が？」

『ええ』

「……」

董天が頼んだのだろうか。

しかし、わざわざそんなお節介をする理由がよく分からない。

「確かに、私もそれを調べるつもりで、四月よりだいぶ早く来日したんですが……」

……

『なにか分かっていることがあれば、お調べしますよ？』

「そうですね……。ちよつと姉と連絡を取って、こちらの情報を整理しておきま

す」

少し、時間が欲しかった。

春日が信用できる人物かどうかまだ分からないし、たとえ信用できると分かっても、彼のバックである企業の腹が読めない。

何箇所かに連絡をする必要がある。

とりあえずは、春日との電話を切って、その三秒後に、上海に国際電話をかけた。

まったく、金輪際、こちらから連絡するつもりはなかったのに、一週間にしてその決意も敗れ去ってしまった。



4 ロシアからの電話、北海道からの手紙

沙龍が養父の豊隆ほうりゆう から聞いた話では、甲斐弥太郎という日本人が、中国は湖北省、例の山村に現れたのは一九八〇年頃だったという。最初は日本人だとは思わなかった。それくらい、流暢な中国語を話したそうだ。

連れの女性はカタコトの言葉しか喋れず、弥太郎が通訳をしてやっていたが、それも最初だけで、そのうち、弥太郎に負けないほど流暢に現地の言葉を話すようになった。

『まあ、もともと百合子さんは優等生だったんだろうな。分からない言葉はママにノートに書き込んで勉強していたし』

実の両親のことを聞きたい、とメールで問い合わせてみると、ロシアから国際電話をかけてきた碧媛へきえんはそんな話をしてくれた。

碧媛は、豊隆の次女で、当時は成人前という歳である。甲斐弥太郎と百合子が村に来た頃のこととはよく覚えていた。

その碧媛に言わせれば、弥太郎は「一見、都会の軟弱男」だったという。物腰も立ち居振る舞いも凡人にしか見えないのだ。しかし、『神獣の保持者』である以上、凡人では許されない。弥太郎も、沙龍と同じように歩き始めると同時に修業の日々を送ったはずである。

『弥太郎さんは、少し不思議な技を持っていた。日本の武術はよく分かったんだが、柔道でも空手でもないと思う』

「ってことは、合気道？」

『いや、それも違う。合気道の達人の技を見たことがあるが、あれとは別物だ』

「その『不思議な技』って、具体的にはどういうの？」

『私が見たのは、飛んでる雲雀を一瞬で気絶させた技だったんだが、驚いた。中国武術ではありえない。殺していいなら簡単だが、気絶となるとな。そもそも、あんな小さな生き物に対して、そこまで力の加減などできるもんじゃない』

「フーン。手品みたいだね」

『彼の技は、どこかこう、敵を徹底的に排除するような荒っぽい武術とはかけ離れたところにある。もしかしたら、一子相伝的なものかもしれない』

「一子相伝かあ……。流派が分からないんじや、お手上げだなー。なにか、他の手がかりは？」

『手がかりと言ってもな、今となつては、写真もないし……。』

改めて、亡き父のことを知ろうとしても、手がかりがなさすぎる。当時のことをよく知る人間はもう居ないのだ。

それに、碧媛は〈保持者創生計画〉にはほとんど加わっていないなかったので、詳細を知らない。

「でもさ、あんな閉鎖的な村に、いきなり外部の人間が迷い込んで来たら、普通はあれこれ調べるんじゃないの？」

『それに関しては、保持者だとすぐ分かったから、問題なかったんだろう』

「どうやって？」

『一番分かりやすいのは、額に顕れる梵字か。お前も持っているだろう。あれは保持者の遺伝子を持つ者にしか顕れない印なんだ』

「ああ……」

と、あやふやに頷いてみたものの、その梵字を、沙龍自身は見たことがない。

黄龍を召喚している時にだけ額に顕れるものなのだ。

『それに、そもそも気配ですぐ分かる。弥太郎さんは、お前ほど黄龍の氣を撒き散らしてはいなかったが、それでもあの村の者には分かるさ』

「……。私、そんなに撒き散らしてる？」

かなり不機嫌な口調で言ってみたものの、

『昔はな』

碧媛は笑っていた。

そうしてしばらく、遠く離れたモスクワと東京間で戯言を交わす。

距離にして、ざっと七四九〇キロメートルである。とてつもなく遠い距離に思えるが、実際には飛行機で十時間もあれば着く。

碧媛はいつも違う都市に居るので、次に連絡を取る時はサンパウロかもしれないし、南極かもしれない。仕事で世界各国を飛び回っているのだ。

『そのサラリーマンは無害だろう。日本の企業は大きかろうが、小さかろうが、利潤でしか動かないからな。龍神様の話なんて、鼻で笑う連中さ』

春日の件については、そう言っていた。

「じゃあ、山梨には行ってみてもいいかな？」

『問題はないと思うが……。なあ、沙龍』

「なに？」

『私そのあたりを楽観視しているのは、サラリーマンが無害だから、ではなくて、山梨に行ってもなににも分からずに終わる可能性が高いと思うからだ』

「え？ どういうこと？」

『甲斐弥太郎という戸籍はどこを探してもないと思う。あれが偽名だとは思わな  
いが、仮にも保持者の一族が、無防備に国の管理下に納まるようなことをする  
は思えない』

「うーん……」

『だから、まあ、行くなら、あまり期待せずに行ったほうが、ガツカリせず  
に済むぞって話だ』

「ああ、それは大丈夫だよ。ありがとう」

元々、甲斐家のことは、沙龍にとっては遠い。調べる余地があるなら、調べて  
みるか、という程度なのだ。

最後に、碧媛は、別件で調べることがあるから近々日本に行くかもしれない、と言っていた。

香港に居る偃月も、学校が休みになったら遊びに行きたいと言っていたので、時間が合えば、久しぶりに三人で会えるかもしれない。今はひそかにそれを楽しみにすることにしよう。

インターネットが歴史上に登場してから、世界の距離は確実に縮んだ。

国際電話よりも手軽に、そして安価に、ほぼオンタイムでやり取りができるなど、十年前にはとても考えられなかったことだ。

しかし、一方で、人類には、無駄を愛するという変な習性があつて、ロケットを開発しながら、SL列車に乗りたがり、インターネットを発明しながら、手紙を書いたりする。

十七歳の李沙龍にも、この性癖があつたのかどうかは分からないが、ゴミ箱の中に丸められたタラバガニの伝票を見た時、何故か、お礼状を書かなければ、と

いう気になったのだ。

郵便局で葉書を買ってきて、辞書を引きながら、例文を見ながら、一生懸命つたない日本語を書いたのである。

宛先は、そのまま、伝票に書かれていた住所氏名を写したのだが、それが奇妙な縁を生むことになった。

後日、北海道の保科俊しゅん という男性から、古式ゆかしい手紙が届いたのである。

上品な細長い封筒の上に、墨で書かれた「甲斐馨様」という流麗な文字が、自分のことだと気付くのにだいぶ時間がかかった。

中身を取り出すと、綺麗な薄い緑色の和紙に、達筆な筆文字がちりばめられている。

沙龍は、こんなにも美しい筆跡を初めて見た、と思った。

中国でも日常に筆を使う者は少なからず居る。達筆な人間も珍しくはない。

しかし、これほど繊細な文字を書く者は知らない。これが「中文」とは違う

「和文」というものか、と感動すら覚えた。柔らかいのだ。同じ漢字なのに、漢

字特有の硬さがどこにもない。

ただ、大いなる問題が一つあった。

内容が半分以上分らないということだ。

困った時の水上に相談すると、保科悠ゆうという男性も交えて、その手紙の解説をしてくれることになった。

新宿アイランドタワーのカフェで、保科悠は豪快に笑いながら、言った。

「これ、オレの弟なんですよ。実家で医者をやってるんですが、若いのに、書道が趣味っていう、じじさむい、変わりモンでしてー」

彼こそが水上の同僚にして、沙龍を成田空港まで迎えに行く予定だったのが急遽北海道に帰ることになり、しかし、翌日には東京に戻ってきて、実家の誰かに「甲斐馨」宛てになにかお詫びの品を送るように手配をしてくれと頼んだ人物――である。

そして、その『実家の誰か』こそが、弟の保科俊なのだ。

達筆すぎて兄の自分でも読めない、と保科悠が放り投げた手紙は、水上が丁寧に読んでくれた。



まずは時候の挨拶に始まって、葉書をくれたことに対するお礼があり、自分はただ兄に言われて手配をしたただけだということ、そして、何も考えずに自分の名前を伝票に書いてしまったことを詫びていた。

さらに、母親はまだ入院中であるが元気だということ、沙龍の気遣いに対する感謝があり、最後に、

「〃慣れない環境で色々苦勞をされていることと思いますが、春からの新生活が充実したものになるよう願っております……”、うーん、すごい、達筆な上に、出来た文章ですね。普通の手紙で、僕はここまで書けないな」

水上が感心したように言っても、保科悠は取り合わない。

「どうせ、なんかお手本見て書いたんだろー？」

水上当とはだいぶ印象が違うし、恐らく弟ともかなりタイプが違うであろう保科悠は、ともかく大きな声でよく喋る男だった。大学時代はラグビー部だったという。そう言われなくとも、なにか荒々しいスポーツをやっていたのは一目瞭然だ。日本に来てから出会った人たちの中では、一番、裏表のない人間に見えた。「ありがとうございます、不幸の手紙じゃないと分かってホッとしました」

沙龍の冗談には慣れつつある水上は軽く笑っただけだが、保科悠は少しギョツとしていた。

そんな保科にも、沙龍はニコニコ顔で言っただけだ。

「本当は、ユウさんにお礼状出さなければいけなかったんですよ。ありがとうございます。ございます。カニはとても美味しかったです」

「ああ、いやいや、こちらこそ、手間のかかるものを送っちゃって、すみませんでしたね。物を選んだのは俊なのよ。まったく、なんでカニにしたのやら……」

「……」

どうやら、保科悠はそのカニを料理したのが誰なのか、知らないようだった。水上が黙っている理由は大体分かるが、ここは自分もそ知らぬ振りをしたほうがよさそうだ。沙龍も、保科俊に礼状の返事の返事を送るつもりでいることは、この二人には黙っていようと思ったのだから。

そうして、顔も知らない保科俊との文通が始まったのである。

今度は葉書ではなく、自分も封書にしよう。そう思って駅前の百貨店に来てみれば、体育館のような広いフロアの壁一面に様々な種類のレターセットが展示されていて、一時間くらいはボーッと眺めるだけで終わった。

この徹底ぶりはなんだろう。ここまで取り揃える必要があるのだろうか。色が違うだけでデザインの同じものがズラッと一列並んでいたりもするのになんたる無駄。なんたる豊かさ。どこか違う国に来ているみたいだ——、と思い、実際、違う国なのだ、と笑ってしまった。

沙龍はさんざん悩んで、最終的にはあまり飾り気のない、上質な洋紙にした。帰ってからが、いざ本番で、文面にもあれこれ悩んで、あれこれ書き直し、気付いたら数時間が経っていた。

宛先の住所を書いて、やっと一息つく。

自分で書いた『北海道』という文字列がやけに目についた。

(どうも、「北」に縁があるな……)

ふと思った。

北海道の保科俊との縁、モスクワに居る碧媛、そして、水上という姓……。

(※陰陽道において北と水は同義語)

これは、なにか意味があるような気がする。

いや、そうではなくただの偶然かもしれない。

しかし、重なる偶然は必然である。風林はよくそう言っていた。もう少し様子を見ようではないか。

保科俊 様

お手紙ありがとうございます。

まさか墨書のお返事が来るとは思わなかったので、びっくりしました。

字が綺麗で、とても感動しました。

ただ、ところどころ難しく分らなかったもので、実は、お兄さんの悠さんと、その同僚の水上さんに読んでもらいました。勝手なことをしてごめんなさい。

今度からは、なるべく辞書を使って自力で読めるようになりたいです。もし、よければ、また、お手紙書いてください。（時間があったら！）簡単なもので結構です。日本語の勉強がしたいのです。

俊さんは、ドクターなのだと言ったから聞きました。

ドクターのことを、日本語では「医者」とか「先生」とか「医師」とか、言葉がたくさんあって迷います。

日常会話ではどういう風に呼べばいいのですか？

私は四月から高校に通う予定ですが、それまで少し時間があるので、山梨まで旅行する予定です。

向こうから絵葉書を送ります。

甲斐馨

\*  
\*  
\*

甲斐馨 様

立春の候、ますますご健勝の事とお喜び申し上げます。その後おかわりごさいませんでしょうか。

この度は、ご丁寧な御手紙をいただき、まことにありがとうございます。嬉しい驚きと共に、拝読しました。

そして、まずはお詫びしなければなりません、先の手紙では、不肖ゆえに、馨さんが外国育ちであることを、失念しておりました。申し訳ございません。

以後は、なるべく分かりやすい言葉で書くつもりですが、難解な部分がありましたら、以後、ご指摘いただければ、拙いながら解説します。

手紙で語学の勉強を、というその熱意には本当に頭が下がる思いです。

学校を卒業し、日々の仕事に追われる身になりますと、つつい学ぶ姿勢を忘れてしまいがちですので、私でよければ喜んで文通のお相手をさせていただきます。と思います。

また、手蹟を褒めていただき、ありがとうございます。

私は中学生の頃から書道をたしなんでおりますが、本当にたしなむ程度なので、お恥ずかしい限りです。

師範代の免状は持っておりますが、これは自慢になりません。大きな声では言えませんが、書道教室に数年通っていただければ大体、誰でも持てるものなのです。

日常の中ではなかなか筆を握る機会もありませんので、今はなるべく感覚を忘れないように、近所の子供たちに混ざって書道教室に通っています。

初心者の子には、筆の握り方などを教えることもありますが、それよりも、老若男女の違いなく、色んな人と気軽に交流できるのが楽しいですね。田舎ではよくある風景です。

中国では、まだ日常の中にも書道は息づいているものでしょうか。

日本では義務教育の中でさわりだけ教わるのですが、やはり子供は長時間じつと座っているのが苦手ですからね。教科としては敬遠されてしまいがちです。

兄も書道はあまり好きではなかったようで、小学校卒業以来、筆には触っていません。ないと思います。

今や、剣道と同じで、本来の目的を失ってしまった少し悲しい芸術です。精神

だけは引き継いでいけたらいいのですが。

（本場ではまた違うのでしようが、このあたりは釈迦に説法になりますね）  
話変わって、お問い合わせの「医者」の使い方ですが、畏まった堅い表現においては「医師」、一般的には「医者」（しかし、この言葉は呼びかけには使いません）、気軽に呼びかける時は「先生」と使い分けされています。

「先生」というのは「教師」に対しても使われます。

日本では外来語も多く使われてますので「doctor」も日常的に聞きます。

医者が自分のことを表現する時は「医師」や「先生」はほとんど使いません。特に「先生」には尊敬の意味がありますから、自称する人はほとんど居ません。

書道教室の小さな友人たちは「俊先生」と呼んでくれますが、まだ医者としては新米なので気恥ずかしいです。

実はこの手紙も書道教室の片隅で書いています。ちびっこ達が興味津々にのぞきに来ますが、彼らは漢字が多いと読めないなので個人情報漏れてないと思います。大丈夫。

最後になりますが、ご旅行にいかれるとか。山梨は一度研修で行ったことがあ



りますが、空気の綺麗な場所です。

昔は天領だったお土地柄のせいか、街の人たちもどこか垢抜けている感じがしました。

道中、お気をつけて、是非、楽しんできてください。

馨さんからのお便りを楽しみにしております。

保科俊

5 甲斐国の竜王町

山梨旅行は碧媛が言った通り、なんの収穫もなく終わってしまった。

分かったことがあるとすれば、甲斐弥太郎という人物は二十年前の山梨には居なかつた、ということくらいである。

実際に、地元の興信所なども使つて甲斐姓の家を全て調べた結果である。

「他県に移り住んだ人も居ると思いますので……」

一緒に行った春日は氣を使つてそう言つてくれたが、もとより沙龍はそれほど落ち込んでいない。

実は、途中からは故人を探すことにも飽きて、南アルプスの景色の方に心を奪われていたのだ。

雪のかぶつた高い峰をバックに、低い山々の深い緑が霧と共に立ち昇る様は、一種、神がかりにも見える。

幾度となく足を止め、それらを無言で見つめる沙龍に、春日もなにか感じるも

のがあったらしく、

「どこか……、似た場所をご存知で？」

そんな言い方をした。

故郷の景色に似ているのか、とストレートに聞くことはない。それが春日なりの気の使い方なのだろう。

沙龍は視線を動かさずに答えた。

「いえ……、私が育ったところは乾いた黄土と岩だらけの場所でしたから。こんなに緑いっぱい景色は初めて見る……」

そう。

初めてのはずだ。

この深い緑は、沙龍の今までの人生のどこを探してもない。

あの名も無き山村にも、ネオン輝く上海にも、こんな緑はなかった。

なのに、初めて見る気がしない。この奇妙な感じはなんだろう。

既視感とは違う。あれは、全て脳の中で起こる現象である。

しかし、沙龍が今感じている主体は五体そのものなのだ。この一面の緑に対し

て、皮膚の全ての表面が反応をしている、といった感じなのである。

(まさか、『甲斐家』の血が覚えている記憶だとしても……?)

冗談交じりにそんな風にも考えた。

そんなファンタジーがありえるだろうか。

仮に、ここが本当に甲斐弥太郎が生まれ育った場所だとしても、沙龍自身は中国で生まれ、育ったのだ。甲斐馨という個人はこの深い緑色の景色を知らないはずである。

「……」

視線をずらせば、南東の方角には大きな富士が鎮座していた。

均整の取れた稜線は、半分以上、冠雪で白くなっており、さらに、雪の白さが消えるあたりは空の色と相俟って、濃い水色に見える。

噂に違わぬ美しさだった。なるほど、日本の象徴として、「霊峰」になるだけはある。

しかし、不思議なことに、この立派すぎる山は、沙龍の血や記憶の中には一切見当たらなかった。

(やっぱり、違うのかな……)

ここは甲斐弥太郎の故郷ではないのだろうか。

自分でもよく分からなくなった。

「さて。それじゃ、私は東京に戻りますが……、本当にお一人で大丈夫ですか？」

春日は、週末を利用して自ら甲府の街を案内してくれたし、地元のエージェン  
トなども紹介してくれたが、明日の月曜は通常出勤するつもりでいるようだった。  
これから一人で東京に戻るといふ。

今は日曜の午後、もうすぐ陽が沈む頃である。

「大丈夫です」

沙龍はもう数日、滞在をするつもりでいた。

少し、気になることがあるのだ。

「甲斐さんは語学も堪能ですし、たくましいですからね」

いつもの、腰の低い愛想笑いだったが、春日は最後に妙なことも言っていた。

「まあ、こんな冴えない中年が一緒じゃ、つまらない上に、気も休まらんでしょ

う。今度は誰か、いい人と出かけてください」

「“いい人”？」

その言葉の意味が単純に分からなかったので訊ねたのだ。

「水上君なんかどうです？　ちよつと頼りなさそうに見えるかもしれませんが、彼は真面目でね……」

「……」

なにか知っているのか、それとも、勘づいているのか、腐っても元上司である。

といつても、沙龍と水上の間には、今のところ、なにもない。

ただ、水上が沙龍のことを色々と気にしていて心配もしている、という話だ。

沙龍が特に表情を変えなかつたのを見て、春日は「余計なお世話でしたね」と申し訳なさそうに言つて、東京に戻つた。

(やれやれ、あのオッサンも結構な狸だな)

ホツと一息つく。

親しくない者と行動を共にするのはやはり疲れるものだ。

しかも、沙龍と春日ではなにもかもが違う。性別、世代、環境、思想、そして、大袈裟に言ってしまうえば、生きる目的が違う。

例えば、春日は会社に仕えている者である。その昔、武田の殿様に仕えていた頃から、彼らは実はなにも変わっていない。勤労の代わりに禄をもらい、給料をもらい、それによって命をつなぐ者たちである。

だから、彼らは生きていくためには土下座もするし、自分の娘のような年齢の者にも敬語を使う。

しかし、沙龍は、そういった社会の仕組みの外側に居る。

人外の力を持ち、それによってあらゆる利を得、群がるハイエナをなぎ倒してきた人間なのだ。

サラリーマンたちと共存はできても、価値観を共有することは到底できない。中途半端な時間だったので、甲府駅までぶらりと出かけ、あまり流行ってなさないようなカフェに入った。

店内はわりと広いが、常連客が二、三人居るだけである。

窓際の席に案内され、ブレンドコーヒーを頼んだ。本当はエスプレッソが飲み

たかったのだが、メニューになかったのである。

ログハウス風の店内を何気なく見回し、非常口と逃走経路を確認した。初めての場所に来た時は、無意識にそういったセンサーが働くようになっていた。

窓の外は、地元の百貨店が風景の半分を占めており、この百貨店チェーンが、先日、春日がさらりと言っていた「実家がやっている小さなお店」だそうである。

嫌味な謙遜というより、それが日本人の美学なのだろう。

この分だと、保科俊も大きな総合病院の院長かもしれないな、と沙龍は絵葉書を書きながら思った。

俊先生へ

お元気ですか？ 私は、今、山梨にきています。

旅の目的は果たせなかったのですが、俊先生が言っていた通り、空気も景色も



綺麗なところで、来てよかったと思いました。

裏の写真は甲府駅から見た富士山だそうです。昨日は、朝焼けの中の富士山を見ましたが、とても綺麗でしたよ！ 日本人に限らず、世界中の人がこの山を愛する気持ちが分かる気がします。

もう少し街を見てまわってから、帰ります。

また、東京からお手紙書きますね。

再見！

甲斐馨

あまりに「作りすぎ」な気もするが、普通の十七歳の女の子はこんなものだろう、と思うしかない。

出されたブレンドコーヒーは思ったより美味しかった。ブラックのまま飲んでみると、エプロン姿の男性に心配そうに声をかけられた。

「ミルクなしで大丈夫？」

「……？」

最初、意図が分からなくて、五十代くらいの恰幅のいいマスターをまじまじと見上げてしまったのだが、

「ああ、大丈夫です。美味しいです」

にっこり笑って言ってやった。

上海の馴染みのカフェのマスターに似ていたのだ。イタリア料理のシェフの方が似合いそうなたっぷりとしたお腹の感じが、特に似ている。

沙龍は童顔で背も小さいので、中学生くらいにしか見えなかったのだろう。ひよっとしたらもっと幼く見えたのかもしれない。

子供にカフェインは禁物である。しかし、アルコールすら経験済みの沙龍にそれを言っても、あまり意味はないだろう。

マスターはそのままカウンターの常連さんとなにやら天気の話をしていたが、沙龍のことを気にしているようだった。警戒していたのかもしれない。

沙龍のテーブルには書き終わった絵葉書や地図が載っているのだから、旅行者

だということはずぐ分かるだろうが、年齢が年齢なので、家出少女とでも思ったのだろう。

あれこれ詮索される前に沙龍は会計を済ませて外に出た。

(やっぱり私みたいな女の子が一人だと目立つのかな)

一応、今更ながらに服装チェックもしてみたが、寒空の下でノースリーブ、といった間違った格好はしていないはずである。

新宿の人混みの中で一人うろろうしていても、特に奇異な視線を向けられることはないのに、少し都心を外れると、外から来た人間に対する警戒心というものは顕著になる。

が、それは日本に限った話ではない。

どこの田舎でも「自分たちとは違うもの」はそれだけで警戒されるものだ。

(だから、甲斐家の人たちは、ひっそりひっそり転地を重ねていったのかな…)

へ彼らは、どこにも足跡を残さず、誰にも目をつけられることもなく、ひっそりと生きてきたという。

東京にも京都にも行ったことはない、と、甲斐弥太郎は碧媛に語ったことがあるらしい。

日本のような狭い国では、木の葉を隠すには森へ、の諺通り、都心に隠れ住んだ方が見つかるリスクは低いはずなのだが、甲斐家の者たちは敢えて難しい方を選んだ。

なんのために――？

都会で暮らすには、「地方で目立つ」以上のリスクがあつたに違いない。

それはなんだろう――？

碧媛から聞いた、雲雀のエピソードがなぜか頭を掠めた。

殺さず、気絶させる。

その意味するところはなにか。

単純に考えれば、ひっそりとした生活の中では攻撃的な技は必要なかった、ということだろう。

駅前のロータリーで赤いポストを見つけたので、絵葉書を投函し、ホテルに戻った。

翌日は、朝早くから起き出し、甲府駅から切符を買って列車に乗った。一駅で目的地につく。

甲斐市、竜王町――。

その字面だけで、ちよつと行ってみよう、と思ったわけだが、沙龍が「竜」という文字に反応するのは当然である。

中でも「竜王」とくれば、竜たちの頂点であるから、その地名の由来が気になった。

タクシーの運転手に訊ねると、近くのお寺が関係あるらしい、と言っている。

「なに？ 学校の課題かなんかなの？」

「まあ、そんなようなものです」

「うーん、確か、慈照寺だつて聞いたような気がするんだが。なあ、ロクさん」  
運転手は、道路脇で煙草をふかしていた同業者に聞いた。

「ああ？」

目つきのするどい「ロクさん」が顔をあげた。

「ほら、竜王って地名さ、寺の坊さんが竜を退治したとかいう話だよなあ？」

「ああ、お前さん、育ったの、ここじゃなかったか。地元の小学校だと、二年生くらいんとき社会見学で行くんで、誰でも知ってんだけどな」

ロクさんがそばまで来て、物珍しそうに沙龍を一瞥すると、「地元の小学生なら誰でも知ってる話」を聞かせてくれた。

それによると、中世の頃、慈照寺というお寺の開祖が、近くの竜王潭という場所ので悪い竜を退治し、その翌日、寺の境内に清水が湧き出てきた、という話だ。

京都の慈照寺（通称、銀閣寺）とは特に関係ないようだった。

（悪い竜と、清水……、か）

沙龍は、やはり「竜」の捉え方が中国と日本では微妙に違うのだな、と思った。

中国では、竜は水の神ではない。大地の守護者だ。その究極形態が黄土を護る「黄龍」なのである。

「資料なら、図書館か市役所に揃ってるよ。あ、あと、商店街の方に自称郷土歴史家っていう、元教師のじーさんが居るが、どうするね？」

ロクさんが人相の悪い顔とは裏腹に親切に教えてくれたが、お礼だけ言って辞

した。

(竜王ってのも、本当の「王」という意味ではなく、誇張表現っぽいな、これは)

そう思ったので、ここから歩いて行けるという例の「慈照寺」だけを見に行くことにしたのだ。

澄んだ空気が気持ちいい。

どこかで雲雀が鳴いていた。

慈照寺までの道のりにはすれ違う人もおらず、のどかな田舎町の風景が続いた。

どこを見ても必ずある深い緑色は、つまり、針葉樹の葉の色なのだろうが、よつぽど木々が重なりあつてないとこの色にはならないだろうと思える。

(チンジュノモリ……)

ふと、そんな音の羅列が頭に浮かんだ。

意味は分からない。多分、そんな響きをどこかで聞いたことがあるのだろう。

「チンジュノ、モリ？」

今度は、口に出して言ってみた。

中国語に似ていなくもないが、意味は通らないので、やはりこの響きは日本語に違いない。

まばらな民家と田んぼの風景の中に、少し立派な門が見えてくる。目指すお寺



だとすぐ分かった。

「お邪魔しまーす」

沙龍は、実は神社と寺の違いが分かっていない。

だから、門をくぐる時は、この敷地と建物の所有者に対して言ったつもりだった。

境内には誰もおらず、あたりも閑散としている。平日の午前中に、お参りにくる者など居ないのだろう。

由来となった「竜王水」が湧いている場所は、建物で囲われていて中は見るこ  
とができなかったが、特に感慨はなかった。

これも直感だが、ここは自分には縁のない場所だ、ということだけははっきり  
と分かる。

(無駄足だったな……。帰ろつと)

ほどよく小腹も空いてきた。

朝食はホテルのレストランで、恐らくは固定料金以上の量を食べてきたが  
(ビュッフェ式だったのである)、既に昼前という時間になっている。

どこで昼食をとろうかと思いをめぐらせていると、狭いあぜ道を向こうからヨロヨロと杖をつきながら歩いてくる老人が居る。

白髪頭は綺麗に整えられているが、長めの顎髭が、少々アンバランスな印象を与えていた。

沙龍はその老人がほとんど周囲が見えていないことに気付いていたので、狭い道路の端に身を寄せ、彼が行き過ぎるのを待った。

が、すれ違う頃になって、老人はやおら背筋を伸ばし、久しぶりに会う友に呼びかけるように言った。

「あれ。新助さんかい？」

他に行き交う人も居ないので、沙龍に対して言ったのは間違いないだろうが、「シンスケ」という名は恐らく男性のものだろうと沙龍は思った。

「……」

老人の視線は宙をさまよっている。すぐ横に居る沙龍を捉えることはできていない。

なにか言おうと思ったが、言葉がうまく出てこなかった。

こういう時、日本語ではどう言えばいいのだろう。

「いや、そんなはずはないか。新助さんは大連に行ってしまったきりで……。  
ん？ あれは、何年前かのう……？」

「あの……、爺々<sup>イエイエ</sup>？」

ためらいがちに話しかけてみると、

「ほほう、お嬢さんでしたか。申し訳ない」

老人はにっこりと笑ってくれた。

その表情にはどこか茶目っ気がある。

和装姿もよく似合っていて、気品もあつた。

「爺々、おうちはどこ？」

「うむ、すぐそこですわ。青い屋根が見えますかな？」

杖でそちらの方角を指すようにした。

確かに、青い瓦の日本家屋が田んぼの中に見える。

なら大丈夫か、と沙龍は思ったが、袖からのぞく皺だらけの手に大きな傷跡を見つけて、しばらくこの老人と関わることに決めた。

これは銃創なのである。老人の見た目の上品さとは裏腹に、若い頃の無茶ぶりを想像したが、年齢を考えて、すぐ思いなおした。

今から約六十年前、この国と沙龍の生まれ故郷は戦争をしていたのだ。

「家まで一緒に行くよ。手、引いてもいい？」

「ああ、お優しい小姐シヤオチエですのう。慣れた道ゆえ、一人でも大丈夫ですが、ここは折角のご好意に甘えましようか」

沙龍は老人の皺だらけの手を取って、ゆっくり歩き始めた。

「爺々は一人暮らしなの？」

「いや、息子夫婦と一緒にすわ」

「ふーん……。事情も分からないし、息子さんたちを悪く言うつもりはないけど、私の故郷では年老いた両親を大事にしない子供は地獄に落ちるって言われているよ」

「ホホウ、まだそんな地域もありますかな」

半分は作り話だが、沙龍は風林を目の前で亡くして以来、爺々イエイエと呼ばれるぐらいのお年寄りには弱いところがある。

お腹が空いていることはしばし忘れることにした。

「特に大事にもされてませんが、ないがしろにもされてませんか？」

「そうなの……？ ならいいけど……」

目も腰も悪そうな年寄りを一人歩きさせている時点でどうかと思うが、この人通りのない地域では、確かに交通事故の心配はなさそうだ。

「小姐は、やっぱり新助さんに似ているのう。娘さんか、お孫さんか？」

「えっと……、違うと思うけど、なにが似てるの？」

不思議に思っただけ。

その見えない目になにが見え、なにが似ているというのだろうか。

「さあ、なんですかのう。その息の吸い方ですかのう？」

なにやら謎めいたことを言う。

老人自身も、よく分かっていないようだった。

「新助さんも、面倒見のいい、優しいお人でした」

にこにこしながら言う。

「その、シンスケさんって言うのは、爺々の友達？」

「幼馴染みですな。机を並べて勉強した仲ですわ」

「そっか、いいね、そういうの」

沙龍は風林を相手にするような感覚で喋っていた。

だから、ところどころ中国語を使っていたのだが、老人は問題なく受け答えをしている。

沙龍の話す言葉など聞いていないのか、あるいは、中国語を理解しているか、どちらかだ。

「一高に入った頃までにはいい時代でしたわ。時間がゆっくり流れていましたね。しかし、忘れもしない。あれは昭和十八年の秋ですな。冷たい雨の中、東條閣下が訓辞を述べられましたなあ……」

「……」

沙龍もトージョーという名は知っている。老人がなんの話をしているのかは分かっていた。

家までの短い道のりを、老人は六十年前の青春の日々に行きつ戻りつ、語った。

「新助さんは大連で連絡が途絶えたんです。しかし、遺体は見つかってないから、ずっと行方不明のままですわ」

「爺々も、大連に行ったの？」

「いや、自分は徐州に……」

しかし、それ以上の言葉は続かなかった。

数秒の沈黙の後、青い瓦の家から中年の女性が出てきて、小走りに近寄ってきたのだ。

「お義父さん、なにかあったんですか？」

「いやいや、見たとおり、新助さんに手を引いてもらってるだけですわい」

「もう、心配させないでくださいよ。お一人での散歩は控えて下さいって——」

「……」

沙龍は、所在なげにその様子を見守るしかない。

老人は、女性に抱えられるようにして玄関に入っていた。

大理石の表札には「内藤」という文字が彫られている。

確か、興信所のスタッフにもこの名前の人が居た。この地域にはよくある姓な

のかもしれない。

あがりかまちのところ、和装姿の老人は腰をおろして、草履を脱いでいた。女性だけが玄関から出てきて、沙龍モウロクに会釈した。

「うちのお爺ちゃん、もうだいぶ耄碌もろうくしちゃって、記憶がねえ、昔のことと今のこと、ごっちゃになってるんですよ。すみませんねえ。あることないこと話すもんだから、ご迷惑だったでしょう？」

「いえ、私のほうが話相手になってもらってました」

「あらあら……」

確かにまだらにボケた感じはあるが、老人の意識はちゃんとこちらの世界にあるように見えた。

耄碌爺さんにしたがっているのは、この息子の嫁ではないか、とも思える。

しかし、それが世間体のためなのか、本心なのかは分からないが、彼女にも義父を労わる気持ちはあるようだった。

「目もほとんど見えてないのに、ああやって外に出たがるのよ。危ないからやめて下さいって言うてるのに……」



「もしかして、おじいさん、昔、武道かなにかをやってましたか？」

「ブドウ？ ああ、剣道は有段者だったみたいだけど、それもねえ、大昔の話ですよ」

「ああ、道理で……」

と、眩く。

老人の所作の端々には、老いたりとはいえ、どこかきびきびとしたスピード感がある。

今の女性の言葉が日本人特有の例の美学だとしたら、あの老人も「国宝級の剣聖」かもしれないな、とわりと本気で思う。

「見えなくても、見えてるんですよ、きつと」

「はあ……？」

沙龍の言葉は、この女性には響かない。

「ミヨさん、新助さんにあがってもらって。ほら、お隣さんからいただいた、若松屋の羊羹あつたでしょう」

玄関の奥から、老人が声をかける。

「はいはい。分かりましたよ」

ミヨさんはそう言っていたが、沙龍に対しては苦笑した顔を見せ、「うまく言っておくから。ありがとうね」

そっと耳打ちする。

沙龍もあやふやに笑って、その場を離れた。

閑散とした道が続く。

駅に到着する直前に、メールの着信音がした。

ランチを終えて休憩している水上が、午後の仕事に入る前にメールを寄越してきたのだろう、と見なくても分かる。

title: 甲府旅行はどうですか？

結局、お父さんの家は分からなかったと、部長から聞きました。

大丈夫ですか？

なにかあったら遠慮なく連絡ください。

title:Re:甲府旅行はどうですか？

無問題です。お気遣いありがとうございます。

ところで、チンジュノモリという言葉を知ってますか？  
なんのことですか？

title:チンジュノモリ？

鎮守の森のことかな？

神社めぐりでもしてるの？

鎮守の森っていうのは、文字通り、神社で神様を守るために植えられた木々のことだと思えますよ。

水上とのやり取りはそこで終わった。

沙龍がそれ以上の返信をしなかったからだ。

男の下心が分かるからこそ、無駄な話はいっさいするまい、と思っている。

ただ、その素っ気無さが逆効果になる場合もあるのだ。十七歳の沙龍はそれを知らない。

(ごはん、ごはん……)

十歳も年下の、猫をかぶっている少女にウツツを抜かしている男のことよりも、沙龍にとってはより大事で切実な問題があった。

一人で入っても怪しまれない、そこそこ美味なレストランというものは、田舎にはあまり、というか、ほとんどない、ということだ。

駅前の一軒しかない寿司屋に入ろうものなら、昨日のカフェで浴びた視線以上に不審な目を向けられること必須である。

かといって、ファーストフードはご免である。ハンバーガーを食べる気分ではない。

とりあえず甲府駅まで戻って、とある場所で用を済ませつつ、そこで、ついで

と一緒に食事をしてくれる人間を連れ出そうと思った。それなら一石二鳥である。

駅ビルの地下にある、興信所という看板はどこにも出ていない、ヤク中の男が二、三人くらいひそんでそうな事務所である。

ノックをしてから重たい金属製のドアを開けると、

「ああ、甲斐さん？ まだこちらにいらっしやっただんですか」

所長の中年男が腰をあげた。名を富田<sup>とみた</sup>という。

明らかに、さつきまで昼寝をしていた、という顔だ。この男が春日の高校の先輩らしい。

色々わけありの人物のようだが、「頭と腕は確かです」と春日が言うので、沙龍も信用することにした。もとより、沙龍も地下組織の頭でいたくらいだから、どういった人物かは一目見ればだいたい分かる。

その沙龍が見たところ、公権力を使う仕事に就いていた経験があつて、しかし、そこからドロップアウトし、今はわりと淡々と生きている——、といった具合だ。

そして、実際に、ひび割れたコンクリートの壁に、窓一つない（地下だからしょうがないのだが）暗い部屋で、一日中、こうやって雑誌のクロスワードを解いたりしているわけである。

「先日はどうもありがとう。もう一件、仕事を頼みたいんですが、いいですか？」

沙龍の「東京モード」はそこまでだった。

なるべく見聞きしたことを全部伝えなければ、と思ったので、記憶を忙しく呼び起こした結果、口調が端的になる。

「ええ、そりゃ歓迎です。ご覧の通り、暇な事務所です。おーい、内藤くん、お茶出してー」

この前、この一見怪しげな興信所に頼んだのは、遺産相続の関係で親族を探している、という内容だった。口実の部分は嘘だが、他には隠し事はしていない。

春日の紹介ということで、最初から上客待遇だったが、目的が果たせなかったにも関わらず、金払いはよかった。この所長の、沙龍に対する印象はいいはずである。

「頼みたいのは、今回も、人探しなんだ。でも、前みたいに、漠然としたものではなくて、今回はかなり絞られている。少し、ややこしいし、長くなるが、一言一句漏らさず聞いてくれ」

さつとメモ帳を取り出したのは、お茶を持ってきた内藤青年のほうで、富田はソファでのらりくらりしていた。

「まず、一人目の爺さん。姓は内藤。下の名前は分からない。年齢は恐らく八十前後。第二次世界大戦で徐州に行った経験あり。昭和十八年と言っていた。西暦は私には分からない。あと、剣道の有段者で、現在は息子夫婦と同居。住所は慈照寺の近所。番地は分からないが、ここだ」

と、沙龍は一枚の地図を、低いテーブルの上に置いた。  
手書きでしるしがつけられている。

「は、はい。ちよつと待ってください……」

「……」

青年はペンを走らせ、所長は沙龍をしげしげと眺めていた。

「この内藤爺さんの幼馴染みというのを調べて欲しい。といつても、当の本人は

恐らく数十年前に死んでる。しかも、大連でな」

「戦争で、ですか？」

内藤青年が顔をあげずに聞く。

「そう。軍人だったのか、召集されたのかは分からないが……。分かっているのは、下の名前はシンスケってことだけ。あと、イチコウってなんだ？ 内藤の爺さんが言ってたんだが、学校の名前か？」

「そのお爺さんの年齢を考えれば、旧制高等学校のことじゃないですかね。行けるのは、エリートだけですよ」

「ふーん……。ともかく、その一高ってところに、内藤の爺さんとそのシンスケさんは通っていたらしい。その後、二人とも戦争に行ったってことだと思う」

「大連と、徐州、ですね。この二つって近所でしたっけ？」

「アホか。だいたい離れとるがな」

内藤青年は所長に軽く頭を叩かれていた。

「すいません、海外は縁がないので。あとで勉強しておきます」

「その内藤の爺さんって、お前の親戚じゃないのか」



顎をさすりながら、所長が聞いた。

「多分違うと思いますけどー。内藤姓はわりと多いですからねえ。慈照寺の近所でしょ？ 聞いたことないなあ……」

「そうなの？ まあ、あそこ、田んぼだらけだもんね」

沙龍がおもむろに席を立つ。そろそろ空腹が限界だった。

「そんなに急ぎませんが、なにか分かったらすぐ連絡下さい。電話でもメールでもファックスでも。とりあえず、前金、十万くらい置いておきますね」

「……」

「……」

ポン、とリュックサックから札束が出てきたので、男二人は息を呑んだ。

そして、

「なんか……、この前お会いした時と印象が違いますね」

所長の富田が顎をさすったままそんなことを言っていた。

沙龍は「ああ、今は上海モードだからな」とわざわざ教えることはない。ただ、微笑みを見せるだけだ。

「あ、それと」

「はい？」

「お昼ご飯に付き合ってくれませんか？ 地元でも人気の美味しい店とか案内してもらえたら嬉しいんですが」

「そりやもう喜んで」

さつき、コンビニ弁当を食べたことなどすっかり忘れて、富田は上着を引っつかんだ。

「内藤くんは、早速、今の甲斐さんのお仕事、下準備しておきなさいね」

「え〜……」

恨めしそうな若者の声を残して、二人は地下事務所を出て行った。

7 春コートよりも激辛担担麺をください

東京に戻ってからは春めいた日が続き、半袖で外を歩いても特にじろじろ見られることはなかったが、よく行くようになった小さな中華料理店のおかみさんからは「寒くないのー？ 若いねえ」などに行く度にからかわれた。

おかみさんは日本人だが、調理場を仕切っているマスターは四川出身だそう  
で、沙龍も中国語を話したくなったら、ここに来るようになった。

歌舞伎町の隙間に建っているような雑居ビルの一階に、その小さな店はある。  
マスターは言う。

「ホームシックになったらいつでもおいで」

しかし、今のところ、沙龍には故郷を懐かしむ気持ちはあっても、「帰りたい」と思うことはなかった。多分、自分にはその感覚は一生分らないのではないか、とも思う。

四月になってから、甲府の興信所から連絡が来て、内藤翁と「シンスケさん」

のことが少し判明したという報告があった。

それによると、内藤翁の本名は内藤虎之助<sup>とらのすけ</sup>。

一九二三年生まれで、現在は七十五歳。

一九四三年（昭和十八年）、旧姓高等学校を卒業した二十歳の時に学徒出陣により出征。日中戦争渦中の上海に渡る。

何度目かの徐州での作戦遂行時、敵の銃弾を受け、帰国。

以降は怪我のリハビリを兼ねて、甲府市の郵便局に勤める傍ら、幼い頃から続けていた剣道に邁進する。

見合い結婚をしたのは終戦からだいぶ経った、三十五歳の時で、翌年に一人息子となる昌行氏が誕生。

仲睦まじい夫婦だったようだが、長年連れ添った妻は三年前に亡くなっている。その直後から、たまに記憶が混濁するようになったようである。

息子の昌行氏は、現在、三十九歳。地元の信用金庫に勤めていた。

そして、問題の「シンスケさん」の方は、内藤虎之助の同級生に該当者は居なかったと前置きして（高校だけでなく中学の方も調べてくれたらしいが）、もし

かしたら学年が一つ上の斎藤新助のことではないか、との報告があった。

(サイトウか……)

なんとなく「シンスケさん」は甲斐家の人間なのかもしれない、と思ったのだが、事態はそこまで都合よくいかないものだ。

ただ、斎藤新助については、年齢も出身もよく分からないということ、それから六十年前のこととはいえここまで分からないケースも珍しい」という富田のコメントがあった。

それが、沙龍にも引つかかった。

地方の興信所では手段にも限界があるだろうと思い、東京に同業者の知り合いが居るなら連携してもいいと許可を与え、引き続き何か分かるまで調査を頼んだ。

携帯電話から富田にメールを送信し、沙龍の本日の仕事は終わりである。

あとは、目の前の担担麺をいただくばかりだ。本場四川の味を再現した、マスター自慢の、汁なし担担麺である。この店のメニューの中でも一番辛いという売りだ。

四川料理に辛いものが多いのは、内陸で高温多湿という土地柄のせいだとい  
う。沙龍の育った湖北や上海にはない味だ。

「からくておいひい……」

しばらく無心で食べた。

場所が場所だけに、沙龍が担担麵をすすめる間にも、この店には入れ替わり立ち  
替わり様々な人が現れ、去っていく。

四川出身らしき風俗嬢、疲れきった顔のホスト、背広姿の中年たち……。

留学生もよく見かける。大学生っぽい姿はだいたいチャイニーズだが、たまに  
日本人の貧乏学生も来る。

沙龍はカウンターの隅っこでもくもくと食事をしていることが多い。

客の中には茶髪や金髪、中には紫色の髪をしたバンドマンなども居るので、沙  
龍の明るい髪の色も目立たずに済む。

このベージュ色の髪は生まれつきで、何故、黒髪の両親からこの色になるの  
か、不思議でしようがない。

加えて、りよくしょう緑青の瞳は、そこだけ見ればもう東洋人とは思えないのだが、顔

の各パーツと配置は、紛れもなく東洋系であることを物語っている。

沙龍のイメージがどこか浮世離れして見えるのは、この髪の色と瞳の色のせいだろう。

「フウ、ごちそーさま！」

大盛りの担担麺と回鍋肉ホイコーローを平らげると、満足そうにお腹をさすった。

おかみさんが食器を下げにきたついでに、世間話をする。

「今度は、いつも連絡取ってるカレシも連れておいでよ」

「え？ カレシじゃないよ？」

と言っても、信じてもらえない。

「またまた」

携帯電話からメールを送ったり、通話している相手は毎回同じ人物ではないし、その全ては百パーセント仕事の話なのだが、年頃の女の子が携帯電話をいじっていれば、そう思われるのだろう。

「もうすぐ学校が始まるから。友達ができたら連れてくるよ」  
と、沙龍にしては少々自信なさそうに言った。

家族は最初から居たし、部下はなんとなくできたし、疑似恋愛の相手に事欠くことはなかった。が、友達はどうやって作るのだろう。それがまったく分からない。学校に行ったことはないのです、同年代の男女と親しくなる機会はなかったのだ。

食後のジャスミン茶を飲みながら、沙龍は狭いカウンターで手紙を書いた。マンションで、一人、辞書を引きつつ書くのもいいが、おかみさんや常連の先生さんに聞いたらすぐ教えてもらえる、というこの環境はとてもありがたかった。

俊先生へ

お手紙ありがとうございます。

東京はぽかぽか陽気の日が続いていますが、函館はまだまだ寒そうですね。

知り合いにモンゴル出身の人が居ましたが、やはり、冬は零下二十度や三十度



が当たり前なのだそうです。

外で沸騰したお湯をブワッと投げると、一瞬で氷になるという話です。私は寒さは結構平気なので、ちよつとやってみたいですね。

昨日は、新宿御苑というところまで散歩してきました。桜が満開で、綺麗でしたよ！

一緒に行く人が居ればもつと楽しいのかな、と思いました。でも、カレシは要りません。

意外に思われるかもしれませんが、初恋の人に振られて以来、恋愛は食傷気味です（この言い方、よく行く中華料理店の常連さんに教えてもらったんですけど、合ってますか？）。

もうすぐ学校生活が始まるので、ちよつと緊張しています。

というのも、実は、事情があつて、学校に行くのは生まれて初めてなのです。楽しみでもあり、不安でもあり、不思議な気分です。

俊先生も、私に友達ができるように祈っててくださいね。

再見！

## 甲斐馨

書類一式と制服が届いて、いよいよ明日から登校、という日、水上が「編入祝い」を届けにきた。

というのはただの口実で、要するに、素っ気ない沙龍に対し贈り物攻勢に出たということなのだろう。

沙龍はそろそろ鬱陶しくなっているのだが、なるべくサラリーマンたちには猫をかぶり通そうと思っていたので、ごく常識的な（と思える）対応をした。

とりあえず、部屋に上がってもらって、水上の持ってきた大きな紙袋とその中の柔らかい包みを開けた。

感触からして衣服だろうとは分かっていたが、

「あ……」

（だ、だせえ……）

まさか、北欧の美少女が着てそうな真っ白なコートだとは思わなかった。

一見して、素材もデザインもよいものだとは分かるが、いったい、どこをどうしたら、こんなコンサバスタイルが沙龍に似合うと思ったのだろうか。

それとも、これが彼の趣味なのだろうか。

「余計なお節介かと思ったんだけど、甲斐さん、いつも寒そうな格好をしてるから。もうだいぶ暖かくなってきたけどね」

「ありがとう」

と、なるべく棒読みにならないように言ったつもりだが、いざ、期待に満ち満ちた子犬のような目をした水上の手前、そのコートを羽織ってみると、

(あ、暑い……)

顔が引きつる。

姿見に映る、白いコートを着た自分は、侵略先を間違えた宇宙人かなにかにか見えないう。

家具を選んだセンスはよかったのに、なぜ、洋服だところなるのか。不可解である。

「日本ではこういうの、流行ってるんですか？」  
なるべく嫌味にも皮肉にもならないように言った。

「え……？」

やはり、通じていない。

「えーと、私にはあまりこういうの、似合わないような気がするんですが」  
「そうかな？ よく似合ってると思うけど……」

本気で言っているのだろうか。

どう見ても、コートに「着られてしまっている」のに？

（大体、こんな白いコートじゃ、担担麺も食べられないじゃないか）

担担麺は、真っ赤な唐辛子を跳ね散らして食べるのが美味しいのである。

そう思ったら、急にお腹がすいてきた。

水上が帰ったら、あの中華料理店に行こう、と思ったのだが、その後、何故か都庁の付近まで連れて行かれて、豪華な洋食店で、味のよく分からないフランス料理を食べるはめになった。当然、無言の圧力があつたので白いコートを着ていったのだが、正直、暑かった。

「誤解なきように言っておくと、いつもこんなところに来てるわけじゃないよ？」

そんなことを言っていたが、つまり、今日はデートだから奮発した、ということだろうか。

水上は、強気で押してくるわけでもなく、彼自身も、沙龍との距離感を計っている最中なのだろう。

なにを喋ったのか覚えていないほど、あたりさわりのない時間を過ごし、今日ばかりはかぶっている猫が重かったのか、マンションに戻った時にはぐったり疲れていた。

風呂上りに缶ビールを飲んで、そのまま寝てしまおう。

それは上海で覚えた、ストレスを溜めない方法の一つだった。

8 美少年はご機嫌斜め

入学式や始業式が行われる四月の第一週には、桜は大体散ってしまうというが、今年は開花がずれ込んで、今日はほぼ満開といっていい咲き具合だった。三月中に何日か冷え込んだ日があったせいだろう。

沙龍は真新しい紺色の制服を着て、やや上を見ながら歩いていた。沿道の桜の木に、ヒバリがとまっているのである。

ヒバリは「春を告げる鳥」といわれている。この季節にはどこにでも居る鳥だ。

(あれを、どうやって失神させるって……?)

完全に足を止めて、高い枝を見上げた。

(だいたい、鳥の急所ってどこよ……?)

皆目、見当がつかない。

人体ならいくつかの急所がすぐ思い浮かぶが、鳥類の特殊な骨格でどこが弱い

のかなど、考えて分かるものではない。

それに、そもそもなぜヒバリを気絶させなければならぬシチュエーションになったのだろうか。まさか、子供のように技自慢をし合っていたわけではあるまい。

「……」

しばらくじっと動かなかった沙龍が、おもむろに太極拳のような動きでゆっくり片足をあげ、木の幹につま先をつけた時、

「その木にその格好で登るのはやめたほうがいいと思うんだが？」

横手から制止ともつかぬ声が聞こえた。

沙龍は、チラ、とそちらを見ただけである。

ネクタイが見えたので、どこかの若いサラリーマンだろうと思った。

「区役所の街路保全課のスタッフじゃないならちよつと見逃してくれ。なにもこんな『やわい木』によじ登ろうってんじゃない」

沙龍は、桜の樹皮が比較的脆くて、傷つきやすいことを知っている。

それ故に、日本人がこの木の保護に敏感であることは知らないが、それでも、

片足を触れさせながらも「登る」つもりはなかった。

「君はなにを言つて……」

彼が言い終わる前に、沙龍は予定の行動を終えていた。

もし、彼が優れた動体視力を持っていなければ、沙龍が今なにをしたのかわからなかっただろう。

(……うそだろ?)

それでも、木佐小次郎は今見た光景が信じられなかった。

桜の木はすぐ横にあるビルの三階ぐらいの高さはある。つまり、到底、人がジャンプして届く高さではない。

それを、彼女は助走もなしにたった二歩の足場だけで跳躍したのである。

しかも、

「イテテ……！ なにも食おうってんじゃないから、暴れるなって、コラ！」

沙龍の手の中では、パニツクになったヒバリが暴れている。

木の幹を軽く蹴っただけで、高い枝にとまっていた小鳥を素手で捕獲したのだ。その身体能力は驚異的を通り越して、もはや非常識である。



「捕らわれの身になっても生き抜こうとするその根性には敬意を表するが、人間の力にはかなわないんだってば」

手は既に何箇所か血がにじんでいる。が、沙龍は落ち着いて、ヒバリのくちばしを二本の指で押さえた。

つつくことと鳴くことを封じられながらも、ヒバリは暴れることはやめない。

「……」

木佐は啞然としたものの、自分にも同じことができるだろうかと自問する冷静さはあった。

桜の木の天辺を見る。視界は満開の花で覆われているが、よく見ると、ヒバリが停まっていたであろう、わずかに揺れている枝が判別できた。

（あの高さまで、助走なしで？）

（……いや、体の重さを考えれば、どうしても助走は必要になる）

ひとまずそう仮定し、次に、ヒバリと格闘している小柄な沙龍を見た。

木佐自身、それほど身長が高いわけでもないのに、見下ろす低さである。つむじが見えるというのが新鮮だ。思わず、地球外生物を観察するようにまじまじと

そのつむじを見つめてしまった。

そして、思うことといえば、

(このサイズだからできた、ということか……)

それくらいである。

「で、君はその小さな生き物をどうしたいんだ」

木佐が聞いてきた時、沙龍はやつと彼が着ているものが制服であることに気付いた。自分が着ているのと同じブレザーである。

ただ、美少女コンテストに出場したら、文句なく優勝できそうな綺麗な顔をしているものの、彼がはいているのはスカートではない。

「……ちよつと実験を」

今度は、沙龍がしばし木佐を見つめた。

なんと答えようか悩む振りをして、端正な顔に見惚れていたのだ。

といつても沙龍は面食いではない。顔の綺麗な男は絶対なにか欠陥がある、とかなり偏見気味に思つてさえいる。

沙龍がそれ以上答えないので、木佐は顔の筋肉は口のまわり以外はこのまま一

生動きません、という調子で言った。

「さつき、新宿駅で道を聞いたよな？ どうして、あれから一時間も経っているのに、まだこんなところをウロウロしてるんだ？」

「え……？」

半分くらいは聞き取れなかった。早口というわけではないのだが、明らかにネイティブを前提にした喋り方だ。こうなると、沙龍にはよく分からない。

水上や春日の言葉が分かるのは、彼らが公共放送のアナウンサーのように喋ってくれるからである。

「覚えてないのか。身体能力は高いのに、頭は悪いんだな」

彼はなぜこんなにも不機嫌で挑戦的なのだろう。

もし、この道路が私有地で、この桜が彼が生まれた時からずっと愛でている木だというのなら、この不機嫌さも分からなくもないが、恐らくそうではあるまい。

（朝ごはん食べ損ねて機嫌が悪い、とかかな？）

自分だったらそれしかないので、そう考えたまでのことだ。

沙龍はたいして応えていない。母国語で言われない限り、愛の告白をされようが、喧嘩を売られようが、ピンとこないものである。もとより、他人にないを言われようと気にする沙龍でもない。

「今日はもう三十五人くらい、同じ制服の人に道を聞いたもんだから、一人一人の顔は覚えてないんだよね」

と、言っているが、実は沙龍は木佐を覚えている。

董天に言わせれば、そのあたりが「香港人たちに影響されてしまった」沙龍の性格の悪さなのだが、それは木佐の知るところではない。

沙龍曰くの「三十五人」の中でも、木佐小次郎の顔は、ひとときわ印象に残った。

なぜといわれれば簡単で、目を見張るほどの美少年だったからである。

「三十五人？ 数えたのか？ いや、それよりも、そんなに方向音痴なのか？」

「いや、多分、違う」

そう言うと、木佐は初めてわずかにだが眉を吊り上げた。

「どうしてそこで『多分』がつく」

「うーんと……」

説明しようとしたのに木佐はそれを制止し、沙龍の手の中でまだ暴れていたヒバリを取り上げると、どんな魔法を使ったか知らないが、それを嘘のようにおとなしくさせてしまった。

「……!？」

今度は沙龍が驚く番だった。

ヒバリは、完全にフリーな状態で、手乗り文鳥のように木佐の手の上にとまっている。

きよとん、と木佐の顔を見上げ、何度か首を動かしていた。

「君の事情に興味はないが、動物の命を使ってまでする実験なのか？」

「いや、殺すつもりはないよ。気絶させる方法を考えてたんだ」

「気絶させる？　こんな小さな鳥を、か？」

「そう」

「……」

木佐は眉間に皺を寄せたまま絶句した。わけが分からない。

「つまりね、そういう技を持っている人が居て、私にもできるかな、と思って」  
「……」

このご時勢に、宮本武蔵に無理難題を押し付けられた伊織のようだな、と木佐は笑いたくなくなったが、顔の筋肉を緩めることはなかった。

もうずいぶんとこの無表情を貼り付けたまま過ごしている気がする。それが不機嫌に見えようが、無愛想だと言われようが、どうでもよかった。

「そうか……」

木佐は、沙龍の言葉足らずの説明を信じた。

命をもてあそぶつもりはないということが分かったのだろう。

だから、ペットのように大人しくなったヒバリを、沙龍に返そうとしたのである。

が、そこでヒバリは我に返り、自分が野生であることを思い出したのか、パツと羽を広げて空に帰っていった。

「あ……」

「まあ、そうなるよな」

二人で、ヒバリの軌跡を見上げる。

「いったい、いまのはどうやって——」

沙龍が魔法の詳細を聞こうとしたところで、後ろから幼い感じの男性の声があった。

「木佐さーん」

同じ制服を着ているので、下級生だろう。

木佐に負けず劣らず綺麗な、というよりは、アイドルのような可愛い顔をしていた。

「おはようございます！ 春休み、どうでした？ あ、桜満開ですね！」

大好きな先輩に久しぶりに会えたのが嬉しくてしょうがない、といった感じで少年はまくしたてた。

沙龍の存在は、見えていないか、無視しているのだろう。

「相変わらず遅刻ギリギリにしか来ないヤツだな」

「木佐さんも今日はだいぶごゆつくりですよね？」

「まあ、ちよつと駅で用があつたから」

「フーン……？ あ、今日、部活でます？」

「明日の説明会の準備があるんだろう？ 顔は出すさ」

「……」

沙龍は早くもこの時点で、少年の恋に近いまなざしを理解したし、それを半分受け入れている木佐小次郎のずるいスタンスも理解した。

二人が行きかけたタイミングを狙って、

「〃キササン〃」

少年が使った音程そのまま呼びかけてみた。

「……なんだ？」

木佐小次郎の端整な、そして不機嫌な顔が半分振り向く。

「これあげる」

差し出して、強引に渡したのは、さつき、コンビニで間違えて買ったあんパンである。

本当はカレーパンが欲しかったのだが、よく見ずに買ってしまったのだ。

「もう少し、血糖値あげたほうがいいよ」



そう言うと、木佐と少年を追い抜いて行ってしまった。

「なんです？ あれ」

少年が不可解な顔で聞く。

「よく分らん」

が、少なくとも敵ではなさそうだと木佐小次郎は思った。

一日のうちに三度同じ人に会うというのは、なかなか運命的だ、と沙龍は思った。しかもまだ朝の八時過ぎである。

教室に入ると、窓際が一番後ろの席で木佐小次郎が難しい顔で本を読んでいた。

哲学書でも読んでいるような顔だが、表紙を覗き込んでみると「剣」という文字が見える。時代小説のようだ。

そのあからさまな態度に、木佐は表情を変えることもなく、邪魔するな、という手の一振りでも沙龍を追っ払った。

(クールボーイか)

しかし、黒板に貼られた表を見に行くと、自分の座るべき席は、木佐の前である。

この時、初めて沙龍は木佐のフルネームを知った。

(フム、木佐小次郎、ね)

日本には、昔、実名を避けたり、尊ぶ習慣があったはずなのに(それは中国伝来だとする説と、日本古来の考え方だとする説がある)、それらの精神は現代ではほぼ失われている。唯一残っているのは天皇を名前で呼ばないという習慣くらいだろう。

しかし、中国の特殊な山村で育った沙龍にとって『諱<sup>いみな</sup>』の意味は大きい。誰かの本名を知れば、尊ぶ気持ちもあるが、同時に、「一步優位に立った」とも思う。

名前は色んな情報も持っている。例えば、両親がよっぽど偏屈でなければ、木佐小次郎には兄がいるはずである。それは「次」という字で分かる。

では、自分はどうかだろう。

『李沙龍』も『甲斐馨』も本名ではない。沙龍に本名はない。それが、また、沙龍にとつての強味にもなっているのだ。

「よろしく、”キササン”」

そうやって、椅子に横向きに座ったが、木佐は反応しない。

構わず続けた。

「クールなの？ シヤイなの？ あ、あんパン食べた？ 食べてないよね？ 糖分取らないと、頭も体も動かないよ？ 姉の受け売りだけど」

「……」

「それとも、その無愛想な顔は糖分欠乏症のせいかと思ったんだけど、もしかして元々そういう顔なの？」

「……」

反応なし。

仕方ないので、教室の様子を観察した。

私立高校らしい、それなりにお金をかけた部屋である。リノリウムの床に、クロスが貼られた壁。空調システムも完備されていて、沙龍はまずそれに驚いたも

のだ。

机などもボロボロにささくられたものを想像していたが、パイプ椅子も机も新品のように綺麗だった。

四十人ほどのクラスで、もう半分以上の生徒が来ているが、立ち話している者、イヤホンで音楽を聴いている者などさまざまで、空気は雑然としている。ほのかに緊張感も漂っているのは、新しいクラスだからだろう。一学年には八クラスほどあるし、毎年クラス替えをしているので、クラスメイトたちも互いに知らない人が多いのかもしれない。

ただ、木佐小次郎はやはり有名人であるようだった。それは、沙龍がさきほど木佐に話しかけた時に感じた、遠巻きの視線でなんとなく分かった。

沙龍の前の席に座っているのは女の子で、アメリカ人のように気軽に話しかけてみると、こちらは笑顔で応じてくれた。ショートカットのスポーツ少女風の子だ。

「小川タマミです。よろしくね、甲斐さん。もしかして転校生？」

「うん。なんで分かる？」

「だってカバンがすごい綺麗。三年目になるとみんなクタクタだもん」と、沙龍の机の横にかけてある新品の鞆を指した。

「ああ、これか。なるほど」

ナイロン製の学校指定鞆は、他の子のを見ると、確かにみんなヨレヨレになっている。端っこが破れかけだったり、カラーマーカーでラクガキがしてあったりで、使い込まれた感じがすぐに分かる。

日本人は平和ボケして、注意力も散漫かと思っていたが、この子はけっこう観察眼があるんだな、と思った。

それともこれは「周囲と違うもの」をすばやく見抜くスキルの一つかもしれない。

「転校生じゃなくて、編入なんだけどね」

「ああ、頭いいんだね！」

「……？」

沙龍が不思議な顔をする、

「だって編入試験受けて入ったんでしょ？　うちの学校、編入試験は入学試験の

倍は難しいって話だし」

そう説明してくれた。

しかし、沙龍は実際には編入試験を受けて入ったわけではない。そのあたりは、上海のスタッフがお金の力でどうにかしたのだろう。小川タマミには「それでもないよ」などと言ってしれつと誤魔化した。

しばらくすると教師が現れ、みなが席についた。

沙龍は転校生のように壇上に立たされて自己紹介をさせられることもなく、担任の教師が出席を取る際に「あ、編入してきた方ですね」と言って、周囲にもそう告知して終わった。

その後、体育館に移動して、始業式が始まったが、校長の話は退屈で、誰も真面目に聞いていない。沙龍も三十分を寝て過ごした。

教室に戻る段になって、小川タマミにこっそり聞いてみた。

「ところで、教室で私の後ろに座っていた人は、ずっと不機嫌な顔をしてたけど、ああいう人なの？」

「ああ、木佐君？　いつもああだよ。近寄りたかいていうか。まあ、学年一の

秀才だからね。頭のいい人はなに考えてるか分からないよ」

「ふーん……」

「あの顔だから、女の子からはモテるらしいんだけど、誰かと付き合ってるかは聞いたことないな」

「ふーん……」

「え？ なになに？ 編入初日にして気になっちゃった？」

「いや……。そういうんじゃない。初めて『薄くない』人に会ったかなーって」

「『薄くない人』？ 印象が、ってこと？」

「うーん……。まあ、そういうことかな」

水上も春日も、二週間も会っていないと顔が思い出せない。

保科悠に至っては、一度しか会っていないので顔も忘れた。しかし、『俊先

生』は一度も会っていないのに、思い浮かぶ顔がある。繊細で、優しげで、子供としゃべる時はかがんで目線を合わせる。そんな人物像が既に沙龍の中ではできあがっていた。

が、木佐小次郎はそれ以上に存在が鮮明だ。今日から一ヶ月間学校を休んでも、木佐の顔を思い出せる自信がある。

「今日はホームルームやって終わりだよ。学校、案内してあげたいけど、私、部活に出なきゃいけないんだよね」

「部活？ 陸上部？」

「えー、なんで分かったのー？」

小川タマミはけらけらと笑った。

言われ慣れているのかもしれない。

「いや、イメージまんまだから」

テレビで芸能人が言っていたフレーズをそのまま使った。

こういう軽い会話で使うのだということも分かっている。

「甲斐さんも、足、早そうだよね？ 興味あったら見に来て。見学だけでも歓迎だから！」

教室に戻ってから二人で話していると、数人のクラスメイトが寄ってきて、沙龍は他の部活にも色々誘われた。思わぬ人気ぶりである。



三年になると部活をやめて受験勉強に専念する人が多いので、勧誘スタッフは躍起になるのだという。彼らの主な任務は新入生の獲得であるが、編入生などもいいカモなのだそうだ。

沙龍は、一週間くらい色々見てから決める、と答えておいた。本当は部活動に参加する気はなかったのだが、どうせなら高校生活を隅から隅まで満喫するのもいいかもしれない、と思った。

この雑談の中で、小川タマミは周囲から「タマちゃん」と呼ばれていて友達が多いということも分かった。

「といっても、三年は、部活は夏までだぞ？」

右隣の席に座っている男子が言った。背の高い、眼鏡君だ。

「そうなんだよねー。実質、あと四ヶ月しか部活出来ないのがなんとも悲しい」

「タマちゃんは陸上の申し子だなあ」

「まあ、体育大に行こうかなと思ってるくらいだからね」

この騒がしい中でも、木佐小次郎はずっと本を読んでいた。

確かにこれでは近寄りがたい。勇気を持って近付く者が居ても、冷酷な手の一

振りでハエのように追い払われるのがオチだろう。

「……」

そういえば、木佐はなんの部活に入っているのだろう。今朝出くわした少年は部活の後輩という感じだったが、二人がサッカーや野球をやっている姿は想像できない。

（あ、文化系もあるのか）

今朝もらった、学校案内の一覧を見ながらそう思った。美術部や演劇部、囲碁や将棋などといったものもある。

「へー……、麻雀はないのかなー」

沙龍がぼそつと言ったその言葉で周囲が一瞬、シン、と静まりかえってしまった。

なにか変なことを言ったのだろうか、と思う前に、

「君は麻雀できるのか？」

集団の話など聞いていないだろうと思っていた木佐が、意外にも、関心を持って聞いてきた。

が、それに対する沙龍の答えがまたとんでもなくズレていた。

「まあ、一財産くらいなら作れるかな……」

「……」

タマちゃんは半分口を開けたままになっている。

「あ、こういう場合、日本的には『牌の並べ方なら知ってる』とか言ったほうがいいんだっけ？」

「僕はそういう謙遜、嫌いだけどね」

木佐はそれだけ言って、また本に戻ってしまった。

翌日から、沙龍がしばらく『流離いの雀士』と呼ばれるようになったのは言うまでもない。

9 世の中ギブアンドテイクだから私はパンダになります

学校が始まると、当然のことながら、毎朝決まった時間に起きなければならぬし、きちんと制服に着替えて通学しなければならぬ。

上海でやっていた「きのう夜更かししちやったので今日はサボる」は通じないのだ。

それは、心得ているつもりだった。いくら贅沢に慣れた沙龍でも、わがままの通じる場所と通じない場所があることくらい分かっている。

早起きも通学も、一応、なんとかなるだろう。通学に関しては、過保護な上海のスタッフが「歩いて行ける距離」と指定したので、電車通学に比べればはるかに楽ができるはずである。

しかし、朝食については多少の贅沢は言わせてもらおう、と沙龍は二日目にして思った。

自分で作るという選択肢がない以上、どこかで買うしかない。

しかも、しつかり一人前以上を食べなければ、昼前にお腹が空いてしまう。クラスメイト数人に聞いてみたら、

「え？ 朝は食べないよ」

「俺は、コンビニか購買のパンだな」

「お母さんが作ってくれるけど、寝坊しちゃうと食べられないね」  
そんな答えが返ってきた。

「購買？ 学校で食べ物売ってるの？」

どこの外人だ、と言われそうだが、それは沙龍には驚きの事実だった。

「うん。コンビニより安いよ。その分、種類は少なかったり素朴な味だったりするけど。見に行く？」

ということ、タマちゃんと眼鏡男子に購買部を案内してもらった。

一階廊下の突き当たりだ。三畳ほどのスペースが売り場になっている。

本来は、学用品を売る場所なのだが、食べ物ラインアップもそこそこ充実していた。パンやおにぎりだけでなく、カップラーメンやちよつとしたインスタント食品まで売っている。

「俺のオススメはメンチカツバーガーかな。一番、腹持ちがする」

眼鏡の須藤君が言った。彼はバスケット部のキャプテンらしい。沙龍と並ぶと親子にしか見えないほどの身長差がある。

「まあ、でも、ここはスタンダードにこれでしょ」

と、こちらは陸上部のエース、タマちゃんがやきそばパンを手にとって、早速、買っていた。

自分用かと思いきや、編入祝いということで、そのやきそばパンを沙龍におごってくれたのだ。

「あ、ありがとう」

気恥ずかしい、というのはいくつを言うのだろうか。

嬉しいような、照れるような心地でサラララップにぴったりと包まれたやきそばパンを大事そうに受け取った。

昨日の木佐小次郎はあんパンを迷惑だと思っただろうか、それとも、今の自分と同じような気持ちになったのだろうか。表情の死んだ顔では、それは分からない。

朝のホームルームまで時間があつたので、早速、教室に戻ってやきそばパンを食べてみると、これがまた素敵なB級グルメだったので、すっかり気に入ってしまった。

学校というところは至れり尽せりだな、と沙龍は思う。保健室があり、購買部があり、図書館がある。特に、日本という資本大国の、首都東京の私立高校とくれば、恐らく、ここは地球上で一番充実した教育施設だろう。

今日からの授業で使う教科書には一通り目を通して見たが、それほどチャンピオンカンペンにならずに済んだ。

ところどころ分からない日本語があるのはしょうがないとしても、上海で受けた教育はかなり世界基準に沿っていた、ということが分かる。

体育と英語と、選択授業で取った漢文などは問題なく単位が取れるだろう。沙龍の得意分野である。

問題なのは、難解な現代文や、スキルが絶望視される家庭科、または美術、音楽といった芸術方面で、そのあたりのセンスは壊滅的だと自負している。

やきそばパンを食べ終えた頃、クラスメイトの一人が話しかけてきた。

「甲斐さん、うちへの入部の件、考えてくれた？　昨日も言ったように、幽霊部員でもいいからさ……」

廊下側の一番後ろの席に座っている女の子で、名前は確か、渡部ユウコ。わたべ

大人しい印象だが、わりとはつきりした喋り方をする。昨日は、演劇部の副部長だと自己紹介して、一番熱心に沙龍を誘ってきた。

なんでも、演劇部は、今期、新入部員が居なければ廃部にすると学校側から通達されているらしい。現在は部長と、副部長のこの子しか居ないのだとか。

「うーん……。名前を貸すだけでいいなら入ってもいいんだけどさ、それじゃ抜本的解決にならない？」

「バツポンテキ」

聞き慣れない言葉なのか、渡部ユウコが繰り返した。

「ん？　おかしい？　つまり、ワタベさんとしては演劇部の存続だけを願ってるの？　違うんでしょ？　お芝居ができなきや意味がないんでない？」

「まあ、それはそうなんだけど……」

「一年生は入ってくれないの？」



「どうだろう。今日の昼休みに、部活の説明会があるんだけど、去年なんか、うちのブースには誰も来てくれなくて、みじめだったよー？」

「勧誘なんて、適当に『今なら入会金タダ！』とか言ってくれば、新入生は引つかかってくれるんじゃないの？」

「どこの悪徳詐欺師よ」

渡部ユウコが神妙な顔を一変させて笑った。

笑ったほうが確実に魅力的なのだが、本人は普段、まるでそうあるのが義務とでも言わんばかりに硬い表情をしている。

芝居でしか喜怒哀楽を素直に表現できないタイプかもしれない、と沙龍は思った。

「その説明会とやらは体育館でやるの？ 各部ごとに机並べて？ 就職説明会みたいに？」

「うん、そんな感じ」

二人とも就職説明会に行ったことはないが、ニュース映像などで知っているという事だろう。

「運動部の人たちはみんなそれぞれのユニフォームを着てやるし、凝ってるところはブースに飾りつけとかもしちゃうんだ。美術部なんかはすごいよ。三分であなたの似顔絵描きます、とか、そういうサービスもしちゃうの。ああいうのやられると弱小部は太刀打ちできないね」

「へー。そんなに熱が入るんだ」

「部員の数で部費の配分が決まるからね。そりやもうみんな必死よ」

「ああ、なるほど……」

金絡むのならそうだろう。

いかにも私立校らしい。

「うちは、去年『タイタニック』のコスプレして出席したんだけど、衣装が地味すぎて気付いてもらえなかったんだよね。あれなら、パンダの着ぐるみのほうがマシだったかも。そういうところで奇をてらってもしょうがないんだけどさ……」

「パンダ、いいじゃん。文字通り、あれは居るだけで客寄せになるよ？ どこに行っても」

「でも、今日は一人でやらなきゃだし。さすがにそこまで勇気ないわ」

「部長さんは？ 説明会に出ないの？」

「あー、部長ねー。隣のクラスの男子んだけど……。なんか、間抜けにも、昨日の通学中に自転車に轢かれたとかで、肋骨折って、入院してるみたい。自転車よ？ 自転車。しかもママチャリ。もうバカじゃないの、ってさんざん電話で言っただけ」

「……………ふ、ふーん」

そこで予鈴が鳴ったので渡部女史は「じゃ」と言っただけで自分の席に戻った。

結局、ちゃんとした返事はできなかったが、入部期間は一週間あるので、入るにしろ入らないにしろ、じっくり考える時間はあった。

ひとまずは、今日の昼休みの説明会とやらを覗きにいくつもりだ。主に新生向けの説明会なのだが、二、三年生でも転部する者が若干数いるので、全学年参加していることになっているらしい。

二人のやりとりが聞こえていたであろう木佐は、一切関心はございませんといった表情で、今日も朝から本を読んでいた。

沙龍はそこでもくるり、と向きを変え、

「キサさんはなんの部活に入ってるの？」

後ろのクールボーイに果敢に聞いてみた。

沙龍が木佐にこうして話しかける度に、遠巻きの視線を感じるのだが、その内容も一種類ではなく、「うわー、あの変わり者によく話しかけられるな」という野次馬的なものから、羨望、嫉妬、といった不穏なものまである。よくも悪くも注目されている人物なのだ。

木佐は視線もあわずに言った。

「華道部」

それ以上口を動かす気はない、という答え方だ。

「カドーブ？」

なんのことか分からなかった。

部活の一覧表を見てみるとそれらしい文字列は一つしかない。

（華道部……、これかな。ん？ 花？ 花でなにするんだ？）

日本独自の伝統なので、沙龍は生け花というものを知らない。

「興味があるなら……」

と、木佐が仏頂面のまま言う。

「まあ、満開の桜の下で、花よりも鳥を気にするくらいだから、ないとは思  
う  
が」

「は、はあ……」

「僕も説明会には出る。気が向いたら聞きにくるんだな。うちも演劇部と同じで  
閑古鳥が鳴いているから、建前では新入部員は歓迎している」

「本音では？」

「部活存続の必要条件は満たしてるから、個人的には、運動部向きの人間は要ら  
ないな」

「そすか……」

けなされたのか、褒められたのか、まるつきり分からない物言いだ。

ただ、この動かない表情のせいで誤解しそうになるが、彼に悪意はないよう  
だった。

「それよりも、甲斐さん」

「……」

あ、自分のことか、と今更ながらに反応が遅れた。

他の人間からそう呼ばれるのと、この美少年から呼ばれるのではなにかが違う気がする。

「なに？」

「聞きたいことがある」

「うん」

それも当然だろうな、と沙龍は思っていた。

昨日、目の前であんな曲芸をやってみせたのだから、宇宙人疑惑でも持たれて根掘り葉掘り追求されてもおかしくない。

「なぜ三十五人も人間に道を聞いたりしたんだ？」

「……そっちかい」

「〃そっち〃？」

「いや……。三十五つてのは適当に言っただけで、実際には四、五人だったと思う」

「……。君の『適当』は七倍に膨れ上がるのか。いくらなんでも盛りすぎだぞ」

「えー、白髪三千丈、とかに比べたら可愛いもんじゃん」

「……。それで、複数の人間に道を聞いたのはどうしてなんだ」

「いやー、別に大した意味はないんだけどさ。最初にキサさんに聞いた時の答え方があまりにもスマートで的確だったんで、もしかして他の人もそうかなーと  
思ってたんだよね」

昨日の朝、沙龍はかなり早い時間にマンションを出た。初めての道だったの  
で、念のために、である。

地図さえあれば、そして屋外なら、迷わない自信があるのだが、あの巨大な駅  
ビルを抜けて行かなければならないとなると、さすがに不安になる。

案の定、沙龍は迷ったのだ。

そこで、同じ制服を着ている人間をつかまえて、道を聞いた。その一人目が木  
佐小次郎だったのである。

沙龍が言うように、木佐の説明は見事だった。あの複雑な駅構内を、初心者に  
(しかも半分外人に)説明するのは至難の技であるにも関わらず、沙龍はすつき

り理解できたのだ。

自分は同じことはできないだろう、と思った。事実、数日前に「トチョー、ドコデスカー？」と聞いてきたイラン人には「あー、なんか適当に歩いてたら着くよ！」としか答えられなかった。

「もしかして今日から私が通うのは、ものすごく頭のいい人たちばかりが通う超難関高校なの？　と思つて、不安になつちやつてさー。それを確かめるために、その後、もう一人、同じ制服の人に同じ質問を試してみたわけですよ。そして、今度はまるつきり要領を得ないっていうか、ぶつちやけバカが制服着てるような感じだったんで、これはいくらなんでも酷すぎると思つて、もしかして今日から私が通うのは、ものすごくおバカな人たちばかりが通う以下略、って感じで、三人目、四人目……ってやつてるうちに、なんか途中でヘンなのをつかまえちやつたらしく、『〇〇に入りませんか？』ってえらい情熱的に誘ってくる男子が居て、やつべー、これが有名な新興宗教の勧誘か、と思つてたら」

「甲斐さん……」

「そのうち、馴れ馴れしく二の腕つかんできて、さすがの私もムツとして振りほ



どいたら、その人、勢い余ってすっころんじやってねー。そこに丁度タイミングよく、というか、悪く、かなりのスピードでやってきた自転車が、あ、そうそう、それに乗ってたおばちゃんが小錦みたいな人だったんだけど、その男子を踏み潰しちやって、ちよつとした騒ぎになったんだけど、私は色々面倒だったの  
で、そそくさと逃げ出してきたんだよね、って話をさっき思い出したわ」  
話し終えると、心なしか、木佐はぐったりしている。

「甲斐さん……、もう少し、要点だけを的確に言ってくれないか」

「すみません、以後気をつけます」

テレビで覚えた定型句である。

以後気をつけるつもりなどまったくない言い方だ。

「まあ、そういうわけなんで、私も説明会は聞く方じゃなくてパフォーマンスする方にまわろうかな、と、今決めた」

「……」

「聞きたいことはそれだけかな？」

ニコニコしながら言ってみるも、木佐は「それだけだ」と言っただけでいた文

庫本を机にしまった。本鈴とともに担任が現れたからである。

昼休み、説明会の行われている体育館はちよつとした騒ぎになっていた。

演劇部の持ち場の前で、着ぐるみ姿のパンダが、ジェット・リーののような演舞を披露して注目を集めているのだ。

モップを使って棒術を演じ、何度か派手に宙返りをしていれば人は集まる。

「え、なに、プロなの？ 誰なの、あれ!？」

「どう見てもうちの生徒じゃないだろー」

「でも背はちっちゃくない？ わ、飛んだよ！ スゴイ！」

観客は口々にそんなことを言って、拍手さえ送っている。

他のブースで説明を受けていた新入生も、説明していた在校生も、いつのまにか演劇部の前に集まってきていた。

パンダはすっぽりと上から下まで着ぐるみで覆われているため、「中の人」の素顔も体型も分からない。見物している者たちはどよめきながらも「廃部の危機

にある演劇部が、自棄になって金の力を頼り、プロを呼んだのだろう」という結論に落ち着きつつあるようだった。

が、木佐小次郎はパンダの正体を知っている。

『華道部』の机で頬杖をつきながら、よくあの丸っこいモコモコした衣装であるそこまでキレのある動きができるものだ、と木佐は感心していた。

パンダが一通りの飛んだり跳ねたりを終えると、マネージャー役に扮した渡部ユウコが伊達眼鏡をクイツとあげて、観客にさらなる呼び込みをはじめた。

「我が演劇部ではこのように、柔道部や空手部の精鋭に負けないスタッフを揃え、日々鍛錬しつつ、楽しくお芝居の練習をやっています。ぜひ、気軽にご参加ください」

さすがにそれだけでワツと人が押しかけるほど事は簡単ではなかったが、何人かは興味を持って話を聞きにきてくれた。

パンダは渡部女史の隣に座って休憩している。たまに、隣で行われているやりとりにチョツカイをだして、渡部女史の話を聞いている新入生に強引にサインさせようとしていた。

そうして、また、しばらくして人が居なくなったら『演舞・第二部』を始めるのだろう。

木佐と同じように、事情を察しているらしいバスケット部の須藤キャプテンが一度冷やかしに来たが、それは冷やかしというより、激励だった。バスケット部は放っておいても新入生が入ってくるので、健気に頑張っている弱小部を応援したくなるのだろう。

結局、この日の収穫は五人。新入生が四人と、二年生が一人、演劇部に入ってくれた。

廃部はあっさりと回避されたわけだが、パンダにつられて入部した彼らも、いつの間にか居なくなっていたパンダの正体を知ることではなく、しばらくは、いたいあのパンダは誰だったんだろう、という話でもちきりになった。

そして、沙龍は、というと、特にピンとくるものがなく、ダラダラ過ごしているうちに一週間が過ぎてしまい、帰宅部決定となってしまうた。

(ま、いいか。リスクは少ないほうがいい……)

そう。目立ってはいけないのだ。

木佐小次郎の目の前でヒバリを捕獲したのも軽率だった、と今になって反省した。

もっと自重しなければならぬ。

俊先生へ

お元気ですか？

ワクワクドキドキの高校生活が始まって一週間が過ぎました。

何人かのクラスメイトと仲良くなれた気がします。私が気になっている人はいつもムスツとしていて、話しかけても二言以上喋ってくれません。

かといって、心を閉ざしているというわけでもなく、シャイというわけでもなく、ビジネスライクな場面ではものすごく饒舌だったりします。手ごわいですが、

学校の勉強はなんとかついていますが、先生たちの日本語がまだよく聞き取れないので、そこがネックです。

ヒアリングを鍛えるためにはとにかく聞いて喋って、を繰り返すしかないの  
で、帰宅部のクラスメイトと放課後に買い物に行ったりして遊んでいます。

そうそう、結局、部活に入るのはやめました。

楽しそうな部はいくつかあって、入ってみてもいいかな、と思ったのですが、  
三年生は夏には引退しなければならぬとのことで、そうになると、ちよつと期間  
が短いですよ。

俊先生はやっぱり書道部だったのかな。うちの高校には書道部ないんですよ。  
かわりに、というわけではないけど、茶道部や華道部というものがあります。

茶道は有名なので私でも知っていました、華道は初めて知りました。

例の二言以上喋ってくれない人は華道部なんです、これって要するにフラ  
ワーアレンジメントのことですよ？

フラワーアレンジメントが書道や茶道と並ぶ、日本の伝統芸能になるのも不思  
議なんです、例の人はとてもそういうことをする人に見えないので、いよいよ  
不思議です。もう、宇宙人みたいです。

帰宅部は楽しいですよ。

昨日はクラスメイトに誘われてカラオケに行ってきました。

歌はあまり得意ではないんですが、昔、日本人の知り合いから教えてもらった曲があつて、それだけは完璧に歌えるので、みんなの前で披露したら、なぜか爆笑されました。

あ、遊んでばかりじゃないですよ。ちゃんと宿題とかもやっています。

今日も今から英語の文章を和訳しなくてはならないのです。

私にとってはどちらも外国語なのでハードです。

では、またお手紙書きますね。

再見！

甲斐馨

\*  
\*  
\*

甲斐馨  
様

陽春の候、ますますご健勝の事とお喜び申し上げます。

気付くともう四月も第二週が終わってしまい、時間の早さに置いていかれそうになっております。

年度末はいつもそうなのですが、たまった書類仕事に翻弄されて、ぐずぐずしている間に、馨さんからの御手紙が二通届いてしまいました。

こうしてお返事が遅れたことをお詫びいたします。ごめんなさい。そして、改めて、御手紙ありがとうございます。

馨さんが高校生活を楽しんでおられるのが目に見えるようで、拝読して私も嬉しくなりました。

自分は地味な男子校に通っておりますので、華やかな十代の日々は羨ましい限りです。

話しかけても二言以上喋ってくれないクラスメイトは、男の子かな？（華道部ということなので女の子かもしれないけど、なぜか男の子じゃないかな、と思いました）



あの年頃の男の子は（自分の経験からしても）、女の子とまともに話せる人は少ないです。

案外、シャイであることを必死で（それこそ全力で）隠しているだけかもしれないよ？

次の御手紙では、彼との関係も少し変わっているかもしれないと勝手に想像しています。

お察しの通り、私はずっと高校も書道部でしたので、あの頃は毎日、王羲之や王献之の書と向き合っていましたね。

兄には「年寄りくさい」と言われ、運動部の友人たちからは敬遠されましたが、私は筆を持つこの静かな時間が好きです。

心が洗われる、といった表現をする方もいらつしやいますが、私にとってはむしろ逆で、書道には、自分の邪な心と向き合う瞬間があります。

それは時としてとても醜く、矮小です。

そういったものをありのままに吐き出すのが絵画なら、書道はそこに理性が働かなくてはならないと思います。

ですから、邪な心を律し、しかし偽ることなく表現したものが、自分の字になるのではないか、と思うし、それがうまくできないから、修業をするのだな、と日々感じています。

ちよつと難しいことを言っているかもしれないかもしれませんが、分からなくても大丈夫です。私もあまり分かっていませんから。

馨さんの字はいつも豪快ですね（褒め言葉ですよ）。

こういう字を書く人は、実は見た目のイメージが正反対で、小柄な人が多いんですが、合ってますか？（違っていたらごめんなさい。単なる統計学ですから）書道の話はこれくらいにして。

函館は四月末から五月にかけて桜が咲きます。東京から見れば一ヶ月遅れということになりますね。

五稜郭の桜がとても綺麗なので、毎年、写真を撮りに行くのですが、次回はその写真を同封しようと思います。

それではお名残惜しいですが、暫しのお別れを。

馨さんからのお便りをいつも楽しみにしております。

保科俊

10 僕の叔父さん

三月の甲府行きを決める前に、沙龍が上海に問い合わせた質問への回答はこうだった。

「ミスター・カスガの協力については、沙龍様が心配されるような裏はありません」

下世話な言い方をすれば「それなりの金を掴ませているので心配無用」という意味である。

沙龍に協力することが直接彼らの企業利益になるわけではない。ただ、蒼龍会に恩を売っておけば、彼らも中国で色々と便宜を図ってもらえる、ということである。

(まあ、そういうことだろうとは思ったが……)

結局、金だ。

蒼龍会は金で権力パワーを買い、その権力パワーを、さらなる金集めのために使ってきた

た。

金と権力――。

闇を歩く者は、結局、その二つしか存在しない狭い世界の中をぐるぐるとまわっているに過ぎないのだ。

それは出口のないループである。

そこから抜け出す方法を、沙龍もまた探している。

『神獣の保持者』という唯一無二の力を持つとも、そんな物理的な力などは、路地裏での喧嘩でしか役に立たないのだ。

しかし、具体的になにをどうすればいいのか分からない今は、せいぜい、技も感覚も鈍ることのないように、体を鍛えておくくらいしかできない。

それとて、素性も分からないどこかの道場に通うのはリスクが大きすぎるので、朝晩のジョギングをする程度だった。

深夜に新宿中央公園で体を休めていると、盛り上がったカップルや、なにかの受け渡しをしている男たちをよく見かける。彼らは、基本的に無害だ。人目につくと困るのは彼らのほうなので、視線が合うと、そそくさと逃げていく。沙龍を

見て「なんだ、ガキか」という顔をする時もあるが、それでも、大体、逃げていく。

困るのは、一人で酔っ払って騒いでいる者や、死体のようなヤク中たちで、これらは徹底的に無視するに限る。頭が飛んでいる者には常識も、痛みも通じないのだ。

今夜は静かな夜だった。月は出ていないが、街灯の明かりが公園の中まで届いている。向かいのホテルの窓も、まだだいぶ明かりがついていた。

夜景は綺麗だ。

が、音はない。

沙龍の耳に響くのは、遠くで飛行機のエンジンが唸る音と、自分の息遣いだけである。

この世の終わりのように静かな公園の広場で、養母に習った太極拳の型を一通り終えたところで、ふと、視線を感じた。

通りに黒塗りのセダンが停まっている。

(まさかね……?)

ピカピカに磨き上げられたセダンは（ベンツか国産か遠目には分からなかったが）、沙龍が顔をあげた数秒後に発進していった。

他になにかの気配はない。

零時過ぎというこの時間、人通りも、車通りもほとんどなくなる場所だ。

上海から、誰かが自分の様子を見にきたのではないかと一番に考えたのだが、もしそうなら、沙龍が気付いた時点で車から降りてくるだろう。走り去る必要はない。

（まあ、私に用があるならそのうち接触してくるだろう）

そう思ったので、あまり気にはせず、そのままジョギングを再開して、数キロのコースを走ってからマンションに戻った。

翌日は、普通に登校したが、マンションの近所に怪しい車は見かけなかった。

桜が散り、だいぶ空気が生暖かくなってきている。もう上着は要らないな、と沙龍は思った。

ヒバリの姿を見かけると、上を向いたまま考え込む癖がついてしまったが、もうあれを捕獲しようとは思わない。その実験は、今度、どこかの山奥でひっそり

とやろう。

しかし、いったい、何故、甲斐弥太郎はそんな、なんの役にも立たない技を披露することになったのか。

疑問はそれに尽きるが、答えが分かるはずのない疑問だ。沙龍は、毎朝、堂々巡りを繰り返すだけである。

すっかり葉桜になってしまった沿道の桜の木に、やはり、小さな鳥が停まっていた。あれはヒバリではない。雲雀ひばりよりはだいぶ小さい。雀すずめだろう。

「……」

普通の高校生は、あそこに鳥がとまっていることなど気付かないし、気付く必要もない。

特殊な環境で育ち、優れた動体視力を持つ者だけが、あそこに鳥が居ることが分かるのだ。

「分かっているとは思いますが。そのまま行くと、花壇にぶつかるぞ」  
木佐小次郎の声がして、沙龍は植え込みの手前で足を止めた。

レンガで囲われた中に、名は知らないが、色とりどりの花が咲いている。よく



手入れされた花たちだ。

ゆっくり振り向いて、

「いや。気付いてなかった。ありがとう」

そう言ったのだが、勿論、嘘である。沙龍は花壇があることに気付いていたはずだ。

「……また、鳥を見ていたのか」

「うん」

「しかし、“あれ”はヒバリじゃないだろう」

木佐は桜の枝にとまっている鳥を見て言った。

彼には見えるのだ。“普通の高校生”には見えないし、気にもしない小さな鳥の姿が。

「鳥の種類は、多分、なんでもいいと思うんだよね」

「……?」

「要するに、殺さない程度に気絶させるっていう、その微妙な手加減ができるかできないか、つてのがポイントなんだと思う」

沙龍は、言ってみて、初めてそこに気付いた。

黙考では答えが出なかったことも、言葉にすることで分かることがあるのだ。

「そういう無茶な注文をする師匠は聞いたことがあるな」

「え……!？」

沙龍はびっくりして木佐の顔を見上げた。

その端正な顔は「そんなのどこにでもある話だろう」と言わんばかりに澄ましている。

「聞いたことがあるって、どこで!? 師匠って誰のこと!？」

思わず詰め寄る。

が、木佐は立ち話を拒否して、歩みを再開した。

慌ててついてくる沙龍に、木佐は言っただけでやめた。

「小説ではよくある話だよ」

「ショーセツ……って、フィクションかよ! それじゃ意味がな……」

落胆しかけたのだが、

「フィクションで描かれているようなことは、だいたい、実際に起こったこと

「な、なにそれ？」

「だってそうだろう。今という瞬間は、有史以来、数千年の歴史の上に成り立っている。つまり、数千年分の現実があるんだ。その膨大な数の現実があつて、はじめて、一握りの人間が一握りの虚構を作るわけだろう。まるっきりの無からはなにも生まれないんだよ」

「……」

木佐の流れるような言葉を、沙龍はなにか歌でも聴くような気分で聞いていた。

こんなに流暢で難しい日本語を並べ立てられたら、反論する余地はない。かわりに、素直な感想を述べた。

「キサさんて、頭いいんだねえ」

「君ほどじゃない」

「ハア……？」

「編入試験を受けて入ったんだろ？」

「ああ、それは……」

真実を話そうかどうか迷ったが、その時、校門が見えて、さらに、その脇に黒い車が停まっているのが見えて、言葉を切った。

私立高校ゆえか、車で通学してくる生徒も多い。校門前をベンツやBMWが停まっているのは珍しくもないのだが、昨夜のことがあったので、沙龍の表情は少し厳しくなる。

結局、その黒い車は普通の国産高級車で、生徒を一人降ろして去っていったが、沙龍の緊張感が伝わったのか、木佐も黙っていた。

二人はそのまま何事もなかったかのように、校門をくぐった。

その間も、リンカーンのようなリムジンが停車し、生徒を降ろしては、また去っていく。が、沙龍も木佐も、少し外れた場所に停まっていたベンツには気付かなかった。

三時間目の英語の時間中、沙龍は朝のやりとりを思い出し、ノートの切れ端に

なにやら書きつけて、それを丸めると、うしろの席に投げた。

『小鳥を気絶させることができる技のこと、なにか心当たりがあるなら教えて下さい』

無視されても構わないと思っていたのだが、しばらくすると、同じ紙に返答が書かれたものが返ってきた。

『僕が知っているのは、古武術の免許皆伝試験に似たような話がある、ということだけだ。ただし、あくまでも伝聞と半分フィクションで、オリジナルの詳細を知っているわけじゃない』

沙龍の豪快な字の後に、木佐の繊細な字が続いているのがなんとも対照的だった。

保科俊ほど美しくはないが、木佐の筆跡も、書道をたしなんている者のそれに見えた。

(古武術……?)

初めて聞く言葉だ。

多分、沙龍が持ち歩いている小さな辞書には載っていないだろう。

もう一回、メモ書きを投げて木佐にその言葉の意味を聞こうと思ったが、教師に睨まれたのでやめた。

また聞く機会はあるだろう。

そう思っていたが、次の四時間目は体育で男女分かれてしまったし、昼休みは姿を見かけなかったし、午後の理科の実験は別グループになってしまったので、話す機会はなかった。

そこで、午後のホームルームを終えて、さっさと教室を出て行く木佐に慌ててついていった。

「あれ？ キサさん、部活は出ないの？」

下駄箱に直行するのでそう言ったのだ。

「うちは毎日やってるわけじゃないんでね」

「ふーん……。じゃあ、一緒に帰ってもいい？」

「なにか、僕に聞きたいこともあるのか」

木佐は少し呆れた様子を見せながら、聞いた。

「うん」

「……」

特になにも言わなかったの、一緒に帰ってもいいのだと勝手に判断し、早足で校門に向かう木佐の後を追いかけた。

が、数歩もいかないうちに急に視界がふさがって、木佐の背中に頭をぶつけてしまった。

木佐が予告なく立ち止まったからだ。

「……むぐ。どしたの？」

「……」

見れば、黒塗りのベンツが目の前に停まっている。

後部座席のウィンドウはスモークが張ってあって中は見えなかった。いかにも、贅肉をまとった要人が乗ってそうな車である。

昨夜見た車か、と沙龍が理解したのと同時に、運転席から若いスーツの男が降りてきた。

見たことのない男だった。やや細面だが、腕はたちそうだ。物腰がいい。

木佐の背中から緊張感が伝わった。

「……」

運転手は木佐を一瞥し、はつきりと分かるように会釈してから、後部座席のドアを開けた。

「どうやら、自分の知り合いではなく、木佐の知り合いのようだ。」

「叔父さん……」

木佐が後部座席から降りてきた人物に言った。

なるほど、運転手よりもこちらの方がはるかに『大物』だ、と沙龍は思う。上等な仕立ての服に身を包んだ中年は、どこまでもスマートな風貌で、場を圧倒した。

二、三人の帰宅中の生徒たちがこちらを見て、息を飲むような視線を向けてくる。

「元気そうだね、小次郎くん」

色々な物事に慣れた者の言い方だ。

自分以外の者を見下す位置に居ることに慣れている。

「……特に元気でも病気でもありませんが、ご用件はなんでしょう」



木佐のあきらかに喧嘩を売ったような言い方に、沙龍はこの二人の関係を想像する。思い描いた相関図はそれほど間違つてはいないだろう。

「フフ、そう噛み付かなくても、なにもしないよ。今日は、保護者として様子を見にきただけだから」

「確かに、名義は色々お借りしていますが、僕は叔父さんの世話にはなっていないつもりです」

「そうだねえ。僕が毎月振り込んでいるお金にも全然手をつけてくれてないからね。保護者面をするなど言う権利は充分にあるだろうさ。でも、小次郎くん。僕は君のおじい様から直々に君の後見役を任命されているわけだから——」

「ご心配せずとも、あなたの株を下げるような真似はしませんから、こんな風に学校に来るのはやめてもらえませんか」

「でも、君は高校を卒業したら完全に本家とは縁を切るつもりでしょう？」

「叔父さん。道端でするような話ではないのでは？」

「……彼女には聞かれない？」

と、沙龍を見る。

スマートな『叔父さん』に、にこやかな顔を向けられたので、沙龍もにこやかな笑顔を返した。

「小次郎くんのお友達？」

その問いに、沙龍の脳天気な「はい、そうですーす」という返答と、木佐の「違う！」という厳しい声が重なった。

『叔父さん』は、木佐の激しさに少しびっくりしたようだが、それも一瞬だった。

「そんなにムキになって否定するようなこと？」

のんびりした調子に、木佐はさらに苛立ったようだ。

下町育ちだったら舌打ちのひとつでもしているところだが、木佐小次郎の育った家はそういったことを決して許さなかった。

微妙な空気を読んで沙龍がなにか言おうと口を開いたが、木佐はそれすら遮った。

「この人はそこで一緒になったただけの、ただのクラスメイトですから、妙な話を振らないでください」

「そうなの？ にしては仲よさそうだけど」

意味深に笑う『叔父さん』を睨みつけてから、木佐はかたわらに立っている運転手にベンツの後ろを顎で示した。

いつまでもここにこんな大きな車を停めていたら、渋滞が始まってしまふ。そう言いたかったのだ。

運転手はそれを理解したようで、チラッと主を見た。

「お話があれば、今度、しかるべき場所で聞きます。もつとも、僕には話すことはないですが」

「相変わらず、素っ気ないねえ」

木佐はベンツ組を振り返ることなく、足早に去っていく。

沙龍は『叔父さん』と運転手に会釈してから、木佐の後を追った。

駅に着くまでは二人とも無言だった。

恐らく、木佐はさきほどの出来事をどう説明しようかと悩み、最終的には、説

明などする必要はない、というところに落ち着き、沙龍の方は、個人的なお家事情はわりとどうでもよくて、例の「古武術」の話をどうやって聞けばいいのか、考えていた。

「お腹すいた……」

独り言のように言ったのは、本音中の本音である。

午後三時半という時間だった。

沙龍にとっては一回分の食事に等しい、おやつ時間がだいぶ過ぎている。

それを証明するように、お腹が、ぐう、と鳴った。

この人混みの中で、その音は木佐に聞こえていなかったかもしれないが、木佐は心なしか同情するような目で言った。

「なにか、食べるか？」

「うん」

そのままにも考えずに木佐に連れられてチェーン店のカフェに行くと、木佐はサンドイッチをおごってくれた。

「この前の、あんパンのお返しだ」

と、わざわざ説明する。

そして、自分用に買ったアイスコーヒーを砂糖もミルクもいれずに、仏頂面のまま飲んでいた。

(……俊先生が正しい気がする)

沙龍は、木佐の動かない表情を見ながら、そう思った。

「さつきは悪かったな」

アイスコーヒーをだいぶ飲み終えてから木佐が言う。

「いや、謝ってもらおうようなことじゃないです」

「余計なトラブルに巻き込まれそうになっただろう」

「ダンディなおじ様に話しかけられただけだし。トラブルのうちに入らないよ」

「これから、なるかもしれないと言ったら？」

「……え？」

木佐の言っている言葉の意味が分からず、その動かない表情を見つめる。

しかし、やはりそこからはなににも読み取れはしなかった。

「勿論、そうならないようには努力する。だけど、君のほうも、トラブルに巻き

込まれたくなかったら、僕には近付かないでくれ。詳しくは言えないが、ややこしい事情がある」

「えーと、言っている意味がよく分からないんですが」

「別に、裏の意味があるわけじゃない。僕に近付くなって言ってるだけさ」

「それは、嫌です」

「……は？」

「他人に、行動を強制されるいわれはない」

「君は僕の話の話を聞いていなかったのか？ 僕と一緒に居ると危険な目にあうかもしれないって言ってるんだ」

「ああ、心配してくれてるんだ？」

「違う！」

「それなら、多分、大丈夫よ。キサさんがいう危険は、私にとってはたいした危険じゃないから」

「だから、心配して言ってるんじゃないで！ 君はバカなのか？ なぜ、事情を知らもしないのにそう言える？」

「キサさんの事情は知らないけど、だいたい、推測できるから」

「はあ？ 適当に言わないでくれ。とにかく、僕はこれ以上、教室以外で君と口をきくつもりはないからな！」

木佐小次郎の目が吊り上がっているのを、沙龍はニヤニヤしながら眺めていた。

なんにせよ、感情が現れるのはいいことなのだ。

## 11 江戸川くんの試練

互いに聞きそびれていることを、いつどうやって聞こうかと機会をうかがっているうちに五月の中間テストの日程が貼り出され、早速テスト勉強を開始する者、五月病を患う者、相変わらず部活にいそしむ者など、校内模様は生徒の数だけある。

沙龍は、木佐が初日にやらかしたヒバリを大人しくさせた魔法が気になっており、木佐は、沙龍の謎の身体能力が気になっている。

しかし、それをあからさまに問うような真似はしない。

二人の間には、なにか暗黙のルールがあった。

相手の出方を見つつ、牽制し合っている。そこには、適度な距離があり、その距離を保つことが礼儀であるかのようだった。

武術の達人がいうならそれは「間合い」である。

ここまでなら大丈夫、ここからは危険、という距離が、沙龍も木佐も分かって



おり、お互いに「相手も分かっている」ということを理解しているのだった。

「教室以外では口をきかない」と宣言して以来、木佐は律儀にそれを守っているが、もともと、教室以外ではそれほど話したことなどなかったのだし、なにが変わったわけでもない。

沙龍は教室の外だろうが中だろうが、構わず木佐に話しかけているし、木佐も教室から一步出たところで沙龍に声をかけられ、思わず返事をしそうになることもある。

その度に、慌てて口を結んで無視するのだが、実は彼女は、わざとやっているのではないかと気付いた時には、頑なに宣言を守ろうとする自分がバカに思えた。教室を一步出たとか出ないとか、そんな小さなことを気にしている場合ではない。

なんのためにあんな宣言をしたのかといえば、自分の家のことで甲斐馨に迷惑をかけたくなかったからだ。

(……とはいえ、さすがに、それは少し綺麗事すぎるか)

「迷惑をかけたくない」というのが表向きの理由なら、木佐の本音はその裏側

にある。つまり、他人と関わるのが煩わしいのだ。だから、教室では本を読み、他人をよせつけられないようにしている。

話しかけられても、素っ気無く応じていれば、人は離れていく。甲斐馨も、そのうち離れていくだろう、と思っていた。

(その前に、叔父が勘違いして余計なことをしなきゃいいんだが……)

退屈な古文の授業中、木佐はもう教科書を見るのを諦め、教師の話も聞かないことにした。この程度の勉強なら一人でやったほうが効率的だ。

前の人の後姿はさっきから一センチも動かないのでペンを持ったまま寝ているのだろう。相変わらず、見事な寝方である。

茶色とも黄色ともつかぬ長い髪の毛は、そこだけ見ていると、まるで外国人のようだ。

この無造作に伸ばした髪でちよつと暇つぶしをしてみたい、という欲求と戦うのが、最近の木佐の授業の過ごし方だった。

右隣の須藤は、熱心に教師の話聞いている。真面目な男なので、しっかり勉強はするようだが、要領はあまりよくないのか、成績はいつも中の上ぐらいだそ

うだ。

木佐は自分以外の人間の成績を気にしたことはない。彼にとっての関心事は、定期テストで首位を守れるかどうかだけ。それが、奨学金の条件になっているのだ。

しかし、厳密に毎回一位を取る必要はなかった。一年間の総合で三位以内に入ってさえいれば、返さなくて済む奨学金をもらうことができる。

一年の時も、二年の時も、おかげで、全学費が免除になった。学校側からはとても優秀な生徒だと思われている。

これで、もう少し、生徒会などにも興味を持ってくれれば教師としては万々歳だったのだろうが、木佐はそんな目立つことはしたくなかった。

終了のチャイムが鳴ると同時に、沙龍の上半身が少し伸びた。起きたようだ。相変わらず、見事な反応である。

不思議な色をした髪が百八十度回って、振り向く。

「キサさんはいつもどこでお昼食べてんの？」

「………部室」

と一言だけで答えて、カバンを持って教室を出て行く。

なるほど、部室なら部外者はおいそれと入れないだろうし、静かで木佐向きなのだろう。

しかし、その理屈は沙龍には通じなかった。

やきそばパンを抱えて木佐についてくる。

「一緒に食べちゃだめかな？ 部室って、部員じゃないと入っちゃだめなの？」

別に構わないよねえ？」

なんとも強引な物言いだ。

「近付くなど言っただろう。なのに、なぜ、そんなに僕に構う」

「構いたいから」

「……」

何を言っても無駄に思える、不毛な問答だ。

木佐がため息をついたところで、廊下のつきあたりの方から、高らかに沙龍のフルネームを叫ぶ声が聞こえた。

「甲斐馨——ッ！」

昼休みのにぎやかな時間帯なので、特にその声だけが目立つということはない。かつたし、名前を呼ばれた沙龍はそれが自分のことだと気付かなかったので、行き過ぎようとした。

「見つけたぞ、甲斐馨——ッ！　ここで会ったが百年目！　今日こそ！　今日こそ、我が悲願を成し遂げてくれる——ッ！」

よく通る声だ。

滑舌もいい。

なにかのセリフのようにも聞こえる。

が、沙龍は気付いたのか、気付かなかったのか、その声の男子を無視することにした。

「それでね、やっぱり人気だから、四時間目が終わった後に買いに行っても、たいてい、売り切れてるわけ。もうね、メンチカツバーガーは幻のメニューなんじゃないかって最近は思うようになってきたよ」

隣の木佐の方が、後ろを振り返りつつ、気にしている。

「だったら朝一で買っておけばいいじゃないか」

投げやりに言っているようだ。

木佐は、購買で売っているメニューすら知らない。

「それがさー、一時間目の前だと早すぎて業者さんが来てないんだって。おばちゃんに聞いたたら、いつも微妙な時間に来るらしいんだよね」

「……甲斐馨——ッ！」

「なんか、呼んでるが、いいのか？」

「誰を？」

「君を」

「誰が？」

「さあ……」

と、木佐が見る間にも、沙龍の名前を連呼して叫んでいた男子生徒が、廊下を端から端まで全力疾走で駆けてきて、二人を追い越し、かなりのオーバーランをした後で、Uターンをしてきた。

ゼエゼエと息が切れている。

「ま、待てエツ、この全人類の敵！ 人を無視して行くんじゃない！」

「えつと……。どちらさんで？」

沙龍は一応聞いてやったが、声の調子も剣呑だし、その表情は早く昼飯を食わせる、と言っている。

空腹の人間を呼び止めるといふ愚行を犯した男子生徒は、しかし、己の過ちには気付いていない。

「フツ、よもや、この顔を忘れたとは言わせないぞ！」

「忘れた」

フガーツ！ つと、水をかけられた野良猫のような表情で迫ってくる顔は、沙龍の記憶にはない。

特徴のない中肉中背、凡庸な顔、ありきたりのヘアスタイル、とくれば、沙龍でなくとも記憶には残らないだろう。

「俺の名前は江戸川渡わたる！ この前も名乗っただろうが！」

「……で？」

軽く腕を組んで、眉を吊り上げている沙龍は半分“上海モード”になりかけている。

用件があるなら速やかに言え、と全身全霊で威圧しているのだが、どうもこの男子生徒はそのあたりを覚るのが鈍いようだった。

「いや、我々の間に名乗りあいなど無用だったな！　そう、俺は再び、貴様とあいまみえるこの日を、何度夢に見たことか！　いや、実際には見てないんだが！　ここのところあまりにも健康的な毎日で、夢など見ずにグツスリ眠っていたわけだ！」

「どつちなんだ……」

木佐の呟きは、江戸川渡には聞こえていない。

さらに、沙龍のイライラは忍耐力という言葉を知らない。

「江戸川だか、荒川だか知らねえが、人の至福のご飯タイムを邪魔すんじやねえぞ、雑魚が」

“鉄さんバージョン”の日本語には、木佐も少し驚いたようだ。

さらに、“上海モード”も上乘せされているのだから、一般人はたまったものではない。

「えっと……」



案の定、江戸川渡は固まってしまった。

「で、カドーブの部室とやらは、どこなんすか、キサさん」

「本当に部室までついてくる気か。いったい、なぜそんなに僕に構う」

「構いたいから」

「それは答えになってないだろう……」

二人の会話が聞こえなくなっても、江戸川渡は一步も動けずに固まっていた。

肋骨が痛い。

まだ全治していないのだからしょうがないが、これ以上、学校を休むと留年し  
そうなので、無理して出てきたのである。

しかし、今のはなんだったのだろう。

なにやら、地獄の底を覗き込んでしまった気がする。

いや、気のせいか。

そうだ。気のせいだろう。多分。

可憐な女子高生があんな恐ろしい形相をするわけがない。

「あ、江戸川くん、久しぶりー。三年になってからしばらく見なかつたけど、ど

うしたのー？」

女子生徒が、廊下で佇む江戸川渡に声をかけていた。

文化部の部室は、渡り廊下で連結された別棟にある。昼休みも活動を行っている部もあるので、そこそこ賑わっていた。

ただ、華道部は木佐が言うようにもともと部員も少ないので、昼は閑散としていた。シーンとした部屋で、黙々と重箱のお弁当を食べる木佐に、沙龍が言った。

「騒がしい弟や妹が十人くらい居て、三百六十五日、周囲が道路工事でもやってきた家で育ったせいで、静かな場所を偏執的に愛するようになった、とかなの？」

少し、危険ゾーンに入るような言い方だった。

が、それ以上は踏み込まない。木佐が真面目に答えずに済むように、こんな言い方をしているのだ。

「……」

案の定、木佐も取り合わない。

それよりも、沙龍は重箱弁当の中身が気になる。

「豪華で美味しそうだねえ。料亭のお弁当なの？」

覗き込んで聞いてみると、

「いや、自作だ」

鬱陶しそうに手で払われた。

「えっ……」

出汁巻き卵の美しさといい、型崩れしていない煮物といい、プロが作ったものにしか見えない。

そうか、今時の男子高校生は自作弁当なのか、と思うほど沙龍もズレてはいないので、ここは、

(なるほど、変わりモンだ……)

と、思っただけである。

沙龍は、やきそばパンを五個並べて、端からガツガツと片付けているのだが、

「よっぽど貧乏で満足に食えない家で育ったのか？」

さつき言われた通りの言い方で、木佐もやり返してきた。

「私、人よりちよつと胃が大きいらしいんだよね」

「“ちよつと”……？ いや、君の場合、容量の絶対値が人より小さいんだから、胃が大きいといってもタカが知れてるだろう」

「ゼツタイチ？」

「……」

偏執的だの抜本的だのという言葉は使うのに「絶対値」を知らないというのが、不可解である。

その基準がよく分からない。

説明するのが面倒くさくなった木佐は、もう甲斐馨の相手はせずに、弁当を食べ終わった後は読みかけの本を読んで昼休みを過ごした。

そうして、嵐は放課後になって再びやって来た。

終業と共に廊下に響き渡る叫び声。

「甲斐馨——ッ！」

昼休みの寸劇をコロツと忘れた江戸川渡が、沙龍を見つけて追いかけてきたのだ。

沙龍はというと、今日は夕方の再放送のドラマを見たいので、さっさと帰るつもりである。こんなわけのわからない男子に時間を割くつもりはない。

「待てというのに！」

しかし、下駄箱で回り込まれてしまった。

「あのさあ、隅田川くん」

「江戸川だ」

「親の仇か、プロポーズかは知らないけど、人になにかを頼むときは、それなりの手順を踏んでだな。……ああッ!? UFOから宇宙人が！」

と、江戸川渡の斜め後方を指差しながら叫ぶ。

我ながら、迫真の演技だった。

「なにイ——ッ!？」

敵が振り向いた隙に、沙龍は既に走り去っていた。

「チヨロい……」

そう呟いたのは沙龍ではない。

部活に行く途中、通りすがりに一部始終を見ていた須藤である。

「ぐわー、逃げられたー！」と、一人で叫んでいる江戸川渡とは去年同じクラスだったのでよく知っている。

とにかく全力で生きている男である。

全力で騒ぎ、全力で勘違いする。

果たして、そんな江戸川渡の生きる目的がどこにあるのかなど、誰も知る由がないのであった。

深夜の新宿中央公園から見える景色は、いつも沙龍を不思議な気分させる。黒と白と灰色。いったい、このモノトーンの街は誰のものなのだろう。

簡単なようで難しい、そんな問いが、ずっと頭の片隅にある。

(誰の——、か)

木佐小次郎に聞けば「都知事」と答えそうだと沙龍は思った。

星の見えない漆黒の夜空に、奇妙なシルエットの庁舎が浮かんでいる。

うさぎみたいだと、と初日に思った。遠くから見て、そう思ったのだ。

今は、もっと無機質なものを想像している。展望台ではしゃいでいた幼稚園児  
いわく、都庁は夜になったらロボットになって動き出すのだそうだが、確かにそ  
んなイメージだった。

(……?)

視線を感じた。

多分、この前と同じ人間だろう。

通りに黒塗りのベントを探す。が、見える範囲にはなかった。

このまま走って帰ってもよかったのだが、沙龍は待つことにした。

多分、相手は話したがっている。そう思ったのだ。根拠はない。強いて言え

ば、あの校門前で、一瞬絡んだ視線だ。従者特有の目。「彼」は沙龍に救いを求  
めていた。

「やれやれ。人を訪ねる時間じゃないんだけどな」

ベンチに座っている沙龍は足を組んで、その上に頬杖ついていた。

近付いてきた男は敵意も殺意もないが、歩き方がプロだった。足音がほとんどしない。

「申し訳ありません、甲斐様」

「一度会ったよね？ お名前は？」

「八雲と申します」

地味だが安物ではないスーツを着た男はそう名乗り、深々と頭を下げた。

木佐小次郎の『叔父さん』が乗っていた黒塗りベンツを運転していた男である。年は二十代後半か、もう少し上だろう。

一年に一回くらいしか笑わないような、冗談の一切通じなさそうな顔をしている。

「それで、ミスター・ヤクモ、ご用件は？ 明日も早いので、手短にお願いします」

「お時間は取らせません。小次郎様は恐らく自分には近寄るなど言ったと思います



すが。甲斐様、お願いします。小次郎様を助けていただきたいのです」

驚いたことに、八雲は片膝をついて言った。沙龍がベンチに座っているの、立ったままでは自分のほうが視線が上になってしまいうからだろう。そういったことをするのに慣れている動作だ。

「……」

なんだろう、この古めかしい感じは、と沙龍は思った。

「キサさんの家では血みどろの跡継ぎ問題でも起こってるの？」

「御意」

適当に言ったのに、当たってしまったようだ。

とはいえ、『叔父さん』が現れた時からなんとなくそれは予想できたことだ。

「それを、私なら助けられる、と？」

「御意」

「なぜ？ なんの力もない女子高生が？」

「……」

八雲が口元だけで微笑した気がした。

そして、彼はこう言ったのだ。

「私は京都の黒田家に仕える者です。貴女が何者であるのか、分かっているつもりです」

京都だって？

沙龍は、急いで日本の地図を思い浮かべてみたが、かつての千年王城の都がどこらへんだったのか、正確には思い出せなかった。

外国人にとつての「キョート」は簡単である。ゲイシャ、キンカク、フシミイナリ。ジャパニーズ、マイコ、ビューティフル！

しかし、当の日本人にとつて京都という街はどういったものなのかというところ、外国人にはなかなか理解できないものだ。

沙龍にしても、かつての都という意味では、西安や洛陽と同じようなものだろう、と思っていたのだが、実際はそれほど単純なものではない。王朝ごとになにもかもが変わる中国とはやはり違うのだ。

平安京から、実に千有余年、治める者は変わっても京都はずっと変わらず首都としてあり続けた。その歴史は重い。

つまり、一部の人間にとつてはいまだに日本の核であり、大多数の人間にとつても敬意を払うべき街が京都なのである。

その片鱗は、八雲の言う「京都の」という言葉にも表れていた。そこには、

はつきりと「東京より格上である京都の」という響きがあった。

深夜の新宿中央公園で、彼が語った話はこうだ。

木佐小次郎は京都にある旧家の跡継ぎである。その家では代々京都御所の警護を任されているのだが、今、本家の中で厄介な問題が持ち上がりつつある——、と。

「京都御所？ ……っていうと、昔、天皇が住んでいたお城？」

沙龍にとって『かつてのお城』といえど『北京の紫禁城』である。以前、見た、あの壮大な太和殿が思い出された。

しかし、沙龍の想像した『お城』と、京都御所はかなりかけ離れていると言わざるを得ない。

実際に、外国人観光客たちが京都御所に行くと「昔のミカドはこんな質素なところに住んでいたのか」と驚くのが定番であるらしい。

「はい。京都の人間にとっては『今も天皇さんの本宅』といったほうが正しいのですが」

「ん？ どういうこと？」

「よく言われているジョークのひとつですよ。現在、天皇陛下は東京に少し長く行幸されているだけ、というのが京都人の言い分である、と地方の方々が面白がって言うのです」

冗談など言いそうにない真面目な顔が、そんなことを言った。

「ふーん……」

その京都御所は、現在、期間限定で一部だけ公開されているに過ぎず、観光地と呼ぶには憚られるものがある。

八雲の冗談は確かに冗談なのだが、それでも大多数の日本人にとって、いまだにあの地は一般人がおいそれとは踏み入れてはならない場所なのだ。

その禁裏を、いまだに守護し、警護する者たちが京都に居るといふのだ。そのひとつが黒田家である。

ただ、表向きには皇宮警察というものがあり、現在、その役目を行っているのは皇宮護衛官なのだが、それらはあくまでも明治政府が作った組織である、というのが<sup>えもんふ</sup>彼らの言い分である。

「衛門府えもんふといひます。平安時代に制定された役職で、主上おかみから大内裏の警護を任

されておりました」

「……」

平安時代っていつだっけ？ と聞くことはなかった。

頭の中に急いでメモをしただけである。

八雲の話は続く。

「黒田家は、大内裏の外郭十二門のうち、いかんもん偉鑿門の警護を任されております。建造物としては残っておりませんが、その地を護る使命は依然として黒田家にあります」

「……って、今も？」

「はい。平安の世が滅び、武家政治へと変遷し、さらに維新を経ても、朝廷の組織というものはほとんど変わることなく、現在まで続いています。江戸時代に少の改革がされ、徳川家の都合のいいように作り直された部分がありますが、それでも、勅命のもとに仕事をする者たちは、実に二六五八年、同じことを淡々と繰り返しております」

「その二千何年ってのはどういう計算なの？」

「皇紀といえます。初代、神武天皇が即位された年から数えて、という意味です」

「なるほど。それに比べれば、江戸幕府も明治政府も歴史が浅いつてことだね」

「御意」

八雲が最初に強調した「京都の」という言葉の意味が分かりかけてきた。

口にはしなかったが、沙龍なりの理解でいえば、黒田家というのは、仮想敵も居ないのに、今となっては誰も住む者の居ないお城を護っていて、そのことに多大な誇りを持っている家だということだ。

ただし、従者である八雲はわりと冷静な見方をしているようだ。黒田家に心酔しているわけでもなく、京都の人間のことを時として揶揄するような言い方もする。

そんな人間が、『叔父さん』に内緒で沙龍と独自にコンタクトを取ろうとする理由はなんだろう、と考えた。彼にとってはこの深夜の訪問は冒険のはずだ。

「現代の世において、京都御所を護るということに、精神的な意味はあっても、実質的な意味はほとんどありません。衛門府という役職も無実化しています。し

かし、京都の十二家（※平安京大内裏には十二の門があり、この物語では一つの門を一つの氏が警護担当していることになっている）は、そこに固執します。甲斐様、それはなんのためだと思いますか？」

不意に言葉を向けられ、沙龍は苦笑した。

「いい度胸だな。私を試そうってか。つまり、伝統と格式をバックに、政治に口出しできるとか、金まわりがよくなるとか、そういうオチがあるんだろう？」

「申し訳ありません。試すつもりはなかったのですが。仰る通りです」

「それで、あのスマートな『叔父さん』が金に目がくらんだ亡者だったことか？そこに、骨肉の争いがある、と？」

「金ではないところが厄介なのですが……。あのお方は黒田達彦様といいます。小次郎様の叔母様の配偶者で、黒田家に婿入りされた方です。東京で事業をされているのですが、私は先代より、達彦様をお助けするようにとのことで京都から遣わされているのです」

「その『お助けする』が『監視』という意味かもしれないことは置いておくとして……。先代ってのは？」



「小次郎様のお祖父様です。今は病床に臥せっておられます」

「フム……。先代ってのは一個前って意味だろう。じゃあ、現在のトップっていうか……。えーと、なんていうんだ？ 家長みたいな人は？」

「ご当主様は小次郎様の実父ですが、ずっと行方不明です」

「行方不明？」

「御意……」

その話になると口が重くなつたが、結局は聞き出した。

木佐小次郎の父親は、十年以上も前に黒田家を出て行ったきりで、連絡はないのだという。

原因は八雲いわく「ありすぎて分からない」らしい。

つまり、妻を亡くした失意のもとに失踪したのだとも考えられるし、不仲だった先代と決裂したことが原因かもしれないし、愛人の若い女と出奔したのかもしれないからだ。

幼い小次郎はそのまま黒田家で育てられたが、厳格な祖父や他人行儀な叔母とうまく馴染めず、母親の実家に入り浸っていたという。

「お母様のご実家が木佐姓なのです。華道の家元なのですが、それほど堅苦しいお家柄でもなく、小次郎様にとっては唯一、安らげる場所だったのでしよう」

「ふーん……」

本家を嫌って、母親の姓を名乗り、周囲から変わり者と言われようと、祖母から教わった華道を続けているのが木佐小次郎か、と沙龍は思った。

偏屈で繊細な若様、というより、ものすごく行動力の伴った反逆児に思える。京都の裕福な実家を出て、一人、東京の高校に通うなど、なかなかできることではない。その決断をしたのが恐らく十四、五歳の時なのだから、大したものである。

しかも、沙龍は知らないが、木佐小次郎は生活費も学費も自分で稼いでいるのだ。実家の世話になどなりたくない、という意地なのだろう。

「私、十五の時、なにしてたっけな」

思わず、呟いた。

黒いスーツを着た男たちを顎で使って、一流ホテルに寝泊りし、高級料理店で毎日のように食事をしていただけではないか、と思う。

「……はい？」

「いや、ひとりごとだ」

「はあ……」

黒々とした夜空を、いつものように飛行機が行き過ぎる。

沙龍はそのエンジン音を聞きながら、都庁に扮したロボットが、あの飛行機をなぎ払うところまでを想像し、八雲が話を再開するのを待った。

「先代の病状はあまり思わしくありません。医者からは一年もたないだろうといわれております。それゆえに、先代は小次郎様の帰郷と、黒田家の継承を望んでいます」

「でも、キサさんは、それを望んでないんだね？」

「そうです」

「お兄さんは？ キサさんにはお兄さんが居るんじゃないの？」

そう聞くと、八雲は目を見開いて驚いていた。

「小次郎様が、お話しされましたか？」

「いや。単に、名前から察するに、小太郎とかいうお兄さんが居るんだろうな、

と」

「そうですか……。貴女はやはり聡明な方ですね」

八雲が少し遠い目をしたように見えた。

外灯の光の届かない場所に居るので、表情はそれほどはっきり分かるわけではない。

「名前は小太郎ではありませんが、確かに小次郎様にはお兄様がいらっしやいました。幼い頃にお亡くなりになりましたが……」

八雲の声が硬い。

これも、タブーに近い話のようだ。

「小次郎様は先代ともお父様とも、もう二度と会うつもりはないと仰っています。そして、達彦様は、実はそんな小次郎様を応援されております。彼にとつては、小次郎様が黒田家から離れてくれるほうが都合がいいからです。表向きは先代の意思を汲むように動いてはいらっしやいますが……」

「なら、問題はないんじゃない？ おじいちゃんがちよつと不憫だけど、本人がイヤだつて言ってるものを、無理に帰らせても、いいことないよ」

「普通の家庭なら、それでもいいでしょう。ですが、さきほど申し上げました通り、十二家の内紛には、それなりの力が動き、それなりの金が動きます。このままでは死人が出ることでしょう」

「……」

「小次郎様の叔母である佐知子様も、三年前に病死されました。不審な死だったので、黒い噂もあります」

「つまり、一番近い人が疑われているわけだね？」

「そうです。しかし、先代は警察沙汰になるのを望んでいませんから、佐知様様の死が追求されることはないと思います」

「なるほど……。大体、分かった。病床にあっても猛烈な先代は、強引な手を使っても、孫を呼び寄せるつもりで、それを邪魔する奴には容赦はしない、ってことだね？　そして、タツヒコ叔父さんは、先代が死ぬのを待ちつつ、キサさんを説得する振りをしながら、実は正反対のことをしている。けど、この叔父さんも、キサさんが気が変わって、京都に戻るなんて言い出したら、最終手段も辞さないってことか」

「御意」

「そして、このままでは死人が出そうだから、孤軍奮闘しているキサさんを助けてくれるのが、あなたの個人的なお願いなわけね」

「御意」

「うん、まあ、そのお願いは聞いてもいいんだけどね……。ミスター・ヤクモ、あなたの本音はどこにある？」

パーカーのポケットに両手を突っ込んで、沙龍は立ち上がった。

そろそろ帰りたいし、話を終わらせたいので、それが行動に出たのだ。

「私の？」

「うん。あなたは危険を承知でここに来たわけでしょ？ この密会がバレたらタツヒコ叔父さんに殺されるかもしれないし、私の機嫌を損ねたら私に殺されるかもしれないってのに、それでも、ここに来た。つまり、命を賭しても護りたいものがあなたにもあるってことでしょう？ それは、黒田家なの？ 先代なの？ 違うよね？ あなたの第一優先順位は木佐小次郎その人なんじゃないの？」

「……そうです」

沙龍は「やっぱりね」という顔をして、ため息をついた。

「なら、それを人任せにしようとする理由が分からない。そうやって、あなたたちが距離を置くから、キサさんはあんなに無表情な人になっちゃったんじゃないの？」

「……そうかもしれませぬ」

「だったら、貴方が第一にすべきはこんな密会じゃないと思うんだけどね」

それは、言わずにはいられなかった沙龍の嫌味である。八雲は痛いところをつかれてうなだれていた。

「私は、小次郎様に嫌われていますので……」

自嘲するように言った八雲の暗い表情が、誰かに重なった。沙龍のよく知る、上海で八年間そばに居た従者だ。

が、董天はこんな表情はしない。彼は、沙龍に嫌われることをちっとも苦にはしていなかった。

同じセリフを、彼はもつと楽しそうに言うだろう。

「……」

「……」

また一機、都庁の上を飛行機が飛んでいく。

黒い小さなシルエットが沙龍の視界の右から左へ抜けていった。

「聞きたいことが二つある。ミスター・ヤクモ、それに答えてくれたら、契約成立してもいい」

八雲に背を向けて、言った。

「はい」

「さつき、黒田家が護っているという、門の話をしていたな。その名前……」

「偉鑿門いかんもんですか？」

「イカンモン……、か。なにか、別名がないか？」

「え……？」

「これは完全に私の勘なんだが、平安京が中国の条坊制（※東西と南北に大路を引き、碁盤目状に区切った都市及び、その計画のこと）を模して造られた街なら……、その偉鑿門いかんもんとやらはこうも呼ばれているんじゃないか？ 即ち、玄武門、と——」

「……！ その通りです。しかし、なぜそれを？ 地元の間人しか使わない呼び



方ですが……」

八雲からは見えないが、沙龍は、笑っていた。

そうだろうと、恐らく、きつと、そうなんだろうと、思っていたピースが、<sup>は</sup>填めるべき場所にピッタリと<sup>は</sup>填まったのだ。これが笑わずにいられようか。

「そして、もう一つ」

「はい」

「私の正体をあなたに告げたのは、誰？ 海外からの使者か？」

「海外？ いえ、違います」

そちらのほうはまるで心当たりがない、という顔をしている。

つまり、八雲は『蒼龍会の元老板』としての沙龍にコンタクトしてきたわけではないのだ。

なら『黄龍の保持者』として、か。

しかし、それこそ、絶対に漏れるはずのない秘密ではないか。

「私がある人からそれを聞いたのは、二十年前のことです」

「はあ？ 二十年前って、私、生まれてないんだけど……」

「そうですね。しかし、あの人は、確信していた。やがて『馨』という名を持つ人間が、黒田家の人間と接触するだろう、と。私も最初はなんのことか分かりませんでした」

「いったい、どういうことなんだ……？」

「それを、幼い私に告げたのは、斎藤新助という人です」

「サイトウシンスケ？」

「息子か娘かは分からないが、子供が生まれたらその名をつけるつもりだから、と言っていました。恐らく、貴女のお父様だと思います。当時、二十代後半くらいに見えました」

「……？ 私の父親は甲斐弥太郎という名前で、斎藤姓ではないんだが……」

「多分、それは、時の権力者から逃れるための偽名でしょう。もしくは、斎藤の方が偽名かもしれませんが」

「サイトウ、シンスケだって……？」

それは、内藤翁の幼馴染みで、自らが富田に調べろといった名前ではないか――

「ただいまー」

誰も居ない部屋に向かって沙龍がそう言うのには理由がある。

玄関を開けたすぐのところに、おもちゃのようなロボットがあつて、これが、人体に反応して機械音声で「お帰りなさい」と言ってくれるのだ。ブリキの見た目はとてもレトロだが、中身は最新のセンサーが搭載されている。家具を用意してくれた水上が、ついでに（そして恐らくは洒落のつもりで）置いてくれたのだらう。

「オカエリナサイ」

中性的でやや幼い声が迎えてくれる。それが一番無難であるという計算のもとに作られているのだ。

深夜のジョギングから戻った沙龍は、すぐにウサミミという男に連絡を取った。勿論、あだ名である。宇佐美稔うさみみのるというのが本名なので、推して知るべしなあだ名がついたのだ。

宇佐美は、甲府の富田から「斎藤新助」の調査を引き継いだ男で、沙龍も既に何度か会っている。都内で事務所を持たずに個人で探偵業のようなことをやっていて、一見、しよぼくれた中年サラリーマンにしか見えないのだが、数年前は警視庁のかなり上の方に居たという。

だが、警察官になりたくてなったわけではなく、もともと極道筋の出身で、警察の内偵をするために警官になったというところでもない経歴を持っていた。

富田以上に鼻が効くようで、沙龍のことも会ったその日になにやら只者ではないと見抜き、素性については一切聞かなかった。

遅い時間だったので、パソコンからメールを送ったのだが、返事はすぐに来た。

沙龍の用件は、二つ。

一つは、八雲から聞いた話の裏取りともいうべき仕事で「京都の黒田家」に関することである。彼の話に嘘はないと思うが、敢えて沙龍に話さなかったこともあるはずである。そして、当事者が「敢えて話さなかったこと」には大抵、一番重要なことが隠れている。沙龍はそれを知りたいのだ。

そして、もう一つは「陰陽道や風水に詳しい人物を紹介して欲しい」という内容だ。

なるべく早く、できれば三日以内に、という無茶な注文をつけたのだが、「なんとかしてみます」と返答がきた。

そうして、沙龍は、三日後に松木ゴローという男に会うことになった。

13 勝敗が決まっているものを賭けとはいわない

俊先生へ

お元気ですか？

前回の手紙から少し時間が空いてしまいました。お返事遅れまして、ごめんなさい。

実は、今、テスト勉強をしているのです。そう、五月といえば中間テストなのです！

学校生活で一番嫌なものです。

そんなわけで、あと三十分もしたらまたテスト勉強に戻ります。今日は多分徹夜です。

桜の写真、ありがとうございました。とても綺麗に撮れてると思います。

最近、ちよつと日本史の勉強をしたので、五稜郭がどんな場所なのか、分かり

ます。

桜は吊いの花なのですね。なんとなく、そんな気がします。テストが終わったらじつくりお手紙書きますね。

再見！

甲斐馨

駅前のポストに手紙を投函し、すぐ横のカフェでホットコーヒーを買った。これは歩きながら飲むのが日課だ。

一月も経つと駅構内を突っ切るこの通学路も、目を瞑っても歩けるほどになる。

午前七時五十分。

朝の太陽に、都会の汚れた空気が暖められつつあった。

汗ばむ陽気だ。

コーヒーはホットではなくアイスにするんだった、と後悔した。明日はそうしよう。

東口に抜ける通路に差し掛かった時、そういえば、一番最初に木佐小次郎に会ったのはこちらへんだったなと思い出し、ふと立ち止まった。

「あれ……？」

いまさら思い出したのだが、あの時、彼は学校とは反対の方向に歩いていたらうな気がする。

それが、急に気になった。

「……」

少し時間があつたので、彼が歩いていた方向を、同じように歩いてみる。

特に目ぼしいものは見当たらない。どこの駅ビルにもあるような景色だ。

売店があつて、こじんまりとした本屋があつて（ここはまだ開いていなかったが）、トイレがあつて……。

さらに歩くと、券売機の向かいに、受付のあるブースがあつた。

（行政サービスセンター……？）



看板にはそう書かれていた。つまり、区役所の出張所である。

ここで、各種証明書の写しを請求したり、住所変更届けなどを提出したりできるのだ。

区役所よりも早い時間から開いているので、忙しい社会人にはありがたいサービスである。

今も、スーツ姿のビジネスマンが受付の女性になにやら書類を手渡していた。木佐はこの区役所に用があつたのだろうか。

辺りをもう一度見回すが、目を引くようなものはなにもなかった。

ここから学校までの距離を考えると、これ以上先には行っていないはずである。

(まあ、いいか……)

考えても分からないことは考えないのが沙龍の流儀なので、くるりと引き返して、学校に向かった。

駅ビルを通り抜け、大通りを右に折れると、同じ制服がどこからともなく湧いてくる。いったい彼らはそれまでどこに居たのだろうか、と思うと可笑しくなる。

上を向いて歩いていると特にそうだ。ふと気付くと、わらわらと軍隊アリのように同じ姿の人間が集まっている。同じ制服、同じ靴、違うのは顔だけ。

彼らは、いや、自分達は、宇宙人から見れば個体識別のできない、一種類の生物となる。

これを制服マジックと呼ぼう。沙龍はそう命名した。

通学路の桜並木は、すっかり普通の緑色に戻ってしまった。といっても山梨で見た深い緑とはほど遠い、都会の中に紛れ込んでしまうような薄い緑だ。

今日はヒバリもスズメも居ない。電線に灰色のハトがとまっているだけだった。

沙龍は、いつものように上を見ながら歩いていたが、ほとんどの生徒たちはノートやメモ帳を見ながら歩いている。今日はテスト初日なので直前まで詰め込もうと必死なのだ。

彼らは学校のテストでいい点を取り、ゆくゆくはいい大学に入り、最終的にはいい会社に入らなければならないのである。

その点、沙龍は、勉強をしに日本に来たわけではないので気楽だった。

一台のBMWが生徒と排気ガスを吐き出し、去っていく。近かったので、その煙の匂いが沙龍の鼻をついた。

甲府の澄んだ空気をここに持ってきたいもんだ。そう思った時、

(チンジュノモリ……)

また、その言葉が浮かんだ。深い緑をイメージすると、どこからともなく現れる。

これはなんなのだろう。

携帯電話を取り出して、以前、水上が送ってくれたメールを見た。

『鎮守の森っていうのは、文字通り、神社で神様を守るために植えられた木々のことだと思えますよ』

(神様、か……)

その言葉は、日本ではとても曖昧に使われている。

「人間が理解できない力を持った存在」を全て「神」とひっくりかえり呼んでい

るのではないか、と沙龍は感じるのだ。

だからなのか、日本人にとって「神」はわりと身近な存在である。

付喪神つくもがみも神なら、稲荷も、帝釈天たいしやくてんも同じ神である。それは、独特な世界観といえる。

沙龍があくびをしながら、ちようど校内に入ったところで、

「甲斐馨——ッ！」

よく通る声でした。

朝っぱらから人のフルネームを叫んでいる男が居る。

二、三人は声のする方を振り返ったが、他の生徒たちは自分のことに忙しく、朝からハイテンションな男のことなど見向きもしない。

沙龍も聞こえない振りをしてさっさと靴をはきかえて行ってしまった。

「コラ、待てエエエエ——ッ！」

全力疾走の江戸川渡が後を追いかけるが、足はそれほど早くはない。

目の前を走っていった二人に、木佐小次郎は、うんざりした表情で呟いた。

「まったく騒がしいな……」

「早速、賭けの対象になつてるようだが」

そう言ったのは須藤である。

木佐の隣に、ひときわ背の高い影があつた。

「賭け？ どんな賭けだ？」

「甲斐が逃げ切るか、江戸川が捕まえるか、つて話さ」

「それは、勝負にならないだろう」

「ほう？ お前はどっちを買つてるんだ？」

「そりや……」

と言いかけてやめる。

須藤はなぜか微笑んでいる。それが、妙に癪に障った。

この二人は一年の時に同じクラスだったので、多少はお互いのことを知っている。

「いったい、あの騒動の原因はなんなんだ」

木佐は話を逸らすために聞いた。

「知ってるかと思つたが。江戸川はしばらく入院してたんだ。甲斐がそのキツカ

ケを作ったとかで逆恨みしてるらしい。話を聞いてみると、甲斐に責任はなさそうなんだがな。むしろ、突っ走った江戸川の自業自得だ」

「……それで？」

「それで、廃部の危機にある演劇部に入るならチャラにしてやるって言ってるそうだ」

「……？」

木佐は、江戸川渡が演劇部の部長であることを知らなかった。

興味がないので、覚える気もないのだろう。

「演劇部だって？　しかし……」

その話は、とっくに解決したのではなかったのか。

あの説明会で、パンダにつられた新入部員たちが数人居たはずだ。それで、廃部の危機は去ったのではなかったか。

「渡部の話では、説明会の時の一幕は、欠席していた江戸川には伝えていないらしい。甲斐がパンダの正体は秘密にしておいてくれと言ったそうだ」

「なんでまた……」

「甲斐の義侠心ってやつだろ？ かつこいいじゃないか」

「そんないいもんか。あれは——」

言いかけてやめた。

人の善意を信じている須藤に「あれは単なる面倒くさがりじゃないか」と言つたところでしようがない。

「つまり、甲斐さんが演劇部を救つたことを知らずに、江戸川は宿敵と思ひ込んで彼女を追い掛け回してるわけだろ。渡部さんや、甲斐さんが、一言言つてやれば済む話じゃないのか」

「まあ、言つたところで、既に暴走を始めた江戸川の耳に入るかどうかって話もあるんだがな」

「確かに……」

なるほど、事情をなんとなく察している者たちは、みなそう思っているからこそ、誰も何も言わずに、賭けでもして楽しもうという腹なのか。

木佐は虎の子の一万円札を取り出すと、

「甲斐馨が逃げ切る方に」

と言って、須藤に渡しておいた。

普段、お金には人一倍うるさい木佐がそんな思い切りのいいことをするので、須藤はかなり驚いていた。

テスト初日は、沙龍にしてはまずまずの出来だった。

苦手教科がなかったということもあるが、「問題文が分からない」という事態にならずに済んだのは大きい。日々、日本語の読み書きを鍛えているおかげだろう。保科俊には感謝しなければなるまい。

読み書きだけの話ではない。彼には精神的にも色々助けてもらっていると思うのだ。

「そっか。プレゼントとか送るのもいいかな……」

駅構内の、百貨店の広告を見てそう思った。小さな女の子が、リボンのかかった箱を持っている写真だ。

俊先生になにかお礼の品を送ろう。できたら誕生日とか、そういう分かりやす



い口実があつたほうがいい。

通路の端っこに寄つて、携帯電話を取り出し出した。これには保科悠の番号も入っている。前に一度会つた時に、聞いておいたのだ。

学校は午前中だけで終わったので、まだ昼前という時間である。

仕事中だろうからメールにしようか、とも思つたのだが、ちまちまと文字を打つのが面倒だったので電話にした。

こちらは世間知らずな女子高生なので、「仕事中の人間に電話をかける」といった配慮に欠けた行動をしても、ある程度は許してもらえらるだろう、という計算もある。

それに、新人社員ならいざ知らず、三十路の保科悠なら、仕事中の電話などどうとでもなるだろう、とも思つた。

何度目かのコールで繋がつた。

「あ、もしもし？ 甲斐です。こんにちは」

『おっ、甲斐さん、どうしました？ お久しぶり』

相変わらず、声がでかい。

その声を聞いて、保科悠の体育会系の顔を思い出した。

「えーと……、ちよつとお伺いしたいんですが、俊先生の誕生日っていつですか？」

『え？ 俊の？ 五月二十二日……、って、明後日か』

「あ、明後日!？」

いきなり予期せぬ展開だった。

が、今日や明日でなくてまだよかったかもしれない。明後日なら、今日発送すればギリギリ間に合う。

保科悠は、沙龍が自分の弟のことを「俊先生」と呼んでいることや、なぜ誕生日が知りたいのかについて、とくに何も聞かなかった。

仕事が忙しかったのかもしれないし、興味がなかったのかもしれない。そう思うことにした。

それに、興味があっても興味が無いそぶりをするのは大人たちの特権だ。

沙龍は礼だけ言って、電話を切ると、足早に百貨店の入り口に向かう。

ランチタイムということで駅は混んでいた。人混みを縫うようにして歩くのも

慣れたものだ。

「あ……」

同じような服、同じような髪型、個体識別の難しい人混みの中に、くつきりと輪郭を持っている人物を見つけて、沙龍は足を止めた。

木佐小次郎が美形だから、人混みでも目立つ、というわけではない。

沙龍が見た時、彼は後姿だった。それでも、沙龍には分かるのだ。

別に木佐小次郎の体から普通の人には見えないオーラが出ている、とか、そういった話ではない。

後姿でも分かるのは、それがよく知っている人の姿だからだ。

「キササーン」

転がるように走りながら駆け寄った。

木佐小次郎の無表情な顔が振り向く。

「今帰り？ あのさ、ちよつと相談が——」

「学校の外では君と話はしないと云っただろう」

「それはキササーンであって、私には関係ないもん」

「……」

木佐はこの一向にへこたれない顔には何を言っても無駄だ、と知っている。彼女こそ自分のルールのみで生きている人間だ。

「で、相談とは？」

諦めて聞いた。

話を終わらせるためには話を聞くしかない。

無視したら、彼女は恐らく家までついてくるだろう。

「お世話になっている男の人へのプレゼントってなにがいいかなあ？ 年は三十

前くらいの人なんだけど」

「職業は？」

「医者」

「……」

こんな脳天気で病気とは無縁な顔をしているくせに、どこか患っていて通院でもしているのか、と一瞬思ったのだが、その一瞬後には余計な詮索はすまい、と思った。

「男の人の欲しいものは分からないから、せめて迷惑がられないものをあげないとー、と思つて」

「三十前で、医者か……。結婚はしてるのか？」

「さあ。独身じゃないかなー、という気はするけど、よく分かんない」

「……」

木佐は根が真面目なので、こんな風に相談されれば、真面目に考えてしまう。損な性分なのだが、こればかりは変えられない性質だった。

「テスト勉強しに帰りたいでしょ？ ごめんね」

人のことなどお構いなしの脳天気かと思いきや、こんな気遣いも見せる。

木佐は、沙龍のつむじと、左側の大きな百貨店を交互に見て、最後に腕時計を見た。

「いや……。日々の予習復習さえしつかりやっていれば、あと教師の癖さえ知つていれば、テスト勉強なんかしなくても大丈夫だ」

「ホホウー、首席の方は言うことが違いますな！」

コロコロと小さく動き回る仔犬みたいだな、と木佐は思った。

なんだろう、この不思議な生き物は。

「ちよつと気が変わった。付き合おうよ」

「え……？」

「今から買いに行くんだろ？ 見て決めよう」

わー、どうしたんだろう、と沙龍は思ったが、木佐がそう言ってくれたことが嬉しかった。

その後、一時間くらい百貨店であーだこーだと唸っていたが、結局は木佐の「高校生からもらう物にケチをつける大人なら縁を切ればいい」という一言で悩むのをやめ、小筆に決めた。

書道グッズはどれもこれも高すぎて、贈られたほうが躊躇するような品ばかりだったのだが、このサイズの筆なら高校生でも買えるということで、少し高級なものにしたのだ。

しかし、それだけでは、百貨店が用意してくれた箱がスカスカになってしまうので、オプションもつけた。そちらは全面的に木佐の意見を取り入れて、その品物で箱の隙間を詰めるようにした。

そうして、ラッピングしてもらった箱をさらに紙袋で包み、コンビニから宅急便で送って終わりだ。

翌日には届くという。さすが資本大国だ、と沙龍は思った。

「北海道の人なのか」

木佐はさつき沙龍が「函館までどれくらいかかりますか？」と問い合わせていたのを聞いていたのだ。

「うん？」

「いや、通院してる病院のお医者さんかなにかだと」

「ああ……、それでさつきへんな間があったのね。大丈夫、私は病気してないよ」

「だらうな」

「えっと、それは、コイツは病気とは無縁だって顔してるよなって、意味ですかね……?」

「ご想像にお任せする」

「……」

太陽は南中をだいぶ過ぎている。

が、ランチタイムが終わったからといって人がはけるような駅ではない。

鉄道五社、計十五本の線路が乗り入れている日本一のターミナル駅だ。一日にここを利用する人は三百万人以上も居る。

相変わらず、どこを向いても人混みだらけである。

「お腹空いたね。お昼ご飯おごるよ」

沙龍は付き合ってくれたお礼もあるのでそう言ったのだが、

「いや、今日は僕がおごるよ」

「えッ!? しわい、という評判のキサさんが、ですか? おごってくれる、ですと!？」

「須藤がなにか吹き込んだか……? 近々、臨時収入があるんでね。多分、十倍くらいになって返ってくるから、数百円くらい大したことないさ」

「へー。キサさん、ギャンブラーなの? 見かけによらないねえ」

「違うな。勝敗が決まっているものを賭けとはいわない」

「ふーん」



沙龍は、いつか木佐をあの中華料理店に連れていこうと思った。

しかし、今日はおごってくれろというので、木佐の入っていった定食屋についていこうではないか。

ご飯おかわり自由、という素敵な文字が看板に書いてあった。

14 東京は誰のもの？

三日間のテスト期間が終わって、晴れ晴れとした心地である。

が、沙龍は焦っていたし、急いでいた。

諸々の雑用が長引いて、学校を出る時間が予定より三十分も遅れてしまったのだ。走って行けばなんとか間に合うだろうか。

「あれ？ 今日にはひとり？」

「うん、またねー」

沙龍は部活に急ぐ小川タマミに手を振って別れを告げ、江戸川渡に追いかけれながらも、足の早さでそれをかわし、校門のところでは須藤を追い越しがてら、声をかけた。

バスケット部はテスト明けなので休みのようだ。

「お、キャプテン、また明日！」

「おいおい、明日は土曜だぞー」

「あ、そうか。んじゃ、よい週末を―」

軽やかに去っていく沙龍の後ろ姿に、須藤はしばし見惚れていた。

「運動部で活躍できそうなんだがなあ……」

今から新宿駅でウサミミと待ち合わせをしているのだ。そのために、沙龍は急いでいた。

時間に遅れそうだが、全力疾走すればなんとかなるだろう。

それよりも、陰陽道に詳しい人を紹介してくれるという話なのだが、「歴史にも詳しくて、できれば荒事にも慣れている人」という条件をつけ忘れていたので、風水マニアみたいなOLさんが来たらどうしようとして少し心配していた。

まあ、その時はその時で、五分ほど世間話をして帰ればいいだけの話だ。

ウサミミに指定されたコーヒー店は、一杯千円は取るようなお高い店で、店内は少し暗めに照明を絞っていた。商談にはもってこいの場所だ。

制服のまま入っていいのだろうか、と思ったが、覗いた店内は、そこまで大人の雰囲気はなかった。

奥のテーブルで、ウサミミが手を振っている。

「馨ちゃん、こつちこつちー」

業界人のような喋り方だが、風貌は普通のくたびれたオッサンである。

冴えないジャケットの下はサラリーマン時代のYシャツのようなものを着ていた。おしやれという言葉を知らない種族だ。

しかし、そのウサミミの向かいには、おしやれそのものといった格好をした、青年か壮年くらいの男性が座っていた。いや、沙龍が現れた時には、もう立ち上がっていたのだが、ウサミミはなぜ彼が立ったのか分からない。

男性は、沙龍がそばまで来るのを待って、

「こんにちは、松木といいます」

これ以上ないというくらいの、にこやかな笑顔を向けてきた。

木佐小次郎の顔を見慣れた沙龍にとっては「普通の端正な顔」だったが、世間的には充分美形で通用する顔だ。

「こんにちは」

沙龍も思わずつられて微笑む。

背が高い。思わず見上げる高さである。須藤と同じくらいありそうだ。

体格は須藤ほどがっしりしてはいないが、それでもスポーツマンのように引き締まった、恵まれた体躯を持っていた。

パステルカラーのソフトスーツがよく似合っている。ネクタイのかわりにスカーフを巻いていた。スーツの淡い色とは正反対の、濃い、はっきりした色のスカーフだ。

そのいでたちからしても、明らかに普通のサラリーマンではない。

欧米で教育でも受けたのかという徹底ぶり、松木と名乗った青年は、沙龍が席に座るまでずっと立っていた。

「いやー、本当に女子高生なんだねえ。宇佐美さんが僕を呼び出すための方便かと思ったら」

「だから本当だって言ったじゃない。信じないんだから……」

二人は知り合いのようだ。

しかも、だいぶ前からの付き合いのように見える。

「馨ちゃん、この人が松木ゴローさん。歳、いくつだっけ？ 僕より一回り以上、下だったよね？」

「二十六です」

「あ、そんなに若かったの？　で、ゴローちゃん、こちらが甲斐馨さんね。高三だったよね？　十七歳？」

「はい」

「……で、バタバタして悪いんだけど、僕はこれから別の仕事があるから、行かなくちゃいけないんだよ。二人、残して行っちゃうけど、大丈夫だよ？」

「はい、私は大丈夫です」

沙龍がビジネス用の言葉と態度で答えた。

「一時間くらい、お話が聞ければ」

「僕は可愛い女の子のためなら、何時間だって大丈夫だよ」

対して、松木ゴローは軽い。

ソフトに軽い。

まるで柔軟剤のような男である。

「風水マニアのOLさん」以外では、こんなのが来たらどうしようかと心配していた「学者崩れの蒔蓄野郎」でもなさそうだが、果たしてこんな軽いナンパ男に

なにかレクチャーでできることがあるのだろうか。

ウサミミが慌ただしく去った後、

「さて、それじゃ……」

松木ゴローがカウンターの奥に居るマスターに合図をする。

かたわらのボーイがすぐにメニューを持ってきた。

「なにか飲む？ お腹はすいてない？ 学校から走ってきたんでしょう？」

「……」

沙龍は、微妙に片方の眉をあげた。

急いで来た、という様子は全部消してきたつもりなのだが。

「私、息、あがってます？」

「ううん？ そうは見えないけど？」

「じゃあ、なぜ、走ってきたって分かるんです？」

「ああ。えーとね……、うん、内緒」

はつきりしない物言いに、今度は、不審な顔をしてみせた。

「私、汗臭いですか？」

「いや、そんなことないよ。ごめんね。余計に気を使わせちゃったかな」

「……」

「僕ね、人の心拍数が分かるんだ。で、君の鼓動が、ちよつと早くなつてたから」

「……？ でも、どこにも触れてないですよね？」

そう、握手もしていないのだ。

なのに、何故分かるのだろう。

「うん、そうだね」

手品師だろうか。どこかにタネがあつて、きつとそれを聞くと「なーんだ」となる展開か。

そういうえば、どこか上品な手つきといい、やわらかな物腰といい、マジシャンのように見えなくもない。

が、その話は一旦中断された。

松木がメニューを開いて、「なんでも好きなものをどうぞ」と言ったからだ。

「すみません。じゃ、遠慮なく。お昼がまだなので、ランチセットのAとB、そ



れから、カレーライス大盛りとピラフ普通盛りお願いします」

「……。えっと？ ちよつと待って？ これから、誰か、お友達でも来るのかな？ 二、三人くらい？」

「いえ？」

「じゃあ、全部ひとりで食べる……のかな？」

「あ、ちよつと多かったですか？」

「“ちよつと”？ ……ま、まあ、多いか少ないか、と言ったら多いのかもしれないけど……」

ちなみに「大盛り」という文字はメニューのどこにもない。沙龍が勝手に言っているだけである。

優雅にコーヒーを飲む松木ゴローの前で、沙龍はいつものようにガツガツとラシチセットを平らげた。今日は猫をかぶる必要はない。

「えーと、それで、まつきいさん」

沙龍には「つ」の発音が難しい。松木ゴローにはその呼び方が妙に可愛らしく聞こえた。とても新鮮である。

食欲のすごさを除けば、さらに、上海モードが発令しなければ、沙龍も人によつてはギリギリ可憐な女子高生に見える場合もあるのだ。

特に今日のリボン・タイは、いかにも私立高校の制服っぽくて、男性には受けがいただろう。いつもはネクタイをしているのだが、今朝はどこを探してもそのネクタイが見当たらず、仕方がないので、制服の入っていた箱の中からこちらのリボンを抜き取ってきたのだ。

「はい。なんででしょう？」

にこにこと応じるのは、なにか、職業柄なのだろうか。

でも、接客業をやっているようには見えない。というより、そもそも、働いているのだろうか？

平日の昼間に自由に時間が取れるということとは自由業なのだろうが、作家やフリーカメラマンにも見えない。

「お仕事はなにをされているんですか？」

「あー、仕事ねー、占い師みたいなことをしてます」

その言い方がまた限りなく怪しい。

「みたいなこと？」

「稼ぎの面から言えば、名義を貸してるいくつかの会社の役員報酬の方が圧倒的に多いんだけど、そっちはほとんど仕事してないからねえ。ちゃんと仕事してるのが占い稼業なわけ。といっても、お店を構えているわけじゃないんだけどね。でもって、こちらはそんなに稼ぎもない」

こいつ、ボンボンか！

と、沙龍は松木ゴローの腕に巻いてある『オーデマ・ピゲ』に納得した。

上海でも親の金で遊び歩いているボンボンは何人も見てきたが、せいぜい彼ら  
が持っているのはロレックス・オイスターであり、ブレゲである。

一千万円クラスの『オーデマ・ピゲ』は格が違う。働かなくても生きていける  
人種だな、と悟った。

「占いはね、一応、プロを名乗ってるからね。易や風水のお勉強は本格的にしま  
した。宇佐美さんの話では、甲斐さんが聞きたいのは、陰陽道なんだって？」

「あ、はい」

「どういったこと？」

「……」

聞き方については、ずっと昨日からも悩んでいた。

陰陽道のエキスパートに会ったとしても、自分の正体や事情を隠して、いったいどう聞いたらいいのだろう、と。

端的に「四神はどこに居るんですか？」と聞ければいいのだろうが、それでは頭のおかしい人になってしまう。

しかし、沙龍が聞きたいのは、そして、東京に来た目的の一つは、それなのだ。

甲斐弥太郎探しと四神探し。

その二つが、目下のやらなければならないことである。

そして、この二つは、全く別個の案件でもない、ということ、八雲に会って理解した。

斎藤新助が予言したことにどういう意味があるのかは分からないが、少なくとも彼は黒田家の人間が『黄龍の保持者』と関わりがあることを知っていたのだ。

「東京は誰のものなんでしょうか」

代わりに、沙龍はそんな聞き方をした。

これでも、十分に「変な人」の烙印を押されそうな質問だが、沙龍はそれ以外の聞き方を知らなかった。

「東京が？」

「はい」

「誰のものかって？」

「はい」

松木ゴローはしつこくない程度に聞き返した。

「妙なことを聞くね。なぜそれが気になるのか、僕はそっちのほうが気になるな」

「うん、と……。私、外国育ちなんです。日本人なんですが、東京は初めてで……」

「ああ、なるほど」

松木が言う「なるほど」は、沙龍の言葉使いや全体的なイメージに対して、である。

日本で育った日本人にはない雰囲気があるのだろう。

「だから、東京に来たら、まずこの街の所有者に挨拶するのがスジだろうと思っ  
てたんですが、その所有者が誰か、分からないんですよね」

「所有者、か……」

不思議なことを言う、と松木は思った。

主権在民の考え方からすれば、街は「そこに住むみんなのもの」である。つまり、都民のもの、だ。

しかし、沙龍はそういうことを聞いているのではないだろう。

「所有者が誰かはつきりしないのは、本人が自覚していないからかもしれない  
ね」

それもまた、不思議な答え方だった。

所有者が居ることを前提にしている。

しかも、松木ゴローはそれが誰だか見当がついているようにも思える。

「馨ちゃん、君の言う『所有』って、どういうこと？」

「それを『壊せること』でしょうか」

「つまり、街を破壊できる力を持つてること？」

「まあ、突き詰めるとそうなたちやいますね」

「フム……」

松木は、数少ない情報から、沙龍の意図を理解しようと努めていた。

しかし、これはなかなか難問だぞ、と思う。

大体、この子は、何者なんだろう。

ただの占い好きな女子高生ではないというのは、宇佐美のニュアンスで分かったが、なぜこんな質問をし、なぜそんなことが知りたいのか。

そんな松木のかすかな躊躇を読み取ったのか、沙龍は自分の手の内を少し話し始めた。

「春になる前に、甲府に行っただです。あそこは、東京の西ですよ。新宿からずっと大きな街道が伸びていて、地図で見ると、山梨のあたりは綺麗な盆地になっていて、あ、もしかして、って思っただです」

「……」

「西に甲州街道、南に東京湾、東に隅田川、そして、北は日光……」

「そうだよ、東京は四神相応の地になってるんだ」

四神相応というのは、中国古来の地相学で、簡単に言えば、都市というものは、外敵を想定した時には背山臨水が望ましい、という話である。

平安京も、さらに、そのモデルになった長安も同じく四神相応の地になっている。

「この仕掛けを作ったのが江戸時代のお坊さんだってことは調べました」

「天海僧正だね」

「そうです。だから、天海が作ったのなら、天海の街なのかなあ、とも思ったんですが、彼はあくまでも参謀であって、黒幕ではないですよ。で、この場合の黒幕っていうのは、徳川家になるんですけど……」

「うん、そうだね」

「未来永劫、徳川家が繁栄するために四神相応の地を人為的に作りだした——とも考えられないんですよ。だって、結果から見ると、徳川は滅んでしまったわけだし」

「うーん……、天海僧正については、色々な説はあるんですけど……」



松木ゴローは『オーデマ・ピゲ』を見て、言った。

「馨ちゃん、時間はある？ お江戸の鬼門を見に行こうか。観光デートもかねて」

ごく自然に言うので、ナンパな響きはなかった。

もつとも、そのナチュラルさが彼の手口かもしれないが、仮に松木ゴローに下心があっても、李沙龍には何の問題もないのだ。

「はい、行きます」

沙龍は勢いよく立ちあがった。

鬼門、うしとらというのは、実は日本独特の考え方である。

丑寅うしとらの方向、つまり北東を指し、鬼が出入する場所だといわれている。

その災いを封じることが、古来、日本の都市計画や建築には欠かせないスキルだったのだ。

京都御所も北東の壁の一角を凹ませてある。これを「猿ヶ辻」という。

猿の像を置くことでそう呼ばれるのだが、なぜ猿なのか、というと、北東の反対側、南西を十二支であらわすと「未申ひつじまね」で、猿が鬼に対抗できると考えたためである。

この南西の方角を裏鬼門と呼び、これも、鬼門と同じように災いを呼ぶとされている。

白いコルベットに乗せられて上野まで行き、寛永寺の本堂の前に立った。

「ここには徳川十五代のうち、六人の将軍が眠っているんだよ。徳川の菩提寺だね」

「ジェネラルのお墓にしては、結構、こじんまりしてますよね？」

「アハハ、そうだねえ。まあ、お墓として作ったわけじゃないからね。天海僧正は、この寛永寺を江戸の鬼門封じのために、そして、芝の増上寺を裏鬼門封じのために作った、といわれてるよ」

「ふーん……」

「でもね、僕は本当のところは違うと思うんだ」

「え？」

「地図を見れば分かると思うんだけど、江戸城の本丸のあった場所から正確に測ると、北東の方角に、寛永寺はかすりもしないんだ。かなり北側に反れてる。それって、変だよな？ 鬼門封じのために作ったのに、鬼門はここにはない」

「はあ……」

「じゃあ、正確な北東の方角には何があるのかっていうと……、今からそこに行ってみようか」

少々もったいぶった言い方だったが、これもマジシャン特有のパフォーマンスだと思えばたいして気にはならない。

沙龍はちよつとわくわくしていた。

問題の場所は、コルベットで二、三分走ったところにあつた。歩いても行けそうな距離である。

平日の昼間なのに、さきほどの閑散としていた寛永寺とは比べものにならないくらい、人で賑わっている。外国人も多く見られた。

「わー、アサクサ？ カミナリモンだ！」

有名な観光スポットである。

写真で見たことのある風景があちこちに見られた。

「初めて来た場所では、その所有者にご挨拶、というのが君の流儀なら、このまま、浅草寺にお参りにいきましようか」

松木の言葉も話半分に、沙龍は仲見世通りを目を輝かせながら見ている。

日本人には馴染みの風景だが、外国人にとってはこの通りの雰囲気だけでもお祭り気分になれるものらしい。

「鬼門は、さつきも言った通り、日本独自の考え方だから、本場の陰陽道にはない言葉なんだよね」

浅草寺の手前、宝蔵門まで来て、松木ゴローがまた話を始めた。

「でも、もともと北東を重要視する思想は中国がオリジナルで、なぜその方角が凶兆とされてきたかっていうと……」

「北方騎馬民族が侵攻してくるから？」

「うん、よく知ってるねえ。僕が呼ばれた意味、なかったかな？」

「いえ、そんなことないです。とても勉強になってます」

それは本心だった。

軽いナンパ男とはいえ、松木ゴローの知識は本物だ。

加えて頭もいいのだろうということは、話し方で分かる。

「秦の始皇帝の頃よりずっと、漢民族にとっては頭の痛い存在だった匈奴。万里の長城を造ってまで防ぎたかった、この騎馬民族がやってくるのが常に『北東』だ。つまり、秦の都から見て北東、ってことだけだ。

さらに、中国大陆では強い偏西風が吹くでしょう。その西からの強風は色々なものを運んでくる。災いも恵みも、同時にね。つまり、黄砂も、雨雲も、キヤラバンも——。

だから、北東と南西という二つの方角はとても警戒された。この現実的な脅威が、陰陽道という学問の上に置き換えられた時に、鬼門や裏鬼門という名前になった——、と考えられているんだよ」

「へー……」

「でも、偏西風や異民族を警戒しなければならなかった中国と、小さな島国で盆地と山地の隙間に平野があるような日本とでは、北東の持つ意味も違ってくるよね。日本に匈奴は居ないわけだから」

「そうですね」

「なら、京都御所が猿ヶ辻を作ってまで鬼門を封じようとしたのは、なんのためだと思う？　確かに、平安京の頃から日本にも北東からの脅威はあった。蝦夷えみしというんだけど、これは坂上田村麻呂という人がわりとあっさり平定している。都の貴族が恐れるほどのものではないんだ。なら、どうして——」

「あれ？」

沙龍が足を止めた。

参道から少し外れた場所で、よく見知った美少年が大人二人と話をしている。

あまりいい雰囲気ではない。相手は明らかにチンピラといった感じだ。

「お友達……？」

と、松木が聞くも、

「の、予定の人」

変な答え方になった。

「はい？」

「ちよつと、ごめん、まつきい。なんか揉めてるみたいなんで、行ってくる」

「……って、ちよつと、馨ちゃん」

言う間にも、沙龍は参道の脇に駆けていく。

当然、松木もあとを追った。

「キササーン」

まずは無防備な女子高生らしく無邪気に近付く。木佐は沙龍の姿を見て一瞬眉を寄せたが、それ以降は知らぬ振りを決め込んだ。

「ああ？」

派手なシャツを着ていた男が振り向いた。

思いつきり人相が悪い。しかし、小者だな、と沙龍は思った。

「誰だ？」

男が、どちらともなく言うと、木佐の訝えた「知らない人です」という答えと、沙龍の「仲のよいクラスメイトです」が重なった。

「ああ？」

「ですから、知らない人です。頭がおかしいんでしょう」

「……」

松木は沙龍のすぐそばに立っていて、派手なシャツの横に居る、舎弟みたいな男のほうを注視していた。刃物を持っているだろう。そういう体つきだ。

「大谷さんおおたに、お金の件なら、僕のような苦学生にタカるより、もっと金回りのいい人にしたほうが効率がいいですよ」

「……」

よく見れば、木佐の顔には殴られた痕がある。

沙龍は張大哥の訓示もあるので、乱闘にはすまい、と思っていたのだが、そんな戒めなど一秒で吹っ飛んだ。

「まったく、どこの世界のチンピラも、従うのは力と金のみ。簡単でいいね」

「……あ？」

ブルドッグのような顔が、沙龍を睨みあげる。

派手なシャツと相俟って、RPGに出てくる下級モンスターにしか見えなかった。

「なんか言ったかい、ねーちゃ……ぐおっ」

絵馬の吊るされた木造の囲いに、太い身体を押し付けて、そのまま制止した。



男の両足は浮いている。

沙龍の片手は、恐るべき力で男の喉を押し潰し、身体ごとそこに押し付けているのだ。十秒もすれば昇天できるだろう。

「か、甲斐さん、やめろ！」

「あ、アニキイ——っ！」

舎弟が情けない声を出して助けに行こうとするが、松木ゴローがその手をねじ上げて制止した。

「ハイ、ちよつと大人しくしててねえー」

「イテエ——ッ！」

「このまま死ぬか？ もう金輪際、はした金のために、健気な高校生の下宿先を潰してまわる、なんてゲスな真似をしなくて済むぞ」

「……」

なぜ、甲斐馨はそれを知っているのだろう、と木佐は思ったが、それよりも真つ赤な顔をして今にも死にそうな男をどうにかしなければならぬ。

「甲斐さん、僕のためならやめてくれ！ 君が犯罪者になる必要はない」

「……と、お優しい美少年が仰るので、命だけは助けてやる」

沙龍が時間を見計らって手を離すと、男はドサッと荷物のように砂利の上に倒れこんだ。激しく咳き込んで、なにも喋れたものではない。

恐らく、これから先、普通の生活はできないだろう。脳に十分な酸素が行き渡らなかつた人間がどうなるのか、沙龍はよく知っている。

しかし、それでも、ずいぶん自分は優しくなつたもんだ、と苦笑した。

（上海じゃ、殺してるよ）

舎弟の男が泣きながら、アニキの身体を引きずっていった。

数人の観光客が遠巻きに立ち止まっていたが、沙龍が「なんでもないですよー」と笑顔で言うと、元のざわめきに戻っていった。

「たいしたもんだねえ」

松木が感心したように言っている。

そして、沙龍は拝殿の影に木佐を連れていくと、そこに座らせ、松木には濡れたハンカチを持ってこさせた。

どうも、木佐は疲労困憊している様子だ。

「事情は聞かないけどさ。反撃しないと、死ぬよ？」

「……僕のこととは放っておいてくれ」

木佐が両足の間を顔を伏せて言い放つ。

その言葉は、いつもより余裕がない。

「いやあ、これはいいね。稀に見る美少年の上に、叛逆児か。口説き甲斐があるなあ」

松木ゴローは場にそぐわない調子で言った。

「アナタ、バイだったんすか」

「あれ？ わかんなかった？ 君も不思議な子だねえ。可憐な女子高生かと思つたら、えらい男前で……。なんかもう、男前すぎて、馨ちゃんとは呼べない感じだけだ」

それよりも、あんな一幕を見せられて動じていない松木のほうが、不思議である。

荒事に慣れているという点では、沙龍が望んでいた人物だ。

「さて、それじゃ、馨君。これから、どうする？」

「うんと……、マツキー、悪いんだけど、キサさんを家まで送ってくれる？」

「お安いご用だよ」

「……」

木佐はもう何も言わない。

気力も体力も尽きているのだろう。

「私は、浅草寺の『所有者』に挨拶してから帰るよ」

「そうか。義理堅いね」

松木は木佐の隣に座って、沙龍を見送った。

小さな背中が後ろ手にバイバイしている。

「あ、そうだ。もう一つ、教えておくよ。僕が、浅草寺のほうで鬼門封じだと信

じる理由。浅草寺の山号はね、金龍山っていうんだ。金色の龍だよ」

「金色の、龍……？」

「黄色い龍っていうのはね、陰陽道においては反則なくらい、最強の存在さ。つまり、鬼門を封じるところか、鬼をひれ伏させることのできる唯一の存在なんだ。ま、君に言うことではないかな？」

「……」

小さな背中が宝蔵門の中に消えていく。

「黄龍……か」

木佐小次郎が小さく呟いていた。

15 なかったらパンツアーファウストで

夜の九時過ぎ、松木ゴローから電話があった。

無事、木佐小次郎を文京区の下宿先まで送り届けたことを報告してきたのだ。

『殴られたところは大したことはなかったけど、彼、だいぶ疲れてるみたいだね。電話に出ないのを心配してやって来た後輩くんのこと素っ気無く追い返してたよ』

沙龍はすぐにピン、ときた。

「その後輩って、ちよつと小柄で、アイドルみたいに可愛い顔してて、『木佐さーん』って話しかける人？」

『あー、うん。それだと思う。なんか、僕、すごい顔で睨まれちゃったんだけど、もしかして、あの子、色々誤解したかな？』

なにやらとても楽しそうに言う。

それについては無視した。

「キサさんが浅草寺に居た理由は分かった？」

『うん。通ってる居合道場が近くにあるんだって。あと、居合のほかにも古式柔術を習ってるらしいよ？ 普通の柔道とは違うらしいね』

「ホホウ……。あの初対面の人には二言以上話さないはずのキサさんから、そこまで色々な情報を引き出せるとは……。やるね、マツキー」

『あれ？ なんか、怒ってない？』

「いや、怒ってない」

ぶっきらぼうに言い放つ。

（居合に柔術だって？ 思いつきり武闘派じゃないか……）

今日、沙龍が殺人まがいの助っ人をしなくても、木佐一人で、あんなチンピラ二人、簡単に撃退できたのだ。

なのに彼はなぜ専守防衛に徹していたのだろう。

（分からん……）

疲れ切った木佐の顔が脳裏に浮かぶ。

毎日弁当を作って、予習復習をして、部活もやって、習い事もこなして、その

上、次々と下宿先で問題が起こって対応に追われれば、そりや疲れもするだろう。

沙龍がウサミミに調べさせて判明した分だけでも、木佐はこの二年で五回も引越しをしているのだ。

下宿先が火事になって文字通り住む場所がなくなったり、大家の借金問題で立ち退きを命じられたり、リフォームをするからと体よく追い出されたり、もう、本人も二回目くらいから、はつきりと背後にある意思を感じたようだ。

自分を東京に住まわせたくない人が居るのだ、と。

それは、京都の本家に他ならない。

『今日は早めに休むように言っておいたけど……。馨君に助けられたこと、気にしてみたいだったよ』

松木の声に色々な雑音が入る。

屋外に居るようだ。

「どういう風に？」

『うん、まあ、君達の関係はよく分からないんだけど、木佐君は、馨君に迷惑か



けたくないんじゃないかな。僕はそんな風に感じました』

「……そう」

『あと、木佐君に因縁をつけてた二人組は放っておいていいの？』

「そっちは、見当ついてるから、大丈夫」

『そうなの？ まあ、君がそう言うなら大丈夫なのかな。もし、手に余るようだったら、僕も少しコネとか手段とかがあるので、遠慮なく言ってください』

「うん、ありがとう」

礼を言つて、電話を切った。

なかなか頼もしい助っ人ができた、と思う。

「……で？ ミスターはなんの用だった？」

くるり、と振り向いた沙龍は、目の前で恐縮している人物はひとまず置いておいて、大きな寿司桶の中のウニがなくなっていることに目を吊り上げた。

「私のウニがねえじゃねえか——ッ！ 人が電話してる隙にッ！」

横でもごもごと口を動かしていたウサミミにドロップキックをかます。

浅草寺から戻って以来、沙龍の機嫌はすこぶる悪い。

「ゴフツ……、か、馨ちゃん、僕、一般人だからさ……、手加減してくれないと、間違いなく死、ぬ……」

ヨロヨロと動いているウサミミを尻目に、八雲が隣の寿司桶を差し出した。

「あの、こつち、どうぞ」

その小ぶりの桶の方には、まだオレンジ色に輝くウニが残っていた。

「ありがとう！ いただきまーす！」

「……」

八雲は腹をくくって謝罪のために来たのだが、この雰囲気はなんだろう。よく分からない。

この場を取り仕切っているのは間違いなく沙龍だし、今日のことには腹を立てているのも確かなのだが、彼女は八雲を責めるつもりはないらしい。

「経済的な妨害にとどめよ、という指示が行き渡らなかったのは私の手落ちです。申し訳ありません」

彼とて、大事な「小次郎様」に手をあげた人間に対しては腹が立っているはずである。が、その様子を見せることはなかった。従者特有の諦めか、抑制のせい

だろう。

「ミスター・ヤクモ、あなたがこの前、会いに来た時、きつといくつかは隠していることがあるんだろうなとは思っていたけど……」

「はい」

木佐を東京に居づらくするための仕事を指示しているのが先代なら、その現場指揮官は八雲だろう、という可能性は真っ先に考えた。

上海ではよくあることだ。

が、少々裏切られた気分は否めない。

「とりあえず、今日のこととは私にとってはギリギリ想定内だと言っておこう。結局、一番厄介なのは病床のジジイだってことだろ。でも、あなたにはジジイは裏切れない。だけど、小次郎様が不憫でしょうがない。だから、私に頼むしかない」

「御意……」

「しかし、ああいうチンピラを使う時点で、こうなることは予想できたよな？  
それとも、あんなカス野郎たちが実行役だったのは予定外だったのか？」

「確かに、東京のヤクザも質は落ちています。今までにも何度かやりすぎを注意したこともあります。しかし、京都の先代が、多少痛い目にあわせてもいい、と言っているのを彼らも鵜呑みにしているので、私からは強く言えないのです」

「もう、ジジイを殺せ」

沙龍が投げやりに足を組んで言うと、

「馨ちゃん、ここ、日本だからねー？　香港や上海とは違うのよー？」

ウサミミが心配そうに言った。

が、しっかりと残りの寿司を頬張りながらの諫言だ。

そのウサミミの言葉が、沙龍はチャイニーズ・マフィアとなにか繋がりがあのかもしれない、というヒントを八雲に与えてしまったのは事実である。

「ひとつ分からないんだがな、ヤクモ。キサさんだって相当腕に覚えがあるんじゃないのか？　なのに、なんでやられっぱなしなんだ？」

「小次郎様は……、力技で強引に解決しようとする先代と、同じ土俵に立つつもりはない、という強い意志があって、非暴力を貫いているのではないかと思います」

「かーっ、サムライかよ！ ジャパニーズ・スピリットかよ！」

厄介なものだ、と沙龍は思う。

信念ほど厄介なものはない。

しかし、木佐小次郎を形作っているのは、まさにその信念なのだった。

「タツヒコ叔父さんはどうしてるんだ？」

「特に今のところ動きはありません。小次郎様が本格的に進路を決める秋頃になにか画策するおつもりではないか、と」

「どういったことを？」

「進学するにしろ、就職するにしろ、小次郎様が東京に残るような工作を、です」

「そうか……。じゃあ、秋になるまでに先手を打つか。となると、動くのは、夏休みだな」

「なにか、具体的な解決策でもあるんですか？」

「簡単だ。キサさんと二人で京都まで行って、諸悪の根源に話をつける」

「……はい？」

八雲は、面白くない冗談を聞き返すように言った。

事実、冗談だと思っている。

しかし、沙龍は冗談で言っているわけではないのだ。

「それまでに、ウサミミ、キサさんの父ちゃんを見つけておけよ。その無責任一代男にも京都に来てもらおうからな」

「了解」

こちらは、しっかりと顧客の冗談と本気の境を心得ている。

「あと、キサさんにちよつかい出していた、ナントカ組のチンピラ」

「田沼組です」

八雲が答える。

「金はこれ以上払わなくていい。どんな契約してたのかしらんが、今日限り解消だ。文句言ってきたら、『先代』より金も力も持つてる怖い人がお怒りなので、二度と余計な真似すんなって言っておけ。金勘定と損得勘定のできる上司がいれば、多分、それでカタはつくが、もし、それでもゴネたら、PF-89 (※中国製の対戦車砲) を撃ち込め」

「罄ちやーん、ここ、日本なのよー？ PE-89はないと思う」

ウサミミがチャチャを入れたが、沙龍は大真面目に返した。

「なかったらパンツアーフアウスト（※ドイツの対戦車兵器）でもいい」

そうして、話は終わったとばかりに、残りの寿司を片付けにかかった。

もう鉄火巻きとエビくらいしか残っていないのだが、充分に美味しい。

これらは、八雲が銀座の寿司屋から手土産に持ってきたものだ。カウンターに座れば一人最低でも五万円はするという店である。

そうして、沙龍の新宿のマンションに来てみれば、胡散臭い先客が居て、こんな奇妙な会合になってしまったのだ。

「京都かー。なにが美味しいかなー。湯豆腐って季節じゃないし……」

既に観光気分の沙龍が言った。

「あの、甲斐様……。こちらから頼っておきながら伺いますが……。どうしてそこまで小次郎様のために尽力してくださるのです？」

「それも簡単だ。私はキサさんと友達になりたい。実家に帰られると困るからだ」

単純明快にして簡潔。

それが沙龍を形作っているものだった。

翌日、晴れた土曜日は一人で出かけた。

松木ゴローの言っていた、フェイクの裏鬼門と、本当の裏鬼門を見に行っただ。  
だ。

フェイクの方は芝の増上寺である。

ここも、寛永寺と同じく、徳川家の菩提寺になっており、歴代將軍たちの霊廟もある。立派なお寺だ。

江戸の裏鬼門を封じるために建てられたといわれて久しいが、不可解なことに、江戸城本丸から見ると方角はかなり南寄りにずれている。

(フェイクだとしても、なんでここにしたのかなあ……)

成田空港に降り立って、一番最初に買ったポケット地図を見ながら、沙龍も思った。



南にずれ過ぎなのである。

(地図を見ればすぐにズレてるのが分かるのに……)

そこで、昔の人は特殊な役職についていない限り、地図を見る機会はないのだと気付いた。庶民に出回っていた地図もないわけではなかったが、かなりあいまいで、正確ではない。

(つまり、庶民をだますことはわりと簡単だったってことか……？ でも、なんのためにフェイクを置いたのだったのが分からない……)

すぐ隣の東京タワーを見上げて、登ってみたい衝動を抑えつつ、次に、地下鉄で赤坂見附に向かった。

目的地は日枝神社である。

ここが松木ゴローいわく「江戸の本当の裏鬼門、その一」であるらしい。

「実はね、日枝神社は、方角は合ってるんだけど、距離が短すぎるんだよね。江戸城から浅草寺までは五キロ弱くらいあるんだけど、日枝神社までは二キロ弱と近いわけ。それが、ちよつと腑に落ちない点なんだよね」

松木ゴローに電話してみると、「早速行ってるの？ 行動が早いねー」などと

言われ、そんな話を教えてくれた。

「つてことは、江戸城から南西方向五キロあたりに、その二、その三の裏鬼門封じがあるつてこと？」

日枝神社を背に、ビル街を見ながら電話をしている。

天気がいいのでガラス張りのビルに反射した光がまぶしい。

こんなオフィスビルの林立する中に、歴史の長い神社があるのだから、東京は不思議な街である。

「うん。それが、渋谷あたりになるんだけど、位置的にドンピシヤリなのが氷川神社なんだよね。すごくこじんまりした神社だけど、まあ、そっちは時間があつたら行ってみるといいよ。ただ、日枝神社は日枝神社で、本物だと思うんだ。裏鬼門を重くみて、二重、三重に封じたのかもしれない」

「ふーん……」

「あ、そうそう、馨君。昨日、話が途中になっちゃったけど、京都御所が、実際の脅威なんかにもないのに、これみよがしに猿ヶ辻まで作って鬼門を封じようとしたのは、なんのためだと思う？」

「うーん……。その方がカネになるから？」

「フフツ、馨君の考え方は現代的だね。まあ、そういう側面もあっただろうけど、平安時代は残念ながらも少し観念の側に立っている。つまり、実際に、鬼やら、妖怪やらが居るわけでもないのに、『居ることにして』、庶民の恐怖を煽った——、ってことさ。為政者たちの常套手段だね」

「フム……。じゃあ、東京もそうなの？ 寛永寺や増上寺を作って、鬼が居ることにして、でも、実はそっちはフェイクで、浅草寺や日枝神社で、なにか別のものを護っていた……？」

「天海が真実、なにを護りたかったのか、それは僕には分からない。世間では怪僧だの、正体は明智光秀だの、と言われる人だけど、僕はそこまでいわくのある人だとは思わないんだよね。むしろ『ありもしない恐怖』に怯えて二重三重に鬼門封じを施した、小心者だったのかもしれないって気がするよ」

「……」

沙龍が黙っていると、松木ゴローは朗読するように言った。

「桜は天に舞い、蓮はすは海に散る」

「え……?」

「天海が詠んだとされる歌だよ。君なら意味が分かるんじゃないか、と思って」  
なるほど、もとは漢詩か。

沙龍は、地下鉄への入り口で立ち止まり、例のポケット地図を取り出して、余白に書いてみた。

桜舞於天

蓮散於海

それぞれ最後の文字をつなげると『天海』と読める。

彼はここから自分の名をつけたのだろう。

(桜は分かるけど、蓮って海に散るもの? よく分からないな……)

蓮が咲くのは、普通、池である。

なぜ、そこに海が出てくるのだろう。

「色々ありがとう、マッキー。詩の意味はちよつと考えてみる。んで、今から渋

谷の氷川神社に行ってみるよ」

「うん、気をつけてね」

16 氷川神社の男、初めての茶碗蒸し

渋谷の氷川神社は、松木が言った通り、本当にこじんまりとした神社だった。日枝神社とはだいぶ趣きが違う。あちらがビル街の中に堂々と歴史を見せ付けているのに対し、こちらは都会の片隅にぽつんと取り残されているような感じだ。

私立大学の敷地の向かいにあって、道路一本隔てた向こうでは若者たちが華やかに行きかっているのだが、神社の境内にまでやってくる者はほとんど居ない。たまに、神道学科の学生が掃除をしたり、挨拶がてらに通り返したりはするらしい。

ホウキを持った袴姿の男性が、そう教えてくれた。

「観光客の方ですか？ ここの神社は、たいして見るべきものもないんですけどねー、って、そんなこと言うと、宮司さんに怒られちゃうな」

「あれ？ アナタはこの神社の人ではないのデスカ？」

沙龍は、わざと、カタコト風の日本語で話してみた。

「僕は、隣の大学の神道学科の学生です。たまに、こうやって勝手に境内の掃除をしたりしてます。お正月とか、大きなイベント時はそれなりに賑わうんですけど、普段は参拝客もあまり居ないのでねー」

「へえ……」

確かに、境内は閑散としていて、とても静かである。

「せっかく隣なんだから、他学部の学生たちももつと来ればいいのに……」

「ジンジャはカミサマのいるところだから、おいそれと入ってはイケナイって思ってるんじゃないでしょうか？」

「そんなことないですよ。一般の方は確かに用もないのに入ってはいけない場所だと思っているかもしれませんが、もつと気軽に通り抜けの道として使っても神様は怒りません」

「そうなんですか？」

「よっぽど悪意のある不心得者じゃない限り、寂れるよりは、人で賑わっているほうがいいに決まっていますもん。神様もそう思っていますよ」

ちよつと不思議な青年だった。

ゆくゆくは禰宜ねぎや宮司になるのだろうか。渋谷や新宿に居る髪を染めた若者たちとは雰囲気がやはり違う。

「あ、そこからの景色は結構いいですよ。階段の手前あたり」  
言われたところに立ってみる。

渋谷という街は、すり鉢上の谷になっていて、駅が一番低い場所にある。氷川神社から見ると、その谷底を見渡すことができた。

「わー、本当だー」

「ね？」

学生は、掃除を再開していた。

境内を振り返ると、緑が多い。

空を覆うほどの背の高い木々が、ところ狭しと植えられていた。

「チンジュノモリ……」

ふと、沙龍は呟いた。

間違いない、このこんもりとした木々も「鎮守の森」なのだろう。



しかし、なぜ、その言葉だけがいつも突然出てくるのか。

深い緑の記憶とともに脳内のどこかに書き込まれた音なのか、それとも、まったく別の、なにかの作用なのか――。

「あ、そうそう。氷川神社が祭つてある神様のこと、ご存知ですか？」

青年が掃除の手を休めて聞いてきた。

「いえ、ごめんなさい。知らないデス」

「スサノオノミコトという神様です。日本神話ではわりと有名ですね。ヤマタノオロチっていう大蛇を退治したんですよ」

あとで覚えていたら調べておこう、と思った。

どうやら、彼はこの渋谷の氷川神社が裏鬼門封じの役目を果たしていることについて、全く知らないようだ。

「お話ししてくれてありがとう。駅に戻ります」

「お気をつけて」

青年が言い、沙龍が一步踏み出すと、視界が奇妙に揺らいだ。

めまいとは少し違う。

「……？」

赤、青、黄の三色が束になり、目の前を、波のようにうねる。

この感覚を沙龍は知っていた。

なにかの「スイッチ」を踏んでしまい、現実世界とは切り離された空間に引きずりこまれたのだ。

水色の袴をはいていたはずの青年の姿が、なにか、別のものに転じた。  
白。

輝くような白だ。

明確な形を持っていないそれは、他の色をなにも持っていない。

「……が討伐したものがなんであるのか、知っているか？ 大蛇は、つまり、竜のこと——」

なにかが、語りかけている。

さっきの青年の声とは明らかに違っていた。

決して、好意的ではない。

「この地に王は二人も要らない。なにをしに来た、金色の龍よ——」

「心の命ずるままに、旧友に会いに来た」

沙龍はそう答えた。

旧友というのが「昔からの友」という意味であることは知らない。「生まれながらの友」という意味で使っている。

が、声の主は沙龍の言葉など聞いていなかった。

「八岐大蛇のように成敗されなくては、即刻、去れ——」

「ちよつと大きいミミズを倒したくらいで大きな顔されても、ねえ」

「我に敵対するか、金色の龍よ——」

「そんなつもりはないよ」

「ならば、去れ。一つの街に一人の王でこそ、秩序が保たれるのだ」

「……」

どうやら結界の中に閉じ込められてしまったようだが、沙龍はそれほど慌ててはいなかった。

以前、中国の道士にこういう時の対処法を教わったことがある。

沙龍は、彼らのように、結界の正体を見抜く目も、それを破る技も持っていない

いが、理論は分かっている。

要は、「結界を施した者」よりも、上位の力でそれを消し去ればいいのだ。つまり、黄龍召喚すればいい。

それがあるから、沙龍はいつも悠然としていられるのである。

ただ、街中でそんな大技を披露するのは最終手段である。

(上位の力、か……)

手にしていた携帯電話の画面を見てみると、案の定「圏外」になっている。が、着信履歴の一番上を押すと、難なくコールがかかった。

やはりそうだ。

この状態で彼に繋がるということは、松木ゴローはただの占い師ではないのだ。

「はい、馨君、どうしたの？」

そんな声が聞こえた時、ふっと、嘘のように視界が戻った。

静かな境内、掃除をする青年、緑――。

「なんでもない。間違えて押しちやっただの。ごめん」

「……そう？ あ、氷川神社、行って見た？ 実は氷川神社と名のつくものは、すごく多くてね。関東だけでも二百以上あるんじゃないかな」

「そんなに？ ってことは、一つ一つは支社みたいなもの？」

「そうだね。分社とか分祇ぶんしっていうんだけど、渋谷のは、天海がなにか細工してない限り、普通の分社だったと思うな」

「ふーん……」

東京の裏鬼門を二重に封じる場所で、なにやら警告をするために出てきた男――。

彼の言う「この街の王」は、彼自身のことなのか、別の誰かのことなのか、沙龍にはまだ分からない。が、その「王」こそ、沙龍の言う「東京の所有者」のことである。

やはり、自分のように異質の力を持った者は、歓迎されないのだろうか。

上海では何も問題がなかったのは、沙龍自身が王だったからだ。黒猫という前所有者を倒し、沙龍が上海の王に成り代わったのである。

(うーん……、しかし、東京でそれをやりたくはないし……)

それでは、上海の二の舞になる。

街の支配者になったところで、沙龍の欲しいものは得られないだろう。

渋谷の駅ビルで遅いランチを済ませて、そろそろ新宿に戻ろうとしている頃、携帯電話が鳴った。

通知は知らない番号である。

「もしもし？」

「……木佐です」

少し躊躇するような間があつて、木佐小次郎の疲れた声が出た。

テスト明けであんなことがあつたので、まだ疲れが抜けていないようだ。

「この電話番号は松木さんに聞いた。それで、昨日のことなんだが……」

「うん」

「正直言つて、礼を言うべきなのか、余計なことをしてくれたなつて批難すべきなのか、分からないんだよ」

「そ、そうですか」

「……」

「それで？ 結局、どっちにすることにしたの？」

「そうだな……」

なんだろう。すごく間がある。

対面で喋っているとそんなことはないのに、電話だと言葉が詰まるタイプなのだろうか。

「あのさー、キサさん。ご飯食べた？ ご飯食べないと、頭も身体も働かないよ？ 姉の受け売りなんだけど」

「……前にも同じこと言われたな」

声はいつも通りだったが、なぜか、木佐が笑っているような気がした。

無表情で、無愛想で、笑っているところなど見たことはないが、きつとたいして表情も変えず、綺麗に笑うのだろう。

「君は、お姉さんが居るのか」

「うん、開業はしてないけど、医者免許持ってんの。すごく頼りになるよ。」

あ、弟も居る。こっちは泣き虫なんだけどー」

「……そうか」

「……」

「食事は……、昨夜、松木さんが心配して差し入れてくれたものが残ってるが……、今朝はまだ食べてないな。ところで、あの人は、君の彼氏なのか？」

「いや、全然。昨日会ったばかりの人」

「え？ そうなのか？ てつきり親しいのかと」

「まあ、これから親しくはなれそうだけど、恋愛に関しては見境ない感じだ

よー？ キサさんも気をつけてね」

「早速、口説かれたけどね。冗談だと思って流した」

「あらら……」

このまま歩くと、デパートの地下に入る道のりだったが、圏外になりそうだったので、そこで立ち止まった。

「あのさ、キサさん。ご飯作る元気もなさそうだから、今からなにか買って、キサさんちに行くよ。私になにか言いたいこともあるでしょ？ だから電話してき



たんでしょ？」

「……」

木佐がはつきり答えないうちに電話を切って、強引に行くことにしてしまつた。

松木ゴローに負けてたまるか、という意地も手伝って、さらに、例の可愛い後輩くんにも負けるわけにはいかないのだ。

デパ地下で自分の食べたいものを大量に買い込み、両手に大きな荷物を抱えて、地下鉄に乗った。

木佐の家は、小さな、学生向けのワンルームマンションである。

それでも山の手線内、二十三区ということで、家賃は高めだった。何度も引越ししていれば、その引越し料金も痛い。

沙龍は、木佐の家につくなり、テーブルの上に残っていた紙袋やナプキンを見て言った。

「え、なに、マツキー、帝国ホテルのテイクアウトなんか持ってきたの？ あんの、セレブめ……」

「美味しかったよ。さすがに」

木佐は力が抜けたような表情で言っていた。

学校で過ごしている時は、だいぶ緊張感を持っているのだろう。

それがいい意味で、今は抜けていた。

制服以外の姿を見るのもお互い、初めてだった。

パーカーに短パンの沙龍は中学生くらいにしか見えなかったし、普通のシャツにGパンという木佐はどこか大人っぽく見えた。

「昨日、家まで送ってもらって、すぐに別れたんだけど、その後でしばらくしてから、これを持ってきてくれたんだ」

「あー、それであんな時間だったのか」

松木から電話があったのは九時過ぎていた。

あのボンボンめ、しれっと抜け駆けしやがって、と沙龍は思った。

「で、君の今日の気分は中華だったわけか」

テーブルに山のように盛られた食品は、ほとんどが中華料理だったので、木佐がそう言ったのだ。

麻婆豆腐、水餃子、エビチリ、といったメジャーなものから、名前のよく分からない野菜炒めや、食材のよく分からない煮物などもある。

「そう。今日はどうしても茶碗蒸しが食べたかったんだけど、売ってなかったんだよね。やっぱお惣菜として売るのは難しいのかな、崩れちゃうし……」

「茶碗蒸し？ そんなのが食べたいのか？」

「うん」

「あれは卵と具があれば、すぐ作れる……。待ってる」

「……？」

そうして、一時間もかからずに、木佐は茶碗蒸しを作ってしまった。

具は、ありあわせと言っていたが、人参、鶏肉、しいたけなどが入っている。

一人暮らしの男子高校生の冷蔵庫にはなさそうなものばかりだが、沙龍は木佐のお手製弁当を見ているので、納得もした。

この茶碗蒸しは、沙龍が食べたかった「中華風」ではないが、初体験の和風の味は、沙龍をとりこにってしまった。

「う……、ウマイ！ 美味しい！ いや、最高に美味です！ 隊長！」

「そうか」

相変わらず素っ気無いが、まんざらでもない、といった表情だ。

「プルプル、プルプル、なにこのプルプル感」

スプーンで遊んでいる沙龍は楽しそうだ。

とても大の男を片手でくびり殺そうとした人間には見えない。

「キサさん、天才だねー。こんな美味しい料理も作れるなんて……」

「こういうのはマニュアルさえあれば誰でもできるんだ。褒められたことじゃないよ」

「え、そんなことないよ。私、できないもん」

「それは、君が料理を覚える必然性がないからだろう」

「ヒツゼンセイ」

「つまり、お金に困ってないってことさ」

「……」

お金に困ると、料理を覚えるのだろうか。

確かにそういう面もあるかもしれない。買うよりは作るほうがきつと安上がり

だし、同じ料理でも、ひと手間で美味しいものが作れるなら、スキルは上がってもいくだらう。

「キサさん、お金に困ってるの？」

ズバリ、聞いてみた。

木佐は少し間を置いて答えた。

「余ってはいない。いつもギリギリだ。余計な出費もあるからな」

「……」

「昨日のことも、その一環だ。君はなにか知っているようだが、それを聞きたくて電話したんだ。いったい、僕の、何を、どうやって知ったんだ？　そして、君は、何をしようとしている？」

「……」

とても正しい質問だ、と沙龍は思った。

日本語の使い方も教科書のようにだし、木佐がそれを聞きたいのは当然である。

「私、バカだから、キサさんみたいにうまく話せないんだけど、あのね、キサさんが何度か引越してしているという話は、とある人から聞いた。その人の名誉とか

事情があるから、名前は教えられないけど」

「八雲か」

「……」

なんだ、お見通しではないか。

しかし、ここで「うん」と言うわけにはいかない。

「それで、私は、きつとキサさんの力になれるんじゃないかと、その人と私は思ってる。別に頼まれたとか、そういうんじゃないかと……」

「頼まれたんだろ、八雲に」

「……」

全部、お見通しではないか。

沙龍は焦った。これは誤魔化せない。

しかし、木佐はそれ以上何も言わなかった。ため息をついて、エビチリを黙々と食べている。食欲があるなら、他にはなにも言うまい。そもそも、木佐に食事をさせるために来たのだ。

帰る段になって、木佐が言った。

「何度でも言うが、僕のごことは放っておいてくれ。君に危険なことはさせられない。君がどんなに腕に覚えがあるのだとしても、だ。そういう問題じゃないんだよ」

「……」

やっぱり手ごわいな、と沙龍は思う。木佐小次郎の強い意思是、自分では変えられないのだ。

今日は、保科俊に愚痴の手紙を書こう。

俊先生へ

お元気ですか？

三日前に粗品を送ったんですが、届きましたか？ カードを入れるのを忘れてしまったので、改めて、お誕生日おめでとうございます！

誕生日のこと、誰に聞いたのかは、内緒です！（分かるとは思いますが）

テストは無事終了し、ホッと一息ついているところです。

でも、今、ちよつと落ち込んでます。

例の華道部の彼は、ずっと無愛想のままです。

学校生活も一ヶ月経って、少しは仲良くなれたかな、と思っただんですが、私の錯覚でした。

友達になるのは難しいです。

でも、諦めません！

どうやったら彼の頑なな心を溶かすことができるのか、全然分からないけど！

俊先生は、そういう経験ありますか？

よく行く中華料理店で知り合った大学生いわく、恋愛よりも友情の片思いのほうが始末に負えないのだそうです。

今はなんとなくそれが分かります。

夏休みは京都に行くつもりなのですが、それまでにはなんとか現状を打破したいと思っています。

ではまたお手紙書きますね。



再見！

甲斐馨

僕の中で、不思議な力が発現したのは、五歳くらいの時だった。驚きはなかったように思う。なくした記憶の一片が戻ってきたような、懐かしさを感じたのを覚えている。

しかし、両親にとって、その人智を超えた力は忌まわしいものでしかなかったようだ。

黒田家の負の遺産――。

周囲の大人たちが陰でささやく言葉の端々から、それは窺えた。

物心ついた頃から既に両親の仲は冷え切っており、父親はほとんど家に居ないような人だったのだが、僕の力の発現を知った父親はさらに家をあげがちになり、僕が小学校に入る前には蒸発していた。

母親は父親失踪の責を問われ、黒田家の人間にいじめ抜かれた末に、心身を病み、籍は残したまま実家に戻ることになった。

僕は黒田家でそのまま祖父や叔母夫婦に育てられたが、無意味なしきたりや、厳格な祖父の教育方針に馴染めず、たびたび母親の居る実家に逃げ込んだ。……などという言い方をすると、健気な幼子が泣きながら一人でとぼとぼと道端を歩いているイメージがあるかもしれないが、実態はだいぶ違う。

僕は周囲の大人たちにいつもはつきりと行く場所は告げていた。

「あなたがたが追い出した母親に会いに行くのだ。それのなにが悪い」

と、言わんばかりの固い表情で、可愛げのない子供は、堂々と出て行った。

これには、叔母夫婦も手を焼いたようだ。

「あまり木佐の家に迷惑をかけてはいけないよ」

遠まわしに引き止める叔母には、理論武装して打ち負かした。大人はなぜみんなこんなに馬鹿なのだろう、と当時の僕は思っていたものだ。

祖父だけは理屈王の僕を言い負かすことのできる唯一の人だったが、やることをやっていれば（さらに、それが人よりも優秀であれば）、祖父はそれほどのさく言わなかった。

すなわち、学校の勉強と、習い事である。

小学校の勉強は予習も復習もする必要のないものだったので、僕は祖父から課された武道をマスターすることにだけ専念した。

大内裏十二門のうち、一門を預かる黒田家ではみな、実践剣法や古式柔術を修めなければならぬ。

それらは、文字通り、人を殺すための術である。

精神修養を目的とした現代武術とは根本的に違うものだ。

「おじい様、今の世の中で、このような刀を振り回す必要が本当にあるのでしょうか」

六歳の頃、初めて真剣を持たされ、その重さに困惑した僕は言った。

いい加減な遊び人のイメージしかない父親は、この真剣での修練はかなり早い段階でギブアップしたという。そうだろう。妻子を省みない男に務まる修業ではない。

日本刀というものは物理的にも重いし、その大きな刃で人体を斬るのだから、精神的にも重いものである。まして、子供にとっては恐怖以外の感情は出てこないだろう。

だが、僕はその恐怖を見て見ぬ振りをする事ができた。

この刃で人を傷つけたらどうしようとか、自分が斬られたらどうしよう、などという恐怖よりも、ありもしない外敵に備えて、人殺しの技を身につけることの馬鹿馬鹿しさのほうが勝った。

既に住む人の居ない禁裏を護るお役目というものが、いったい、誰の、なにになるというのだろう。

まったくの無意味ではないか。

祖父も、父も、虚しくはならなかったのか――。

「小次郎、我らが護らねばならぬものは過ぎし日の栄光ではない。未来へと続く日本人の誇りである。そして、古来、帝みかどより任を預かった黒田家の誇りというもの、人の生き死にの中にこそある。竹刀を使った競技やスポーツの中にはないのだ。分かるか？」

「……分かりません」

「ウム。お前はまだ幼い。じきに分かる時も来よう」

「……」

それでも、それらの技をマスターすることが、周囲の大人たちを黙らせる唯一の方法なら、やってやろうではないか。当時はそう思ったのだ。

ただ、淡々と、課された修業をこなしてさえいれば、大手を振って、母に会いに行けるのだ。

だから、強くなりたいたとか、自己を高めたいなどという意思は一切なかった。しかし、それからしばらくして、母は病死する。もともと、体の弱い人だったのに、黒田家の人間にいじめられ、彼らに殺されたようなものだ。

なにが黒田家の誇りだ。

一人の女性も護ることのできない男たちが、大層なお役目に千年もしがみついて、狂っている――。

「小次郎、お父さんやお祖父様を恨まないでね。彼らだって、私たちを憎んでいるわけじゃないのだから」

母は病床でそう言っていた。

僕は神妙な顔をして聞いていたが、その言葉を受け入れるつもりは全くなかった。

そして、秋雨の振る静かな日に、母は逝ってしまった。

結局、父は母の病室にも、葬式にも現れず、僕は祖母と二人で母を見送った。

（黒田の人間は、皆、敵だ——）

ずっとそう思いながら、耐え忍んだ。

母が生きているうちは母が、母が死んでからは祖母だけが僕の味方だった。祖母は、姿も性格も母とよく似ており、優しくて、押しが弱いところがあった。

八雲は味方の振りをしているだけで、祖父の言いなりに過ぎないのだと分かっていたが、それでも、祖母が死んで、いよいよ一人ぼっちになってしまったと感じた時には、彼を頼るしかなかった。

彼は、僕が生まれる前から黒田家に居て、歳の離れた兄のような存在だったが、思春期になると、その関係も、表層は変わらず、中身だけが徐々に変わっていった。

いつどこで知ったのか、八雲は、僕が女性に興味がまったくくないことについて、その原因を冷静に教えてくれたこともある。

「貴方が真由美様のお腹に居た頃、お兄様が亡くなる事件があったのです。それ

で、強いストレスをお感じになったのでしょ」

その話も、おぼろげには知っていた。

口さがない輩はどこにでも居るので、中学にあがる頃には、昔、この家でなにかあったのかを推測することもできた。

つまり、本来なら黒田家の当主になるはずだった兄は、行き過ぎた修業の結果、幼い命を散らし、そのことが原因で全ての歯車が狂ったのである。

その時、指導していた師範代は、祖父の激しい追及に会い、自殺を遂げる。妻子が居たようだが、京都からは姿を消したという。ほとんど一家離散だ。

そして、その事故が原因で僕の両親の仲も怪しくなったのだという。母は父から監督不行き届きを責められ、父は息子を失った悲しみを家の外に求めたようだ。祇園や新京極に愛人を作り、放蕩生活を始め、祖父からは早々に勘当された。

僕はこの父親とは本当に数回程度しか会ったことはない。そのかすかな記憶の中では、祖父にも、僕にも顔は似ておらず、なぜか筋肉質で、どうしようもない無責任男という印象だ。



(つまり、そういうことか……)

黒田の人間が、僕に対して、みな、どこか遠慮があるのも、兄の死が原因なのだ。

あの古くて広いだけの家には、その暗い事件がずっと影を落としている。

「お兄様は、当時、まだ小学校にあがる前の歳でした。そして、事件以来、お屋敷中から火が消えたようになり、それは永遠に続くかのようにも思われた……」

八雲は言う。

伏せ目がちに。

彼は、いつもまっすぐに僕を見ようとしなない。

それがなんとも悲しげで、魅力的でもあり、また、同時に僕の苛立ちも誘った。

「その中で生まれた貴方は、希望の光だったのですよ。それを……」

「それを僕に重ねられても迷惑だ！ 兄は気の毒だと思うが、結局、全ての原因を作ったのも、また兄じゃないか。僕がこんな特異体質になったのも、母が心労で亡くなったのも、父が家を出て行ったのも！」

思春期の僕には、生きている人より、死んだ人に責任を負わせるほうがマシだと思えたのだろう。

言い知れぬ苛立ちを八雲にぶつけ、彼には心と体の両方を慰めてもらうこともあった。

といっても、八雲は根っからの同性愛者なわけではない。祖父の言いなりに、なんでもする男なのだ。

中学二年になる頃には、僕はこの忌まわしい家から出て行くことを決めていた。

東京の高校に行く、というのはいい口実だった。在京の高校よりも偏差値の高い高校なら、祖父もしぶしぶ納得するだろうし、生活費も学費も要らないとなれば叔母夫婦も文句は言えないだろう。株で儲けた分があるから、なんとかやっていけると思った。

祖父には大学まで待てと言われたが、僕はあの街にも、あの家にも、一秒でも長く居たくはなかった。

東京に発つ日、新幹線のホームで八雲に言われた。

「すみません、小次郎様。実は、ご当主より、言うなと言われていたので、今までお話ししなかったのですが、実は、ご当主は真由美様がお亡くなりになるまでずっと京都に居たのです」

「……」

この頃には感情を顔に出さない特技を身につけていたが、多少は驚いた。てつきり、どこかの女と香港にでも行って豪遊しているのかと思っていたが、あの男だって、お祖父様の影響力から逃れたくて家を出たのではないのか。

「お葬式にも分らないように参列されました」

「……。なぜ堂々と出席しない」

「お察しください。あなたや木佐のご隠居に顔向けできなかつたのでしよう」

「それで？ 今頃になってなぜ僕に言う？」

「小次郎様が、きつとご当主を恨んでいると思ったからです。そういった感情を抱えてお一人暮らしをされるのは危険です」

笑いたくなくなった。

こいつは、僕が都会で墮落するとも思っているのか？

「別に、あんなろくでもない男のために魔道に堕ちたりはしないさ」

「分かっています。でも、充分、お気をつけ下さい」

「……」

八雲とはそれきりだった。

東京に行ったら行ったで、普段から東京と京都を行き来している、アメリカかぶれの叔父が色々とお節介を焼いてくるし、なぜか下宿先が次々とトラブルに見舞われるしで、心が休まる時がない。

それでも、僕は意地でもこの三年間は優等生で過ごすつもりだった。

勉強は言うに及ばず、乱れた食生活などと言われないためにも自炊能力を身につけ、家事も完璧にこなした。

京都時代に通っていた道場も、東京で支部に通うことになった。これは祖父からの条件でもあったし、僕も護身の意味では続けたいと思っていた。

小さい頃は義務でしかなかったこれらの修業も、高校生にもなるとだいたいぶ取り組み方が変わってくる。

幸運にもずっとお世話になっていた居合の先生が、ほとんど僕と同時期に東京

に移り住むことになったので、見知らぬ人だらけの土地というわけでもなくなつた。

そうして、東京にも慣れた三年目の始業式の日。

その日も、朝早くから駅の行政サービスで転出届を提出しなければならず、桜は各所で満開だったものの、僕自身は晴れやかな気分でもなかった。

「おーい、その人ー。ちと道をお訊ね申すー」

変な新入生に学校までの道を聞かれ、その一時間後には、新入生だと思つていたその編入生が、桜の木に登ろうとしている。

あまり関わりたくなかったのだが、言わずにはいられなかった。

「その木にその格好で登るのはやめたほうがいいと思うんだが？」

返答がまた変わっていた。

「区役所の街路保全課のスタッフじゃないならちよつと見逃してくれ。なにもこんな『やわい木』によじ登ろうってんじゃない」

「……」

いよいよ関わりたくなかったが、もう遅かった。

いつの間にか、甲斐馨は僕の視界の中にしよっちゅう現れる存在となった。これをなんと言うのか、僕は知っている。

なんと追い払っても顔の周りをぶんぶん飛ぶ、あの、五月の蠅だ――。

僕の高校ではテスト順位が廊下に貼り出されるようなことはない。

順位は、テストの数日後に配られる一枚の紙で分かる。そこには、各教科の点数と合計なども打ち出されている。

(よし……)

総合一位だったのでホツとした。

毎回、首位をキープしているとはいえ、ライバルも居ないことはないのです、彼らが死に物狂いで勉強してきたら、この地位も危うい。

「えー、三百二十四人中、二百九十九位って……。もう一つ下がってれば、キリがよかったのにー」

前の席では、甲斐馨が唸っていた。

待て、嘆くポイントが違うだろう。

編入試験を受けて入ったんじゃないのか。

なんだその底辺をウロウロしている数字は。

「なんだ、甲斐。前の学校で習ってないところだったか？」

須藤が笑っている。

今時、高校のカリキュラムなんて、全国ほぼ一緒だろうに。

ホームルームが終わって、雑然とした時間、またあの騒がしい声がした。

「甲斐馨——ッ！」

江戸川の怒声がクラス中にとどろく。

いい加減、こいつをなんとかしてくれ。

ずかずかと他人のクラスに入ってきて、甲斐さんの横にやってくると、江戸川は一枚の紙を机の上に置いた。

「そら、演劇部の申込書だ！」

一般の入部期間はとっくに過ぎていたのだが、部長の推薦と許可さえあればいつでもイレギュラーに入ることができる。このシステムは非常に越権的な気がし

なくもない。

「あのさあ、利根川くん」

「江戸川だ。なんか、だいぶ遠くなったぞ」

「私は演劇部に入るつもりはないって言ったじゃん。だいたい、演技なんて全然できないんだから」

「そんなことはない！ あの日、新宿駅前でキミが声をかけてきた時、俺は確信した。できる！ こいつはできるぞ！ 百年に一人の逸材だ！ 絶対、後悔はさせない！ キミならすぐ十年後のスターになれる！」

「おい……。いくら日本語が得意ではない私でも、その言葉にもものすごく矛盾があるのは分かるぞ」

「ということで、演劇部の申込書、書いておけよ」

「人の話を聞けつてのに！」

「……」

江戸川という男は確かに人の話を聞いていないが、僕に言わせれば、甲斐さんだってほとんど人の話を聞いていない。



「あのさあ、淀川くん」

「待て。音としては近くなつたが、場所は相当離れたぞ」

「さつき配られたテスト結果、何位だった？」

「ん？ 中間テストか？ 二位か、三位だったかな、まあ、いつも二位か三位なんで、あんまり真剣に見てないんだが」

「……」

「……」

「……」

微妙に場が、シン、となった。

甲斐さんはきつと「見かけによらずこの人頭いいんだねー」と思っただろうし、二人のやり取りを聞いていて、ところどころ笑っていた須藤も「こいつが俺より上なのか……？」と思っただろうし、僕はというと、すぐ下に「コレ」が居るのか……、という暗澹たる気分になつたのだ。

卒業まで絶対首位はキープしてやる。

ここに、今、固く誓おう。

「あ、ところでキサさん」

くるり、と振り向いた甲斐さんは、

「今日、部活あるの？ なかったら一緒に駅まで帰っていい？ ちよつと頼みごともあるんだけどー」

「内容は？」

「いやー、ここではちよつとー」

須藤や江戸川の前では言えないってことか。

「分かった。下駄箱まで一緒に行こう」

「ツレナイっすね……」

彼女と関わるのは正直言って嫌なのだ。

僕が学校の連中には内緒にしている二つのことを、彼女はいともたやすく暴いてしまいそうだからである。

その一つは、不可思議な力のことだ。

祖父が言っていた。

僕が五歳の時に自覚したこの力は、黒田の血に刻まれた盟約なのだ、と。

恐らく、太古の昔から、連綿と続く呪縛であるのだ、と。

誰に言われずとも、僕にはそれが分かっていたし、兄が死んだことで「仕方なく」僕に受け継がれたことも理解していた。

「ならば、お前は宿命通りに金色こんじきの龍を探すがよい」  
でも、おじい様。

なぜ、僕がそんな宿命に付き合わなければならぬんです？

木佐の早足を考えると、教室を出てから下駄箱につくまで三分もかからない。だから、いきなり用件を切り出して、反応を見たほうがいい。沙龍はそう考えた。

「あのね、日本の武道全般に詳しい人を紹介してほしいんだ」  
案の定、真面目な木佐は歩調を緩めて、その意図を聞いてきた。

「武道だって？ どういう観点で？」

「前に、古武術の話をしてくれたよね。自分でも色々調べたんだけど、要するに、古武術って、現代の競技として残ってる剣道や柔道じゃなくて、昔の実践殺法のことだよな？ で、私が探してる派閥っていうか、流派？ も、そっちに該当する気がするんだよな」

「探してるっていうのは、例の、ヒバリを気絶させる技のことか？」

「うん」

「それで、『武道全般』なのか」

頭のいい人は話が早いな、と沙龍は思った。

碧媛は「甲斐弥太郎の技は一子相伝かもしれない」と言っていたが、それでも、武術などというものは大まかな流れがあつて、そこから派生していくものだから、似たような系列のものは探せばあるのではないかと沙龍は考えているのだ。

「単純な疑問なんだが、本人に聞くことはできないのか？　それが一番早いだろう」

下駄箱で靴をはき替えながら木佐が言った。

彼が自分の言ったことを守る気なら、沙龍とはここでお別れである。

しかし、むしろ、この話を続けたがっているのは木佐のほうだった。なんだかんだ言つて、ヒバリの話は、彼にも興味があるようだ。

「それはできないんだ。もうだいぶ前に死んでる人だから」

「故人か」

なるほど、という顔をして、木佐は沙龍が靴をはき替えるのを待った。

暗黙のうちに、一緒に帰ることを認めている。

その様子は、傍目には仲のいいカップルに見えた。

ショートカットの小川タマミが「へえー」という顔をして、少し遠くから二人を見送っていた。

「しかし、なぜ、僕に、武道に詳しい知人が居ると思うんだ？」

校門を出たあたりで木佐が聞いてきた。

「だって、キサさん、居合とか柔術とかやってるんでしょ？」

「なぜそれを知っている？」

「マツキーから聞いたもん」

「ああ……」

と、思い出したように頷く。

あの巧みな松木ゴローの話術につられてつい話してしまったのだ。少し、後悔している。なぜ、初対面の男性に、さらりとした表面上とはいえ、身の上話などしてしまったのだろうか。

「……」

木佐が無表情のまま黙ったので、沙龍も無言でついていった。甲州街道に出るまではそのままだんまりで、会話はなかった。

汗ばむ陽気で、沙龍は既に上着を脱いでいるが、木佐はきつちり紺色のブレザーを着ていた。

五月末というこの季節は、もう初夏といってよかった。これから暑くなるのだらう。

「あ、そうだ。この前、プレゼント贈ったお医者さんからお礼状が来たんだけど、喜んでくれたみたいだよ」

車通りの多い甲州街道に出ると、沙龍の声も自然と大きくなる。

「……そうか」

「オプシオンに詰めたハンカチも、センスいいですね、って褒められたんだ。ありがとう、あれ、ほとんどキサさんが選んでくれたんだよね」

「……そうか」

無表情で素っ気無い言葉しか返ってこない。

いつもの木佐である。

しかし、沙龍は、木佐の無表情は動じていないのではなく、そう努めているだけという事が段々分かってきた。

叔父さんと会った時の否定の仕方、浅草寺での一幕、その端々を窺えば、実はとても激情家ではないかとも思える。

それらを抑えるための無表情なのだろう。

「あ、あとね。この漢詩の意味分かる？」

沙龍は、いつも持ち歩いているポケット地図を開いて、木佐に見せた。

余白に漢字が書き込まれているページだ。

木佐は立ち止まってそれを受け取ると、

「君の話は、あちこちに飛ぶな……。えーと？ 漢文はそれほど得意じゃないん

だが、これは天海僧正の詩か？」

「さすがだね、知ってるの」

「内容を覚えているわけじゃないが、彼が謎めいた詩を残した話は知ってる。さらに、このラストの二文字でそうだろうと」



桜舞於天

蓮散於海

二行のそれぞれ最後の字をつなげると『天海』と読める。

初見ですぐそれに気付いた木佐はやはり色々なものが見えている人なんだろう、と沙龍は思った。

「蓮って、海には咲かないよね？ 塩水では育たないんじゃないかなあ……」  
かねてからの疑問だ。

「多分、これは比喻なんだろう」

「比喻？ どんな？」

「さあ……。僕は天海のことは興味もないし知らないからな」

「そっか。実は、浅草寺でキサさんと会った日、上野にも行ったんだよね。あそ

こは桜の名所で、不忍池しのばずのいけ っつてもあつて……」

「ああ、そういえば、不忍池には蓮があるらしいな」

「うん。寛永寺が天海の作った寺なら、きつと、不忍池も彼が関わってると思う

んだよね。あの池に蓮があったからあの詩を詠んだのか、それとも、詩を詠んでからその通りに蓮を置いたのか……」

「気になるのか？」

「うん……。『舞う』も『散る』も終わりを意味してるから、自分も人生を潔く美しく終えたい、という意味にも取れるけど、仮にも出家した人がそういう俗人的なことを望むかなあ、って……」

「……」

木佐はやけに使い込まれたポケット地図を沙龍に返し、歩き出した。

またしばらく無言だったが、東口の文字が見える頃になって木佐が言った。

「君の知りたいことが両方分かるかもしれない人を一人、知ってる」

「え!？」

沙龍は木佐の前に回り込んだ。

「僕の居合の先生だ。子供の頃からお世話になってる。剣術の達人で、他の流派のこともよく知っていて、日本史にも詳しい。なんだったら、紹介してもいい。

ただし——」

木佐の切れ長の瞳がキラリンと光った——ように見えた。

「な、なに？ 条件つきなの？」

「今後一切、僕につきまとわないこと。それさえ守れるなら、紹介しよう」

「うわー……」

「なんだ？」

「いや、ちよつと感動してんの。キサさんって本当にサムライなんだねー。そんなどうとでもなる口約束を、私が守ると思ってんの？ 自慢じゃないけど『うん、分かったー』って笑顔で言っつて、先生を紹介してもらったら、翌日にはもうそんな条件忘れてるよ？」

「……君は仁義とか礼節というものをどこに捨ててきた。言え、僕が拾ってきてやる」

「小田急百貨店の三階のトイレの中」

「……」

「……」

券売機の前で立ち尽くしている二人に、行き交う人が何度か振り返る。

恐らく木佐の美貌に対してと、異様な二人の雰囲気に対して、だろう。

「しかし、わざわざそれを言う君も、だいぶお人好しじゃないか？」

「そうかもね」

「……」

「……」

「あれ？ 木佐さん？」

一人の少年が声をかけてきた。そのイントネーションで、沙龍にはすぐに分かった。

振り返らずともこの声の主が自分と同じ制服を着ていて、アイドルのように可愛い顔をしているのは知っている。

少年は沙龍をチラッと冷たい瞳で見てから、木佐に対し笑顔を作った。

「直也なおや——」

「どうしたんです？ 今帰りですか？」

「ああ」

木佐は少年の出現に対しても無表情を貫いている。

迷惑なのか歓迎しているのかは分からない。

「ご一緒してもいいですか？ どうせ、今日、うちに来る日ですよ？」

そうして、少年は二人に割り込むような位置に立った。

眼前をふさがれる形になって、沙龍は思わずムツとする。

こうも分かりやすい嫌がらせを受けるとは思わなかった。

なるほど、平和な国である。自分が誰に何をしたのか、その結果どうなるかも分からないなんて、なんとも脳天気な話ではないか。

「……」

「……」

沙龍も木佐も、この確信犯の少年にどう対処すればいいのか考えている。

沙龍は、自分から喧嘩をふっかける真似はすまい、とひとまずの方針を打ち立て、木佐は木佐で、この場の空気はかなり正確に読んでいた。

少年にとって木佐に近付く者は全員敵である。それが友情であれ、恋情であれ、関係ない。

この前、松木ゴローと下宿先で鉢合わせした時には、はっきりと「あなたは木

佐さんの何なんです？」と、きつい調子で言った少年なのだ。あまり煽るようなことはしたくない。

その少年があどけない顔で言う。

「あ、ごめんなさい。お話し中だったんですよね？」

「……」

「甲斐さん、彼は、さっき言った、僕の恩師の息子だ。岡田直也という」

そういう関係か、と沙龍は少し納得した。

その恩師には子供の頃から世話になっていると言っていたから、この岡田少年とも子供の頃からの付き合いなのだろう。

「そうですか。二度目まして」

沙龍が棒読みのビジネスライクな日本語で言った。

「二度目……？」

少年は不思議そうな顔をしている。

四月の始業式の日、桜の木の下で会ったことなど、少年の方は忘れていたの  
だろう。

「じゃ、私はこれで」

面倒くさそうなので今日は帰ろうと思ったのだが、意外にも木佐が呼び止める。

「待ってくれ、話が終わってな——」

そこに、別の声が重なった。

「甲斐さん？」

「あ、ミスター……」

水上である。

面倒くさいところに、面倒くさい人が登場したのだが、彼の会社は駅の向こう側にあるのだから、勤務時間中にここを通ることがあってもおかしくはない。

大きめの書類ケースを手にした水上が思うことといえば、この少年二人のうち、どちらが沙龍とより仲がいいのだろうか、ということだろうが、その心配はまったく見当違いであった。

それにしても、彼女は面食いなのだろうか。少年は二人ともすぐモデルやアイドルになれそうなほど顔が整っている。

上着を脱いでYシャツの袖もまくっている水上は、高校生から見れば板についた社会人といったところかもしれないが、沙龍にとっては、毒にも薬にもならない男だった。それでも、義理は果たさなければならぬ。

「キサさん、話の続きはまた、明日」

沙龍はそう言って、水上の方に行ってしまったのだ。

「……」

木佐は少し複雑な気分でその男性を観察した。ごく普通の会社員に見える。

まだ、この前の松木ゴローの方が印象は強いし、濃い。

「なんだ、カレシが居るのかあ」

岡田直也は独り言のように呟いていたが、そこには「なら木佐さんに近付かないですよ」という文句もにじんでいた。

「カノジョのことを『甲斐さん』とは呼ばないと思うが」

木佐の呟きは、聞こえなかったようだ。

「元気そうだね。学校の友達？」

水上は、沙龍の頭越しに少年二人を見て言った。



こちらを気にしつつ、彼らは改札へ向かうことにしたようだ。

「はい」

「いいの？ 一緒に行かなくて」

「また明日も会えますから」

「そっか……。丁度よかったよ。近々、君に電話しようと思ってたんだ」

「……？」

「その……。なんでそれを聞いてきたのかは分からないんだけど、保科が『甲斐さんの誕生日知ってるか？』って聞くもんだから」

「……。えっと、保科悠さんが？」

「うん」

つまり、保科悠は、弟に聞かれたのだろう。

その背景はとてよく分かる。

「それで、自分では聞きにくいから、聞いておいてくれてって頼まれたことが少し嬉しいようだった。」

「十二月です。まだ先の話ですよ」

「何日？」

「一日です」

「そうか、ありがとう」

「……」

なぜ、誕生日を答えてお礼を言われるのか。相変わらず読めないし、どこかずれている。

水上は、この後、すぐ会社に戻らなければならないが、夜は空いているので夕飯でも一緒にどうか、と誘ってきた。当然、そういう流れは予想できたが、断る口実をこの数分の間に見つけることはできなかった。

マンションに戻って着替えてから水上の指定したイタリア料理の店に向かったが、だいぶ早く来てしまったようだ。

その持て余した時間、昨日届いた、保科俊からの手紙を再読してみる。

立夏の候、ますますご健勝の事とお慶び申し上げます。

先日は誕生日の贈り物をどうもありがとうございました。

素敵な小筆ですね。今もこれを使って書いています。大変書きやすく、これから愛用させていただくつもりです。

予期せぬ人から予期せぬ物が届いたので、とても驚きました。思えば、馨さんには最初から驚かされっぱなしですね。

そして、驚きと共に大変嬉しく思いました。

たまたに誤解されるのですが、書道をやっていると、文章を書くのも慣れているのだと思われがちですが、それは全く違います。

書道家は作家にはなれません。かくいう私も、昔から作文は苦手です。この嬉しさが馨さんに伝わっていないのではないかと、とても危惧しております。

「緩衝材」と馨さんは仰っていましたが、小筆と一緒に入っていたハンカチ群は「オプション」なのででしょうか。それとも実はこちらがメインだったのででしょうか。

とてもセンスのいいものばかりで、これも早速使わせていただいております。ふと、これらを選んだのは別の人じゃないかとも思いましたが、真相は聞かないことにします。

その後、馨さんの学校生活は如何でしょうか。

前回の御手紙で落ち込んでおられたので、心配しています。

確かに、友情の片思いは残酷ですね。自分にも多少、そんな経験があります。

馨さんと、その華道部の彼の間には、なにか障害があるのだろうかと思います。

原因は彼の方にありそうな気がしますが、それが二人にとっての障害になっていくのでしょうか。

試練、といったほうが分かりやすいかもしれませんが、馨さんからの御手紙を読んでいる限りではそんな風に感じるのです。

ですから、その試練を乗り越えることができるなら、きっと、道は自然に拓けるのだと思います。

遠い北海道の地から「頑張れ」と応援することしかできませんが、馨さんのご健闘を祈っています。

また落ち着いたら近況をお報せください。

馨さんからの御手紙をいつも楽しみにしております。

ではまた。

保科俊

(俊先生、いい勘してるなあ……)

よつぽど、ハンカチの柄が「甲斐馨の選ばないようなもの」に見えたのだろうか。

(でも、俊先生が思っている「馨さんらしい」ってどういうんだろう……)

そう考えると、実は、真実の姿とそれほど変わらぬ印象を持たれているのではないかと思える。なぜなら、最初の頃は多少なりとも作っていたものの、書道の達人相手にそれは無意味であると気付いてからは沙龍も手紙の中では素の十七歳になっているからだ。

保科俊は、沙龍の顔も声も知らない。しかし、「華道部の彼」と仲良くなりたくて奮闘していることは知っている。

「ごめんね、待たせたかな」

思索に耽っているところに、儂い感じの水上がやってきて、今度は虚構の「甲斐馨」を作らなければならなくなった。

水上は、沙龍が上海からやってきたお嬢であることも、不思議な日本語を喋ることも、背が小さくて、ベージュ色の髪をしていて、緑青の瞳をしてることも知っているが、学校ではどんな友達が居て、誰と仲がいいのかは知らない。

「いえ、そんなに待ってないです」

水上だって待ち合わせ時間よりは少し早く来ている。

なのに、このサラリーマンは遅れたことを謝るのだ。

「お腹すいてるでしょ？ なんでも好きなものを頼んでいいよ」

「はい……」

といっても、じゃ、メニューにあるものを全部持ってきてください、とは言えない。

ひとまず、無難に「本日のおすすめ」の肉料理とサラダを選んでおいた。アル  
コールは飲みたかったが、我慢した。

「水上さん、私に遠慮しないでお酒飲んでくださいね」

「そう……？　じゃあ、ビール一杯だけ貰おうかな」

水上の貼りつくような視線が気になった。

それを目で問うと、

「いや、初めて『水上さん』って呼んでくれた」

「ああ……。『ミスター』って呼ぶの、おかしいです？」

「君にとっては普通なんだろうけど……。距離を置かれてるってことは感じる  
ね」

「そうですか」

水上は、しかし、それ以上はなにも言わなかった。他人行儀なのでミスターと  
は呼ぶなども、水上と呼んでも言わない。

ただ、いつものように、マンションのことでなにか不都合はないか、甲斐姓の  
搜索はもういいのかと、色々気遣って聞いてくれたが、沙龍の返答もいつもと同

じなのである。

『没問題』メイワンテイ——と、このチャイナ・ガールは言う。

もしくは『無問題了』モウマンタイラと。

それは、水上の下心つきの親切を謝絶する言葉だ。

男女の仲はとても簡単だ、と沙龍は思っている。セックスするかしないか、だ。そして、沙龍は水上とセックスする気はない。

しかし、木佐小次郎は違う。

少なくとも、沙龍にとっての木佐はそういう下半身的な思考の外に居るのだ。

それがなぜかは分からないが、木佐小次郎は家族に近い存在なのである。

(試練、か……)

沙龍は食事中、ずっと、保科俊に言われた言葉の意味を考えていた。



19 斬られても文句は言うなよ

翌日、沙龍と木佐は学校帰りに台東区の居合道場まで行くことになった。

どうしたわけか、ホームルームが終わった直後に、木佐が「いいからつべこべ言わずについてこい」と言い出して、ほぼ強引に駅まで連れて行かれて、ほぼ強引に地下鉄に乗ることになってしまった。

昨日のやりとりからすれば、沙龍が「いいからつべこべ言わずにつれていけ」と言い出してもおかしくはないのだが、なぜか立場が逆になっている。

「キサさん、今日は部活の日じゃなかったの？」

「だから行くんだよ」

「……？」

「直也なおやに邪魔されたくないからな」

不機嫌な顔でそう言われた。

直也というのは、木佐の師匠の息子で、一つ下の二年生で、木佐にべったりな

少年のことだ。

加えて言うなら華奢で可愛い顔をしているので、木佐と並ぶと沙龍よりもずっと絵になる。

「あの少年も華道部なの？」

聞けば、やはり一年前に廃部の危機にあつた華道部を救うために、直也少年が自主的に入部したのだとか。

初心者ながらイロハをきちんと覚えて、今では部長を勤めているというのだから、その根性はたいしたもんだ、と沙龍は思った。よっぽど尽くすタイプとみえる。

「でも、なんで……？ 私、そんな無理矢理会わせるとか言っていないよ？」

「……」

木佐は困ったように押し黙ったが、地下鉄を降りる頃に、

「借りっぱなしは嫌なんだ」

やっと一言だけそう言った。

つまり、この前の浅草寺での一幕を「借り」だと考えているのだろう。

(頑なだな……)

ため息をつきたくなった。

こんなに手こずる人間には初めて会った気がする。

それとも、今までが何でも思い通りにいきすぎたのだろうか。確かに、上海では我がままの通る場所に居たことは事実だが、それ以前の故郷で教わった五徳を忘れたつもりはない。

「ここだ」

木佐の通う道場は、浅草寺を通り抜けた先の、言問通りにあつた。

立派な木造の四脚門が見える。

看板には長い名前が六文字ほどずらずら並んでおり、最後に『居合道場』とあつた。

しかし、現代武術でいうところの「居合道」をそのまま教えているわけではない、と木佐は説明した。看板はあくまでも体裁を整えているだけのようだ。

それはそうだろう。この現代に、平安時代から続く太刀での殺人術を教えてください、と公言することはできない。

「お邪魔しまーす」

門をくぐる時、ひっそり言った。

木佐が、なにか言いたげに視線をよこすので、「なに？」とはっきり聞いてみた。

「帰る時、ここで振り返るなよ。殺されるからな」

少し意地悪そうに口角をあげて言う。

「……え？」

「訪問先から帰る時に、その家の門のところで振り返るってことは、腹に一物あり、とみなされるんだ。だから、家人に斬られても文句は言えないことになってる。まあ、武士の時代の問答無用のルールさ」

「あ、昔の話なのね」

しかし、一応、忘れないようにしよう、と思った。

木佐の目が、冗談を言っているそれではなかったからだ。

石畳の先に母屋らしき建物が見えてくる。道場はその手前にあっただが、ひとまず沙龍は母屋の方に連れていかれた。

師範というのは穏やかな初老の人物だった。

直也少年とは似ていない上に、父と息子ではなく、祖父と孫というような年齢差に見える。

「ほう、小次郎の友達か？」

和装の師範は第一声、少し驚いたように言った。

「違います」という木佐の端的な言葉と、「そうです」という沙龍の明るい声  
がまた重なった。

師範は「おやおや」という顔をしてみせ、二人にお茶とお菓子を振舞った。気  
さくな人物のようだ。

「小次郎が友達を連れてきたのは初めてだね」  
嬉しそうに目を細める。

「師匠、今の僕の言葉を聞いてなかったのですか。はっきり、違う、と……」

「まあまあ。それで？ 話というのは？」

畳の部屋で、床の間があつて、上座に師範が座っていて、木佐と沙龍はその対  
面に並んで座っている。

木佐の真似をして正座を試みたが、どう立ち居振舞えばいいのかはいまいち分かっていない。

しかし、分からなくなったら、夕方の再放送でよく見る、時代劇通りにすればいいだろう、と考えた。

「古武術のものだと思われる技のことで、彼女に聞きたいことがあるようです。少し義理があるので連れてきました」

木佐が一通り説明したあとにこちらを見るので、空気を読み、挨拶をした。

「初めまして、甲斐といいます。よろしくお願いします」

「甲斐。甲府の方かな」

「多分……、いえ……。実際のところは、分かりません」

いきなり甲府の地名が出てきたので、言葉に詰まった。

やはり、一部の日本人にとって甲斐というのは甲府を指すのだろうか。

「実は、伺いたい技のことと関係があるのですが、亡くなった父の家、というか、故郷を探しています。甲府でも虱潰しに探したんですが、結局、見つかりませんでした」

例のヒバリを気絶させるという技を持っていたのは父親のことなのか、と木佐は初めて知った。

しかも、亡くなっているという。

今までの沙龍の態度から、そういう暗い事情が出てくるとは思わなかった。

脳天気そうに見えて、とんでもないタヌキじゃないか、とも思う。

「私は両親の顔も出身地も知りません。母は私を産んですぐ亡くなり、父も、私が二歳になる前に病死したそうです。子供の頃は育ててくれた家がありましたので、特に実の両親のことを詮索する必要もなかったんですが、最近になって色々調べなければならぬ事情が出てきてまして……」

興信所ではないので、遺産がどうこうといった嘘をつく必要もなく、背景はぼかした。

「しかし、私が知っているのは甲斐弥太郎という名前だけで、十五年前に死んだ人を探すには情報がとても足りません」

「フム……」

師範は背筋を伸ばしたまま話を聞いている。

「一つだけ手がかりらしきものがあるとすれば、義理の姉から聞いた『飛んでい  
るヒバリを気絶させる』という技のことなんです。父は義姉の目の前でそれを  
やってのけたらしいです」

「ヒバリを？」

「はい。それで、古来の実践武道にそういった技を持つ流派がないか、詳しい人  
に聞きたいと思って、キサさんに相談したら、ここに連れてきてくれたんです」

「フム……。そういったものに、少し、心当たりがないわけではないが……」

「え!？」

早速の手ごたえに、沙龍は顔をあげた。

が、師範は難しい顔でまだ考えている様子だ。

「……」

「どんな小さなことでも構いません。それに、言いにくいことでも、聞く覚悟は  
ありますから言ってください」

「フム……。顔を知らないお父上の、望まない姿を知ることになっても、です  
か」



「はい」

キツパリと言った。

それ自体は、沙龍にとっては大したことはない。自分だって、あの世の両親に顔向けできないことばかりしてきた。それは開き直りではない。

人外の力を持ってこの世を生きるとはそういうことなのだ、と沙龍は思っているのだ。

師範は、沙龍の真っ直ぐな眼差しを受けて頷くと、

「可能性が二つ考えられますな」

そう言った。

「二つ？」

「さよう……」

師範は美しい所作で立ち上がると、背後の箆笥を開け、一振りの日本刀を取り出した。

が、その直後に思い直して、木佐に言う。

「小次郎、道場から刃引きの国光を持ってきてくれ」

「はい」

木佐が音もなく部屋を出て行くと、師範は座りなおして言った。

「一つは、外法げほうの技かもしれない、ということですよ」

「外法……？」

初めて聞く言葉だ。

「甲斐さんは歴史にはお詳しいのかな？」

「いえ、お恥ずかしながら、勉強中です」

ひとまずそう答えた。

最近では江戸時代のことや、日本独自の陰陽道のことを調べてはいるが、どこからが「詳しい」と言えるのか分からない。

「外法とは、本来は仏教以外の異教を指しますが、広く、魔道や妖術という意味で使われます。つまり、人の道を外れた技のことですよ」

なるほど、呪術みたいなものか、と沙龍は思った。

呪術の歴史は、中国は日本の比ではない。

夏王朝の昔から、人を占い、呪うことで王朝を交代してきた国だ。

「歴史の中には、権力者の影でそういった外法を使う集団が確かに存在していた。彼らは『草』と呼ばれる忍者であったり、『天狗』と呼ばれた者たちだったのでしょ」

「天狗？」

いくら外国人の沙龍とはいえ、それが架空の生き物であることは知っている。

「天狗というのは、神であり、妖怪である、不思議な存在です。民間には広く信じられてきたので、中には、その伝説を利用して山に隠れ住む者たちが居ただろう、ということですよ」

師範の話では、そういった天狗たち（偽物にしる本物にしる）もまた外法を使うという。

「動物の意識を奪って操る天狗の話は聞いたことがあります」

（外法か……）

確かに、甲斐家の者たちは人知れずどこかの山奥で暮らしていたのかもしれないし、その中で、忍者か天狗か、そういった者たちとの関わりもあったかもしれない。

「しかし、私が考えた通りなら、あなたのお父上は天狗の末裔ではないでしょう」

師範がにっこりと笑顔を見せて言った。

そこに、木佐が黒拵えの日本刀を持って戻ってくる。いったん正座し、型通りにその一振り師範に手渡す動作は仰々しいが、美しくもある。

「可能性の二つ目は、なに、簡単なことです。縁側へどうぞ——」

師範は障子を開け、縁側から庭に出た。

庭木がバランスよく配置されている空間だ。三十坪ほどはあるだろうか。

時代劇で見るような狭々しい庭ではなく、もう少し視界は開けていた。

「刃引きされているとはいえ、危ないですからね。それ以上は近寄らないように」

「はい」

何を始めるのかと思いきや、師範はリラックスした立ち姿で、左手をまっすぐ伸ばし、鞘のままの日本刀を地面と水平にした。

構えるというよりは、空気の中に「置く」という動作だ。

木佐も沙龍の隣に座っているが、彼にもなにが始まるのかは分かっていない。注意深く師範の動きを見ていた。

しばらくはなににも起こらなかつたが、数分後、師範の伸ばした腕の上に、二、三羽のスズメが舞い降りてきた。

(……!?)

普通、野生の鳥は人を警戒して、自ら近寄ってくることはない。

もしかして、これは飼慣らされたスズメなのだろうか。

そんなことを考えていたので、沙龍はあやうく師範の動きを見逃すところだった。が、かろうじて彼がなにをしたのかは分かった。

つまり彼は「何もしていない」のである。掲げた日本刀を抜いてもいない。なのに、結果、二羽のスズメは飛び立ち、一羽のスズメが砂利の上に落ちて、固まっている。

死んでいるようだが、その三秒後にはバタバタと羽を動かして、飛び去っていった。

「……」

一瞬の出来事だった。

沙龍は半分口を開けたまま呆然としていたが、

「剣気に当てられた……ってこと？」

ようやく、それを理解した。

師範はにこやかに振り向いて、

「そうです。私は剣士ですから、こうして刀を携えて、抜いたつもりで、斬ったつもりでやりましたが、あなたのお父上は、無手だったのではないのでしょうか」

「……それは、分かりませんが、ええと、そう、かもしれせん。しかし、なぜそう思うんですか？」

珍しく、沙龍がどもるような話し方になる。

「さあ、なんとなく——ですかね」

はぐらかされてしまった。

「つまり、お父上は今のと同じことをやったのだと思われせん。技というより、集中力を高める方法の一つでしょう。あまりお薦めしませんが……。スズメたちも無駄にびっくりさせられて気の毒ですからな」

「えっと、それじゃあ……」

「この逸話からどこかの流派を辿るのは難しいですね。ただ、無手の人たちは、色々な流派を経て無手にたどり着く場合が多いですから……」

師範が少し視線を泳がせた。

「神道無念流あたりにそういう練習方法がないわけではないんですが……。そういえば、さっき、『弥太郎』と仰いましたな？」

「シントウムネンリュウ？ え……、はい、弥太郎は父の名です」

「関係があるかどうかは分かりませんが、幕末の頃、神道無念流に斎藤弥九郎という者がおりましてね。北辰一刀流の千葉周作、鏡きょうしんめいち新明智流の桃井春蔵と並び称された天才です」

「神道無念流の……、斎藤弥九郎……？」

さすがに脳天気な沙龍でも「サイトウ？ はて、どこかで聞いた名だな」とは思わなかった。

この二ヶ月、沙龍や宇佐美がずっと調べている名前である。

この符合はなんだろう。

「……」

木佐は沙龍が押し黙った隙に、稽古の時間だと告げてさっさと退出してしまつた。

「……」

沙龍はそれに気付かない振りをしてまだ考えていた。

いったい、甲斐弥太郎というのは何者なのだろう。

八雲は、斎藤新助と同一人物だろうと言っているが、そうすると年が合わないのだ。

旧制第一高等学校に通っていた斎藤新助という人物は確かに存在していて、学徒出陣で大陸に渡り、日中戦争の最中に戦死しているはずである。たとえ生きていたとしても、内藤虎之助と同じくらいの年齢のはずだ。

なのに、斎藤新助は年を取らぬ若い姿で二十年前の京都に現れてもいるのだ。不可解である。

そして、神道無念流の斎藤弥九郎とは関係があるのかなのか――。名前の響きが似ているだけかもしれないのにか？



「……」

「ああいうのを天賦の才というのでしような」

師範が静かに言った言葉で、我に返った。

「……あ、キサさんのことですか？」

会話の流れからして、一瞬、斎藤弥九郎のことかと思ったのだが、師範の方はもうそちらの話は終わったつもりだったようだ。

「いやいや、これは師匠馬鹿でしたな」

照れたように笑う。

さきほどの凄まじい剣気を放った人物には見えない。

「道場を見学されますか？ 小次郎の才が分かりますよ」

「いえ……」

確かに、それは見てみたい気もするが、逆に、見なくとも全てが分かる気もした。

彼の激しくも冴えた気魄は、きつと、誰をも圧倒する。

地獄の底にあっても、決して腐った血肉に染まらぬ人だ。

その姿は、きつと北天を照らす星のように美しいのだろう。

「私は不浄の者ですから、神聖な場所には入れません」

「お若いのに年寄りのようなことを仰る。人間というものは、生きている限り、みな、不浄ですよ」

そうは言っても、自分に染み付いた血の匂いは消せはしない。

「あの、<sup>スーフウ</sup>師父……」

自分の師匠ではないが、沙龍はそう呼びかけた。

他に呼ぶべき言葉を知らないからだ。

「さきほど、刃を引いた刀を使った理由をお教え願えませんか」

「フム、あなたはなぜだと思いましたか？」

「恐らく……、十のものを倒すのに、百の力は要らないという理屈かと」

師範はゆっくり頷いた。

答えが分かっているながら聞くということは、もっと先のことが知りたいということだろう。師範にはそれが分かった。

十のものを倒すのに十の力を使うということは、一見、理にかなっている。

しかし、敢えて全力を出さなかった理由があるはずだ、と沙龍は考えたわけである。

「あの時、私が真剣を使っていたら、スズメたちは寄ってこなかったでしょう。これで、答えになりましたかな？」

「よく分かりました。自分が未熟でした。申し訳ありません」

沙龍は昨日見た時代劇で、若い剣士が師匠に謝っている姿を再現しながら言った。両手について頭を下げる。

「いやいや……、達人は真剣を携えたままでも気配は消せるのです。私もまた未熟なのですよ」

我<sup>が</sup>を消し、人としての気配を消し、完全に庭と同化しなければ野性動物の警戒心を解くことはできない。

しかし、強力な武器を持っていれば自ずと気は冴えてしまう。

だから、この師範は己の鋭い剣気を抑えるために、刃引きの刀を使ったのだ。

「色々ありがとうございます。私はこれで失礼します」

しばらく別の話をした後、頃合を見て退出した。

師範は、木佐と一緒に夕飯を食べていかないかと誘ってくれたが、断った。ここに居れば、直也少年もじきに帰ってくるだろう。あの我の強い少年に無駄に睨まれるのは遠慮したい。

外に出ると、ちようど夕暮れ時になっていた。五月も最終の週になって、陽もだいぶ伸びている。

「……」

木造の門のところまで来て、沙龍は半分わざと、道場の方を振り向いた。

その行動の理由を問われたら「キサさん、頑張ってるかなー」という無邪気な気持ちからだ、と説明するだろう。

しかし、本音ではもちろん違う。「鬼が出るか蛇が出るか」という気分でやったのである。

「……!?!」

その刹那、通りの方からフツと生ぬるい風圧を感じた。

肩に置かれた手を、外そうと動くが――、

「なんだ。マツキーか……」

振り向くと、知っている顔が驚いたように自分を見下ろしている。

「……って、なんでマツキーがここに居るのさ」

松木ゴローの涼しい顔をじつとりと睨みあげた。

「やつほー、馨君。いやー、昨日の夜にさ、木佐君に電話したら」

「いやいやいや、ちよつと待って？ なに？ もう、そういう仲なの？ なに気

軽に電話してんの？ 私でさえまだ自分からは電話したことないのに」

「そうじゃなくてー、ほら、この前、浅草寺での一件があった時、僕が彼を送っていったわけじゃない？ そのアフターケアっていうの？ その後、元気かなー

とか、こう、年上のお兄さんの、色々あるじゃない」

「なにが『色々あるじゃない』だよ……」

「いや、それよりもさ、馨君。なんか、今、君の肩に手を置いた時、すごい殺気を感じたんだけど……」

「今度、後ろから抱きつく時は声かけてからにしてね。あやうく殺すところだったよ」

「アハハ……。……。……。冗談だよね？」

「……それで？ 木佐君に電話したら？」

「ああ、うん。一緒にご飯でも食べようよって言ったら、馨君と三人ならいいですよって言うもんだから、じゃ、夕方、ここの道場まで来てってことになって――」

「ハア？」

松木としては、木佐と二人でデートしたかったのだろうが、体よく「二人きり」は回避されてしまったようだ。

しかし、木佐の腹がよく分からない。松木の誘いが鬱陶しければ断ればいいではないか。沙龍を巻き込む理由はなんなのだろう。

「ということで、今日は二人乗りのコルベットではなく、BMWで来ました。木佐君の稽古が終わるまで、そこからで花茶でもしようよ」

ニコニコしながら強引に連れ出された。

「……」

改めて松木ゴローの全身を見ると、今日もさらりとお金のかかったファッションである。

ベージュ色の綿のパンツに大きめのニットをうまく着こなし、胸元にはサンダラスを引っ掛けている。

素人がやると徹底的に嫌味だが、普段からブランドものに囲まれているとセンスもよくなるのだろうか。

「楽しいなー。高校生とデートなんて」

松木は、心底楽しそうに言うので憎めない。

こういう人間は負の感情をどうやって処理しているのだろうか、とたまに不思議に思う。

「すみませんね、東京一の美少年とデートのはずが、お相手がこんな貧相な女子高生で」

「えー、馨君だって充分可愛いよー？ 僕、木佐君に会わなかったら、馨君のほうを口説いてるよー？」

「なんだその正直すぎる物言いは」

それでも、よしとしよう。

事態は決して悪くはなっていない。

一人ぼっちで成田空港に降り立ってから三ヶ月。知り合いも徐々に増えてきて、東京も好きになりつつある。

あとは、好きになった人に、好きになってもらうだけなのだ。



三人の奇妙な関係はその後も続いた。

木佐と友達になりたい沙龍、相変わらず素っ気ない木佐、そんな木佐にちよっかいを出す松木——という関係である。

遊び人の松木ゴローは沙龍にも適当にちよっかいを出すのだが、不思議と嫌われることはなかった。距離の取り方を心得ているのだろう。

松木にとって沙龍は「素っ気無い木佐に泣かされる同志」であって、ライバルではない。松木自身が言っているように「馨君のことは別の次元で好き」なのだ。

その次元がどういったものかは分からないが、この頃の松木は旧友の一人に、「とつても可愛い高校生コンビに会った」と、何度もしつこく言っている。

彼にとつては、この二人との出会いが大きな意味を持っていたのだろう。

六月――。

衣替えをした初日、「馨君の夏服が見たかったから」という口実で学校までやって来た松木は、派手な外車と共に思いっきり目立っていた。

白いコルベットで校門前に乗り付けられては、帰宅部の生徒たちに注目されること必須である。

「木佐君の、の間違いじゃないの？」

「だって、男の子の夏服は上着脱いだけじゃなく」

「女子の夏服だって似たようなもんだけど……」

と、自分の格好を見る。

白いシャツにグレイのネクタイ、そして紺色のプリーツスカートというごく普通の制服だ。

「そう？ でも、可愛いよ」

ニコニコ顔で言われてしまった。

社交辞令やお世辞を並べられるのは慣れていたのでどうということはないが、校門前でずっと視線を浴び続けるのは具合が悪い。

「……で？ 夏服見たら帰るの？ それとも、電話ではすまない話でもしにきたの？」

近付いて、少し小声で言った。

その様子に「早くここから移動したい」というニュアンスをちゃんと汲み取ってくれる松木はやはり敏い人間なのである。

「うん、ちよつと耳寄りな話を、ね」

そう言つて、助手席側のドアを開けた。

どうぞという仕草と視線を受けて、沙龍はコルベットに乗り込む。

「キサさんは今日は部活だよ」

松木が運転席に座るのを待つて言つてやった。

「うん、知ってる」

「スケジュールまで把握してるのか。色事師はマメだね」

「どこでそうゆうー言葉を覚えるの、君は……」

「よく行く中華料理店があつてね、そこに自称『イロゴトシ』のお兄さんが来る。歌舞伎町で働いてるんだつてさ」

以前、狭いカウンターで手紙を書いている時に「なにを一生懸命書いてんの？」と軽く声を掛けられて以来、よく話すようになったホストのことである。

十代の女の子相手に、面白がってそう自称しているだけだ。

沙龍のことを留学生だと思っているの、教科書にない日常会話なんかを親切に色々と教えてくれる。

「仲いいの？ その人とは」

「まあ、自称の名前と自称の年齢を知ってる程度には」

「歌舞伎町で働いてる、自称『色事師』ね……。電話番号を聞いてくるようになったら気をつけてよ？」

「うん。大丈夫。全然タイプじゃないから」

「そう……。馨君のタイプってどういうの？」

「うーん。若い頃に色々無茶やりすぎて、それに懲りて、少し丸くなった感じの人かな。あ、あと、野生馬に鞍なしで乗れる人ね」

「いや、それ、都会には居ないでしょ……」

なにかの冗談か、小説の中の登場人物の話だろうか、と松木は思った。

とても女子高生の言葉ではない。三十代の人生に疲れた女性が半分自棄で言いそうな話だ。

甲州街道に出てから、松木が聞いてきた。

「さて、どこに行こうか？ どこか行きたいところはある？ 僕は、落ち着いて話せるところならどこでもいいんだけど」

「行きたいところ……？」

どこかあるだろうか、と自問した。

都内の観光は、四月の学校が始まる前に、ある程度、一人でしたのだ。

電車に乗って上野動物園も見に行ったり、歩いて新宿御苑にも行った。

それに、この前は浅草にも行ったし、東京タワーも見た。

わりとあちこち出かけてはいると思う。

「……」

馬の話をしたせいだろうか。

地球上で五指には入りそうな高層ビル群を見ながらも、まったく正反対の広い大地のイメージが浮かんだ。沙龍が育ったあの広大な黄色い大地である。

「地平線が見たいかな……」

思わず、そう言ってしまった。

今まで、そんなことを願ったことなどなかったはずなのに、なぜかいま口をついた。

何故だろう。自分でもよく分からない。

沙龍の呟きを聞いた松木は少し顔をしかめて黙考している。それに気付いて、「あ、うそうそ。どこでもいいよ？」

慌てて言ったのだが、松木の横顔はしばらく動かない。視線は前を見つめたまままだ。

そして、やっと視線をわずかに動かしたと思ったら、車内の時計を見たようだ。

「三時十五分か……。なんとか日没まで間に合うかな」

「え……?」

「間に合わなかったらごめんね。とりあえず行ってみよう」

「え? どこに?」

「だから、『地平線の見える場所』」

「……」

つまり、東京から一番近い、地平線が見える場所はどこだろう、と考えていたということだろうか。

そして、迷わずハンドルを切ったということは答えも出たということだろう。

(いいんだろうか……？ 思いつきで言っただけなのに)

沙龍はそう思ったが、松木が楽しそうなのでいいことにした。もっとも彼はいつも楽しそうではあるのだが。

目的地には高速を使って一時間半ほどで着いた。

月曜日の日中、しかも下り道路ということであいていたのだ。

「ここは……？」

コルベツトを降りると、さつきまで高層ビルの中に居たのが信じられないような風景が広がっていた。

畑、畑、畑、そして、海――。

視界の東側は全て海だった。

「九十九里というところだよ。日本は狭いからさ。三百六十度地平線ってのは東京近郊じゃ多分ないと思うんだよね。一部、水平線になっちゃうけど、それは勘弁してね」

夕暮れがかってきた空の中で、松木が柔らかく笑っていた。

この人は全てにおいて余裕のある人なのだ、と沙龍は思う。

軽いところを除けば、知性も、物腰も、センスも、一級品だ。

松木が本気で木佐を口説いたらやばいかもしれない、とチラツと思った。

友情の成立には時間がかかるが、恋愛の成就是わりとすんなりいってしまおうのではないか——？

いくら恋と友情は別物とはいえ、現実の時間というものは限られているのであつて、自分がまだ仲良くなっていないのに、ただでさえ色々忙しい木佐の私的な時間を松木に奪われるのはやはり避けたいのである。

(いや、その前にキサさんは私やマツキーのこと、どう思ってるのかなー……)  
木佐がどういうタイプが好きなのかはまったく分からない。

今までの言動を見ると、やはり物静かな人が好きなのではないかとも思



う。

自分のような唯我独尊の大飯食らいはもしかして一番嫌いなタイプかもしれない。  
い。

(だとすると……ちよつと……滅入るかな……)

あまり考えないようになってきたが、思い出すのは木佐の冷たい無表情ばかりである。

「海岸に降りてみる？」

松木が道路脇の階段を指して言った。

「うん。実はこういう砂浜見るの、初めてなんだ」

「え、そうなの？」

「うん。育ったところは内陸だったし、東京に来る前に居たところは港しかなかったし」

上海の海は、東京湾と変わりはない。

いわゆる都会の海だ。そこで泳ぐ者など居ない。

「〃九十九里〃っていうのは、どういう意味なの？」

「里<sup>り</sup>っていうのは、昔の距離の単位で、それだけ長い浜<sup>ま</sup>っていうことだね。一里が三・九キロだったかな。だから、九十九里はだいたい三百九十キロ弱<sup>よ</sup>ってことになるけど……、実際にはそんなにないはずだよ」

「ああ、白髪三千丈と一緒にね。大袈裟に言<sup>い</sup>っちゃうやつね。でも、日本では珍しいよね？」

「そう？」

「大したことないですーって言<sup>い</sup>って、実はすごかったりするの<sup>が</sup>パターンだも<sup>ん</sup>」

そんな話をしながらゆ<sup>つ</sup>くり歩<sup>い</sup>た。

サーファーらしき姿<sup>が</sup>海上にある。あとは、散歩<sup>に</sup>来<sup>て</sup>いる人と犬、母親と幼児<sup>が</sup>ち<sup>ら</sup>ほ<sup>ら</sup>見<sup>え</sup>るだけだ。

平日<sup>の</sup>夕方<sup>に</sup>近<sup>く</sup>な<sup>る</sup>ので閑散<sup>と</sup>し<sup>て</sup>い<sup>る</sup>。

夏<sup>休</sup>みに<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>ば、こ<sup>こ</sup>も賑<sup>わ</sup>う<sup>の</sup>だ<sup>ら</sup>う。

「ああ、飛龍<sup>が</sup>居<sup>た</sup>ら<sup>な</sup>あ——」

茜<sup>色</sup>の空<sup>を</sup>仰<sup>い</sup>で沙龍<sup>が</sup>言<sup>っ</sup>た。

本当に、それが残念でならない。

こんな地平線、水平線の景色の中で、思いっきり駆けることができないなんて。

「ヒリュウ？」

「うん、私の馬。すごい速いんだ」

「馬……、ね。乗馬のご趣味がおありですか。やっぱ、馨君、お嬢様なんだね」  
「ふふっ」

馬とくればそういう発想しかないのだろう。

都会育ちのボンボンに、荒野で暴れ馬に乗っている沙龍の姿が想像できるわけではない。

故郷の村に居た時は、周辺の見廻りは沙龍の仕事だった。飛龍に乗って、地平線の向こうまで駆けていくと、誰もついてくることはできなかった。黄色い大地の上で風になれる瞬間だ。

脚力といい、持久力といい、あれは本当にすばらしい馬だったと思う。

沙龍以外には決して懐かず、かろうじて偃月にだけはブラッシングのついでに

撫でさせることもあったが、他の場面では触られることを極力嫌った。そんな偏屈な性格も、沙龍にとつては可愛く思えた。

「そうそう。すっかり忘れてたけど、話があつたんだよ」

松木がそう言い出したのは、そろそろ戻ろうか、という頃合だった。

本当に忘れていたようだ。

「うん、どんな話？」

陽はだいぶ落ちている。

サーフィンをやっていた若者も引き上げてきた。家路に着く時間のようだ。

「まず直也君のことなんだけど。僕が最近、木佐君にちよっかい出すもんだからさ、あの少年の不興を買っちゃって」

「そらそうだろうな……」

「この間も『金輪際、木佐さんに近付かないで下さい！』なんて言われちゃった。いやー、若いっていいね」

「若いというか、幼い、の間違いじゃ？」

「ハハ……、馨君は手厳しいな。うん、でも、僕もそれを大人しく聞き入れるつ

もりは全然ないってどうか、そういう無理を通しちや、道理が引つ込むというもののなので、ああいう子に世間の厳しさを教えるのも大人の務めかなーって思ったわけですよ」

「フム、どうやって教育的指導を？」

「彼のあの異常なまでの独占欲は、心の病なんだよ」

と、やけにキツパリと言い切る。

実際のところ、岡田直也について言えば、ゲイでもバイでもない、松木は言う。幼少期の思い出のせいで、木佐に固執しているだけなのである。

「それを少年から直接聞いたの？」

沙龍は少し驚いたように言った。

あの「僕の木佐さんに何か用ですか？」と笑顔で人に噛み付かんばかりの少年に？

しかし、松木はこともなげに言う。

「僕ねえ、人の身の上話を引き出すの、得意なんだ。ほら、イチオー、占い師だし。ワールド・リーディングも勉強したから」

「ああ、そういえば、すっかり忘れてたけど、占い師だったね」

「ヒ、ヒドイわ、馨君ったら」

「だって仕事してる姿、見たことないもん」

松木が聞き出した話では、直也少年は後妻の連れ子で、あの師範とは血はつながっていないそう。そのことが原因で、京都では手ひどくいじめられたという。それをいつも庇ってくれたのが木佐小次郎だったのである。

「元来、思い込みが激しいので、木佐君への思慕をなにか運命的なものだと勘違いしてるみたいだね。まあ、そもそも恋愛なんてみんな思い込みなんだけど」

「それを言っちゃーおしめーよって気もするけど……。で？ そのビョーキは治る見込みはあるの？」

「まあ、あるといえはあるし、ないといえはないかな……」

「なにそれ、ハッキリしないなあ」

「だから、努力はしてみます、という宣言みたいなものですよ」

「フーン？」

「……で、その件はどっちかかっていうとついでで、ここからが本題なんだけど」

まわりついでしてきた中型の雑種犬を撫でながら松木が声のトーンを少し落とすた。

その犬は、さつきから飼い主と松木の間を全力で駆けながらはしゃいでいる。沙龍には近付こうとしない。犬は嫌いではないのに、なぜか寄り付かれることはないのだ。

その理由は、沙龍には分からないのだが、松木には分かっていた。

(これは、恐れ、だ)

犬は社会的な動物なので、純粋な力関係の中で生きている。

だから、自分より強いものに近付くことはない。

もし向こうから近付いてきたらお腹を見せて即降参するだけである。

「初めて会った時に、東京は誰のものかって聞いたよね？ あの質問の意味を、僕なりにずっと考えていたんだ」

「うん……」

「馨君はなんでそんなことを聞いたんだろう。なぜそれが気になるんだろう。東京という街に認められたいから？ それとも、なにか、認めてもらわないと困る

事態になるから？」

「ああ、そう……かもしれない」

本人はいまそれに気付いた、というような顔をしている。

実際、無意識だったのだろう。

沙龍の「新しい場所に来たらそこの主あるじに挨拶をしなければ」という言い分は、五徳の『仁』や『礼』ではなく、単にトラブル回避のための処世術の一つなのである。

新しい店に入った時に非常口を確認するのと同じだ。

「ん、それを聞いて安心した。実はね、馨君。僕は君が何者なのかなんとなく分かっているとと思う」

「え……？」

「別に調べたわけじゃないよ？ 僕の血がそう言ってる。なにか大変なものが東京に紛れこんでしまった、とね。これでも陰陽師のはしくれだから」

「陰陽師——」

それが占い師でも遊び人でもない、松木ゴローの正体である。沙龍は、渋谷の



氷川神社で結界に捕らわれた時のことを思い出した。

あの時、強力な呪詛に近い檻を、いとも簡単に突破したのは、松木ゴローの力である。

しかし、スサノオノミコトという日本古来の神の力をやすやすと超える力とは——？

「はしくれ」どころではない。

それこそ、とんでもない謙遜だ。日本人の大好きな、あの謙遜の美学。

「君の言う『東京の所有者』はね、確かに数百年間ずっと徳川家だったはずなんだけど、明治政府が出来たことによって土地神との契約が切れてしまったから、それ以降はかなり混沌としてるんだ」

「……」

「馨君の定義で言えば『街を壊せる人』は、それこそ数年ごとに交代してるよ。空白の時期もあると思うしね。そして、僕がこの前言ったように、今の『所有者』は多分、それを自覚していない」

「……」

陽が完全に落ちて、松木の表情が見えにくくなった。

まわりついていた犬も、いつしか飼い主に呼ばれて、家に帰ったようだ。

「あの、さ。マツキー。この前もうっすら思ったけど、マツキーは今の『所有者』が誰なのか、知ってるの？」

「多分、知ってると思う。いや、正確に言うと、わりと最近、会った人が『そう』だと気付いた」

「キサさん？」

「うん」

驚きはない。

やはりそうなのだ、という感嘆に近い思いがあるだけだ。

桜の咲く春の日に木佐小次郎に会って、ずっとそう思い続けてきたことを再確認した。

「そっか……」

沙龍は暗くなってきた海の果てを見ていた。

この先はアメリカだ。

未知の世界、未知の国。

そこに行こうとは思わない。

くるり、と回って、今度は西の地平線を見た。

帰るべき方向はこちらだ。

「キサさんがさ、一見、ごく普通の美少年が、なんでそんな力を持ちえたのか、ってことについてはどう思ってる？」

「それは君も同じだろうけど……。そうだね、彼には北天の加護を感じるよ。強い水の力だ。多分、家系だと思う」

沙龍は深く息をついた。

「そこまで分かってるのか。すごいね、マッキー」

「それほどでもないよ」

薄暗がり、松木がにこやかに微笑んだ。

そろそろ本当に帰ろう、と彼は車の方に歩き出す。

道路脇に停めてある白いコルベットが二人を待っていた。

「そう——。私はあの人を探しに来たんだ」

独り言のように呟く。

助手席に座って、シートベルトをして、松木がホロを降ろしたり、エアコンをセツトする間、沙龍は窓の外を見ていた。

「でも、手ごわいよ。私、キサさんには嫌われてるのかもしれない——」  
これも独り言のつもりである。

しかし、松木はちゃんと聞いていた。

「木佐君はね、馨君のこと、嫌ってないよ。むしろ、大好きだと思うよ」

「まさか……」

「ただ……、自分の中でそれを認めてしまうのが、怖いんじゃないかな」

「怖い？　なぜ？」

「君は、大切なものを失ったことはない？　その喪失感が大きければ大きいほど、もう大切なものなんか要らないって、人は思うんだよ」

松木の言っていることは、分からなくはない。が、沙龍は恐らくまだそういった喪失感を本当の意味で味わったことがないのだろう。

故郷の村を失った時に感じたのは、喪失感ではなく、怒りだった。沙龍は絶望

することなく、その怒りを糧に蒼龍会でのし上がったのだ。

悲しみに暮れて打ちひしがれるという感覚は、よく分らない。

「君たちを見ていると、少しもどかしいね」

そう言って微笑む松木が、とても頼もしく見えた。

これでも十歳近く年上なのだから、彼の言葉なら信じようではないか。

この安心感は、水上にはないものだ。

高速道路は順調だったが、レストランで三食分ほど飲み食いしたので、帰りはだいぶ遅くなってしまった。

「今日はありがとう」

「いや、連れ出したのは僕のほうだし、こちらこそ付き合ってくれてありがとう。またドライブとか食事とか行こうね」

「キサさんを本気で口説かないって約束してくれるなら、いいよ」

「言うねえ。未成年に手を出す気はないけどね」

「ふーん？ でも、あわよくばって思ってるでしょ？」

「うん、少しね」

「んもー……」

マンションの前でそんな話をしてしていると、どこからか視線を感じた。

松木もそれに気付いたようだが、沙龍の様子に合わせてくれた。

「じゃ、またね」

「うん、おやすみ、馨君」

「……」

ヤクモやウサミミのはずはない。

もしかしたら、『タツヒコ叔父さん』かもしれぬ。

面倒なことにならないければいいが、と沙龍は思った。

松木ゴローの言っていたことは案外当たっているのかもしれない、と沙龍が思ったのは、そういうえば最近木佐が「放っておいてくれ」と言わなくなった、と気付いたからである。

言っても無駄だと悟ったせいだろうが、それでもまとわりつかれて嫌なら無視するとか、本気でやめさせようとするはずだという、沙龍の楽観によって、木佐へのアプローチは続けられた。

窓際の席で、沙龍が木佐に話しかける姿は既に3―Bの日常風景になっていた。二人は特に険悪な様子でもないし、専門的な会話をしているわけでもない。

他愛ない話だ。

「キサさん、宿題やってきたー？」

「なぜそういう質問が出てくるのか理解に苦しむな」

「ところで、なんで私、目が覚めたらレゲエダンサーみたいな髪型になってんの……?」

「君の髪は暇つぶしに丁度いいんだよ」

「ねえ、早弁しようよ。お腹すいた」

「あと一時間くらい我慢しろ」

それらの雑談には、たまに小川タマミや須藤が参加する。

テストの話、部活の話、校内で起きたささいな事件の話――。

ごく普通の高校生たちの時間である。

「あ、そういうえば甲斐さん、新宿中央公園の近くに住んでるんだよね？」

タマちゃんが急にそんな話を振った。

「うん？」

「昨日、テレビでやってたんだけど、公園の中にさ、神社があるでしょう？ 熊

野神社」

「あー、あったかな……?」

いつもあの公園には深夜に行くので、園内の詳細はあまり知らない。なにせ広



い敷地なので、どこになにがあるのか把握していないのだ。

ただ、案内板に神社マークがあったのは覚えている。

「あそこ、ご利益のある神社として、今、ひそかに東京のパワースポットになってるんだってよ？」

「へー、どういうご利益なの？」

タマちゃんの話によれば、第二次世界大戦の時の東京大空襲で、浄水場が攻撃されたのだが、劇薬の管理された場所だけ奇跡的に無事だったという。

もし、その場所に爆撃を受けていけば、二次被害により死者は倍になっていたのではないかと言われているのだが、浄水場の隣に熊野神社があったために、この神社が被害を抑えてくれたのではないかと囁かれたことが始まりだったようだ。

「淀橋浄水場のことか」

「キサさん、知ってるの？」

「戦後、だいぶ経ってからその淀橋浄水場を潰して、あのあたり一帯に高層ビル群を建てたんだよ。淀橋ってのは当時あった橋の名前で、ヨドバシカメラの由来

にもなってる」

「へえー……」

沙龍は素直に尊敬の眼差しを向けた。

木佐に聞けば、大抵、答えが返ってくる。

つくづく、こういうブレーンが欲しいものである。

「いったい、どうやったらその博識が作られるんだ？」

須藤も感心したように聞いていた。

「大したことじゃない。一年の時に配られた創立記念日の冊子に、郷土史の話が載っていたのを覚えていただけだ」

「そんなの、みんなちゃんと読んでないよー」

読んだとしても忘れるよー、と苦笑するのは小川タマミである。

「……」

沙龍は、なにかが引つかかったように感じた。

なにがどこに引つかかったというのだろう。

しばらく眉間に皺を寄せたまま、思いを巡らせてみると、それが浄水場という

キーワードだと気付いた。

「熊野神社って、水に関係あるの……？」

だから、そう聞いたのだ。

「水……？ 特にそういうエピソードはなかったと思うが。あそこが祀っているのはスサノオノミコトだ」

博識の木佐が答えてくれる。

「スサノオ……」

どこかで聞いた名前だ。

そう。あの渋谷の氷川神社と同じ祭神――。

「なにか、気になることでもあるのか？」

「うん、まあ、ちよつと……」

木佐に聞かれても、言葉を濁す。

そのまま沙龍はいつもと変わらぬ一日を過ごしていたが、放課後、みなが部活に散った後、図書館で少し調べものをした。

今日は雨のせいで陸上部はお休みになったと、タマちゃんが資料を探すのを手

伝ってくれた。

難しい漢字の日本語読みがまだ分かっていない沙龍は、こういうネイティブのアシスタントがいると非常に助かる。

「付き合ってくれてありがとう。でも、部活が休みの時くらい、早く帰ったほうがよかったんじゃない？」

「私、鍵っ子だからさ、早く帰ってもしょうがないんだよね」

「鍵っ子？」

初めて聞く言葉だった。

そろそろ死語だけどね、とタマちゃんが笑いながら説明してくれた。

片親だったり、両親が共稼ぎだったりして、学校から帰っても家に誰もおらず、自ら家の鍵を管理している子供たちのことを指すという。

「うちは、小さい頃に両親が離婚して、お母さんが働きながら私を育ててくれたんだけど、昔っから忙しいお母さんでさ。小さい会社の社長をやってるんだけど、なんかもう、仕事が生きて感じて感じよ。毎日、帰ってくるのも遅いし」

「へー」

「まあ、おかげで私は小学生の頃から料理のできる、しっかり者になっちゃったんだけどね」

「そっかー。エライねー」

サラリ、と沙龍は受け流す。

その反応が、やはり他の同年代の子とどこか違うのを、タマちゃんは肌で感じるのだ。

「……それで？ 甲斐さんはなんで日本神話のことなんか調べてんの？」

二人の周囲に積みあがっているのは、神話に関する真面目な学術書から、読み物風の歴史書まで様々である。

「いやー、なんか面白そうじゃん？ 今、ちよつと神秘的なものに凝っててさ。

そのうち小説でも書こうか、と」

そんな風に軽く誤魔化すのも、上海時代に覚えたスキルだ。

「え！ 甲斐さんってそういうの書く人なの!? ごめん、こう言っちゃなんだけど、すごい意外〜！」

「ハハ……」

書かないもんな、と心の中で言っておくだけだ。

積み重ねた本に全部目を通すのは無理だったので、目ぼしい箇所はコピーして持って帰ることにした。

沙龍が調べたかったのは、勿論、スサノオノミコトという神のことなのだが、付随する神話がいくつもあるのです、資料を選別するのにも時間がかかった。

「今日はこれくらいでいいよ。そろそろ部活も終わる時間だから、帰ろう」  
作業がひと段落ついたので、そう言った。

図書館を出て、文化部の棟の近くを通ったところで、ちょうど、木佐と岡田直也に出くわす。

華道部もついさきほど解散したようだ。

「あれ？ 木佐君、今帰りー？」

小川タマミの無邪気な強引さで、そのまま、なんとなく四人で一緒に駅まで向かうことになった。

が、沙龍はコピーをばらばらとめくりながら歩いていて、あまり会話に参加していない。

今は雨はやんでいたが、湿気を含んだ空気が周囲をもやっていた。

「梅雨に入ると、陸上部はつらいんだー。バスケ部やバレー部に断って体育館のはしっこを借りるのも気が引けるしね」

「そうか、雨で休みなのか」

「そうそう。それで、今日は甲斐さんと図書館に居たの」

「図書館……？」

「……」

岡田直也がおとなしいのが少し気になった。

この前会った時とイメージが違う。攻撃的な気配がすっかり消えているのだ。

(まさかね……?)

松木ゴローがなにかしたのだろうか、と思ったが、いくらなんでも早すぎる。

彼が「なんとかかしてみろ」と言っていたのは、先週の話だ。

ロータリーの手前、地下鉄の入り口で小川タマミとは別れた。木佐も地下鉄で通っているのだが、なぜか地上ルートを行くらしい。直也少年も黙って木佐の隣を歩いている。

東口まで来ると、また雨が降り出した。梅雨という季節はずっとこんな感じなのだという。

しばらくは降ったり止んだりの毎日が続く。

「じゃ、僕はここで」

直也少年が木佐に言って、驚くことに沙龍にも会釈してから、JRの改札に消えた。

「……？」

一緒に行かないの？ という視線を受けて、木佐はしばらく佇んでいた。

そして、雨の具合を確かめるように手のひらを宙に差し出す。

粒の大きな、夏の雨だ。

「キサさん？」

「……熊野神社、行くんだらう？」

「え？」

確かに行ってみるつもりだったが、木佐はエスパ―かなにかなのだらうか。

「一緒に行くよ」



「えつと……、なんで？」

「社会見学」

真面目に言っているのか、判別がつかない。

が、これはもしかしたら、ものすごい進歩ではないかと思えて嬉しかった。

本当は、深夜のジョギングの時についで見に行こう、くらいの気持ちだったのだが、木佐と一緒に行ってくれるというなら、行かない手はない。

新宿のような駅では、地下道がかなり整備されているので、大抵、雨に濡れずに目的地まで行くことができるのだが、木佐も沙龍も地上を歩くことにした。

特に口に出して言ったわけではないのだが、二人の気分がシンクロしたのだろう。多少雨に濡れても外を歩きたい気分、である。

「直也くん、なんか感じ変わったね？」

しばらく歩いてから、沙龍がビニール傘の下から言った。

今朝、通学中にコンビニで買った傘だ。

「……」

対して、木佐はしっかりした拵えの紺色の傘を差している。その傘に隠れて表

情が見えない。

これまたしばらくしてから、

「そうだな」

と、木佐がぼつりと言った。そして、

「実際、少し助かってる」

そんな言葉も漏らした。

木佐も、あの少年を持って余していた部分もあるのだろう。

公園の入り口が見えてくる。さすがにこんな雨の日には寛いでいる人もおら

ず、沙龍がいつも休憩するベンチも雨に濡れそぼっていた。

「神社はこっちじゃないかな、確か」

園内の道を進んでいくと、すぐに見つかった。

雨の音の中に、こじんまりとした本殿がある。

鳥居をくぐって、境内を見渡した。

「杞憂かもしれないけど……、気をつけてね」

「なんの話だ？」

「んー、現れるかどうか分からないけど、以前、似たようなシチュエーションで……」

沙龍がそう言った時、喬木の上の方でバササツという数羽の鳥が羽ばたく音がした。慌てて飛び立った、というような騒がしさだ。

「……」

なにかが仕掛けてくる気配は確実にある。

野生動物たちはそれを敏感に感じ取って逃げたのだ。

しかし、今日は隣に木佐が居るのだから、それほど警戒する必要もないだろうと思った。

「とりあえずここの神様に『挨拶』しようよ、キサさん」

「挨拶、ね……」

沙龍は正式な作法を知らなかったもので、木佐の真似をしてやってみた。

「神社での挨拶は『二礼二拍一礼』ってのが基本なんだけど、出雲や熊野は別格だから四拍、伊勢はもっと別格で八拍といわれてる」

「へえ……」

どこでこういう雑学を仕入れるのだろうか、確かに思う。

境内は鬱蒼と生い茂る木々のおかげで、傘なしでも雨に濡れることはなかった。  
し。

この『鎮守の森』は育ちすぎているのか、空がほとんど見えない。

「ここに祀られているのがスサノオって言う神だって言ってたよね」

沙龍はカバンの中からコピー用紙の束を取り出して、もう一度目を通していった。

須佐之男命、素戔男尊、須佐能乎命、くしみけぬのみこと櫛御気野命（※スサノオの別名）……、

色々な表記があるが、指す人物は同じである。

「でも、そもそも熊野の本宮大社の祭神は熊野権現なわけでしょ？ これはスサノオとは別神だよね」

「それを図書館で調べてたのか？」

「うん」

「……」

「昭和の東京大空襲から浄水場を守ったとされる、熊野神社。でも、もともと熊

野権現は山神<sup>やまがみ</sup>で、水神<sup>みづがみ</sup>ではないよね。そして、スサノオにも、調べた限りでは水のエピソードはなかった」

「……」

「じゃあ、浄水場を守った水神様<sup>みづがみさま</sup>は、誰なんだろう」

水の神。

みづかみ。

水上——。

あの、印象の薄いサラリーマンの顔が思い出された。しかし、彼は一般人である。神や妖異とはまるで無関係のはずだ。

「……」

急に、雨足が強くなってきた。天を覆う木々をすり抜けて、大きな雨粒が沙龍の上に降り注ぐ。

コピー用紙で両手がふさがっていた沙龍は傘を差すタイミングが遅れ、もう濡れてもいいやと思ったので動かなかった。すると、木佐が傘をさして、沙龍の上に傾けてくれた。その自然の動作が優しい。

「なぜ、それが気になる？」

「私、亡くなった父とは別に、探してる人が居るんだ。で、その人は多分、水と関係ある人なの」

「……」

その時、雷鳴が響いた。

それが、始まりの合図だったのだろう。

「うーん、ちゃんと挨拶もして、キサさんと一緒でも『異邦人』は排除されるのか」

「なにを、言って……？」

しかし、木佐は自ら言葉を切って、咄嗟に衝撃に対抗する手段に出た。

自分の傘は手放し、沙龍の持っている閉じた傘を奪うと、それで充分に防げないのを承知で、半分は受け流すつもりで眼前に掲げた。

明らかに人ではないなにかが、白刃で斬りつけてきた。しかも、一人ではない。

雷鳴の化身だといわれれば納得してしまうような、スピードと威力と神威を

持った、人のようで人でないもの――。

それらが、明確に沙龍を襲ってきたのだ。狙いは木佐ではない。

「……………」

木佐が横に流した剣筋は、背後の木の幹を切り裂いていた。

恐るべき威力である。

狂ったように雷鳴が猛る。そのうるささで、全ての感覚が麻痺しそうだった。

(何者だ……………!?)

それを考えるよりも先に体が動く。

手水舎まで数歩走り、折れかかったビニール傘を水の中に沈めた。

敵の狙いは沙龍なので、その数秒は邪魔されずに済んだ。その間、沙龍はとい

うと、拝殿を背にできる場所まで後退し、無駄のない動きで白刃の攻撃をかわしていた。

人間相手ならすぐに終わる戦闘も、相手が妖魔の類では急所も倒し方も分からない。

敵の姿をはっきり視認することもできないのだ。

白っぽい姿をしていることと、刀のような武器を持っているのは分かるが、それだけである。

雨の中、しかも、鬱蒼とした木々のせいで視界も悪い。

「伏せろ！」

「……！」

木佐の一突きで、沙龍に迫っていた謎の物体が四散した。

沙龍は、ビニール傘の先端の金属部分を見た気がしたが、その直後には、木佐はその傘も投げ捨てて、もう一体の白いものを排除していた。どうやったのかは分からない。

制服のスカートのポケットでなにかが動いている。

それが携帯電話の振動だと気付くと、賽銭箱を破壊する力の攻撃をかわしながらも、取り出して通話ボタンを押すことはできた。

それくらいの余裕はあった、ということだ。

『もしもしー？』

松木ゴローの声だ。



先日といい今日といい、いいタイミングである。

「いま、取り込み中！」

『え？ なんだって？』

「だから！ 絶賛、よく分からない化け物に襲われ中！ どうやって倒していいかわかんないよ！ マツキー、これ、どうすりゃいいの!?!」

『んー？ じゃあ、逃げれば？』

「……！」

そうか、と沙龍は閃いた。

「キサさん、こつち！」

まっすぐに駆けて鳥居を一步出た途端、激しく鳴っていた雷もパタリとやんだ。

息を鎮めながら、改めて鳥居の外から境内を見た。

さつき鳥居に入る前に見た風景と、何も変わっていない。雨の音と、静かな拝殿と、壊れていない賽銭箱があるだけだ。

木佐も、狐につままれたような顔をしている。

「なんだ……？　今のは、幻覚……？」

いや、そんなはずはない。

傘で異形のことを貫いた感覚はある。

「わかんない。でも、鳥居の外は大丈夫だと思う。多分、あれは神の眷族だから……」

「……」

沙龍の髪が、雨に濡れてだいぶ重くなっていた。

淡い色が水を含んで黄土色になっている。

「とりあえず、傘を買おう」

何事もなかったかのように振舞う木佐が頼もしい。

沙龍はそこで、手にした携帯電話がまだつながっていることに気付いた。

「もしもし？　マツキー？」

『あ、馨君、大丈夫だった？』

「うん、ありがとう。助かったよ」

『なにもしてないけどね。木佐君と一緒になの？』

「うん」

『じゃあ大丈夫だね』

「うん」

そこで、電話を切った。

彼には岡田直也のことで聞きたいこともあったのだが、それはまた今度にしよう。

コンビニで傘を買って、駅の方に戻ると、既に帰りのラッシュが始まっていた。

少し時間を潰してから帰ると木佐が言うので、じゃあどうせなら一緒に夕飯を食べようということになった。

沙龍は迷わず、歌舞伎町の一角の、あの中華料理店に木佐を連れていくことにした。

おかみさんが嬉しそうに第一声、

「あらー、学校のお友達？」

と言うので、

「うん」

思いつきりよく頷いた後に、だんまりの木佐を見上げると「なんで見るんだ？」という顔をされた。

沙龍は、こういう時、いつも全力で否定していた木佐が今日は否定しないことに少し驚いていたのだ。

今日は二人なのでカウンターではなく、テーブル席にしてみよう。

何人かの顔見知りが入ってきては出て行った。

「ここはねー担担麺が美味しいんだよー。激辛でねー、ハフハフ言いながら食べるの」

「そうか。じゃあ、僕もそれにしよう」

さつき、熊野神社で異形のものに襲われたことは、夕飯時の賑やかな中華料理店で話すようなことでもなく、なんとなく示し合わせたようにまったく別の話をした。

「それでねそれでね、須藤キャプテンは絶対、渡部さんのことが好きなんだと思うのね。だから、本音では私に演劇部に入って欲しかったみたいなんだよね」

「ああ、それでか……」

木佐は、例の賭けで何故か須藤が「江戸川渡が甲斐馨を捕まえる方」に賭けているのを不思議に思っていたのだ。

事情を知らない者たちがこぞって「絶賛暴走中の江戸川に勝てる者ナシ」として、「江戸川渡が甲斐馨を捕まえる方」に賭けているのは、木佐にとっては有り難いのだが、事情を知っている須藤はてつきり木佐と同じ方に賭けると思っていたのだ。

「まあ、そのほうが都合がいいけどな」

賭けの期間は一学期いっぱいである。

つまり、あと一ヶ月ちよつと、沙龍が逃げ切れればいいのだ。

木佐の一人勝ちはほぼ確定したようなものである。

「え？ なんの話？」

沙龍には、勿論、賭けの話は内緒だ。

「いや、こっちの話だ」

「で、どうどう？ 美味しいでしょ？」

「確かに辛くて美味しい。……けど、なんか、嬉しそうだな？」

「だって、嬉しいもん」

「……なぜ？」

「人と一緒にご飯食べるのって楽しいし、それがキサさんなら、なおさら嬉しい」

子供がお菓子をもらった時のような笑顔を見せて言う。

木佐は、さすがに、言葉に詰まった。

その表情は沙龍が見たことのないものだ。

照れているのではなく、どちらかというと、心配しているような顔だった。

「な、なに？」

「君は、誰にでもそういうことを言うのか」

「いや、そこまで節操なしじゃないよ。ちゃんと人は選んで……」

「そうじゃない。普通、そういうことを言われれば、男はこぞって誤解する。そ

こらへんはちゃんとわきまえているのかって言ってるんだ」

「ああ……、えっと、こらへんは、多分、大丈夫……だと」

「多分？ 多分という言葉はよく使うけど、そんな断言できないあやふやな状態で、よく無事に生きてこられたな？ 君の周囲はシンパしか居なかったのか？」

「……」

なぜ怒られなきやいけないんだろう、と沙龍は思っているのだが、木佐は怒っているつもりはない。

追加で頼んだ水餃子を食べる頃になってやっと、木佐のこれは心配してくれているのだと気付いた。

「私、そんなに『多分』って使ってる？」

「使ってる」

「別に、自信がないから使ってるわけじゃないんだよね。えーと、多分……、あ、ホントだ。……フフ」

自分では気付かなかったが、テレビによく出るタレントの言い回しを真似て

使っていたのが、いつの間にか口癖になっていたようだ。

「日本語は難しいね」

「母国語に難しいものにもないだろう」

「……」

そうだった。

木佐にはまだ何も言っていないのだ。

上海に居たことも。それより前は、もっと内陸に居たことも。

日本語は、本当はまだ、全部聞き取れているわけではないことも。

おかみさんがサービスと言って、次から次へと色々持ってきてくれるので、

テーブルの上はちよつとしたコース料理のようになった。

最後はデザートの胡麻団子までつけてくれたのだ。とても懐かしい味である。

店を出る頃には、小雨になっていた。

「付き合ってくれてありがとう。私、キサさんには嫌われてると思ってたから、

今日はすごい嬉しいよ」

そう言うと、また不思議な顔をされた。



今度こそ、照れたような顔だ。

「嫌ってはいないさ……」

黒い夜空の向こうに、都庁を中心にしたビル群が見える。

「ねえ、キサさん。東京は誰の街だと思う？」

思いつきで聞いてみた。

「東京都知事？」

「いや、そういう現実的な話じゃなくて……」

思わず声を立てて笑ってしまった。

「つまりね、誰かの意思で運命が決まってしまうような、そんな意味」

「じゃあ、総理大臣か？」

だめだこりゃ、と思いつながらも笑った。

「ここは不思議な街だね。ここもとない柵に囲われた場所では健全な高校生たちが青春を送り、赤い門をくぐれば、外国人はクスリを売り、男は笑顔を売  
り、女は体を売ってる」

「……」

「ここに集まるお金はヤクザに流れているのかと思いきや、実はその大半が政治家の懐に消え、金持ちばかりが肥え太る」

「……？」

木佐は、沙龍が見ているであろう、電飾の赤い門を見た。

歌舞伎町の入り口に設置されたその鳥居に似た門は、やはり『区切り』であり『しるし』なのである。

ここから先は危険ゾーンですよ、というしるし――。

だから、この赤い門の内側でなにがあるうと、文句は言えない。そうと知ってこの門をくぐったのなら――。

沙龍は視線を何箇所かにめぐらせて監視カメラを確認すると、死角を探すより、あのカメラを破壊したほうが早いだろうと判断した。

「やれやれ、第二ラウンドか」

木佐も視線の先に知った顔を見つけて言った。

浅草寺で沙龍が大谷というヤクザ者を瀕死にした時から、こういう日が来ることは覚悟していた。

ただ、相手が人間である分、今回は気が楽である。

数メートル先に居るのは、大谷という中年の舎弟をしていた若い男だ。親の仇を見るような目でこちらを見ている。

彼の周囲にはあと三人、同じような背格好の同じようなチンピラが居て、不穏な空気を醸し出している。

しかし、例えそれが十人になったところで、沙龍の敵ではないのだ。

「非暴力不服従の誓いを破らせることになっちゃうけど……、大丈夫？」

本日二本目のビニール傘を閉じて沙龍が言った。

まだ小雨は降っていたが、今からの立ち回りを思えば傘など差していられない。

「別に僕は誰にも何も誓ってなんかいない。今まで反撃しなかったのは君と同じで面倒事が嫌いだからだ」

「え、そうなの？ でも……」

「どうせ、この場面で、君は引く気はないんだろう？」

「うん、ないね」

「だったら、付き合おうさ」

木佐も早々に傘をたたんでいる。

と、そこへ、沙龍の顔なじみのホストが近付いてきて足を止めた。狭い歌舞伎町で立ち止まっていたら知り合いの一人も通るだろう。

「あれー？ 今日にはカレシ連れ？」

「カレシじゃないよ。友達だよ」

「あ、そうなの？ じゃあさ……」

自称色事師のホストは、木佐をチラッと見てから、ナンパするようなフリをして沙龍に近付くと、肩に手を置く前に、一瞬、目配せした。

そして、耳打ちする。

「すぐ逃げたほうがいいよ。あそこに溜まってるの、田沼組の下っ端だと思う」  
「どうやら察して、警告しに来てくれたようだ。」

「高校生なら全力で走ったら逃げられるでしょ。どうせ向こうは酒とクスリの毎

日で体力ないだろうし。……ってことで、オレは飯食いにいきまーす。じゃあね、気をつけるんだよ」

「ん、ありがと」

茶髪のホストが去って二秒、木佐がため息ついた。

「ああいうのと知り合いなのか。まったく、大丈夫なのか、君の私生活は……」  
「ご心配ありがとう。ネットワークの一つだから。大丈夫だよ」

ついさっきまでざわめいていた通りが、いつしか人の気配がなくなった。彼らがあたりを封鎖したのだろう。

（自分で自分の首を絞めたな、バカめ）

逃げるどころか、沙龍は、腕組みをしてせせら笑っているのだ。

「キサさん、監視カメラが四つある。まずそれを破壊する」

「確かにそれが先決だな。しかし、どうやって……？」

「簡単だ」

沙龍が言った時、前髪がふわっとめくれあがって、あらわれた額になにか字のようなものが見えた。

「こいつです！ こいつが大谷のアニキを！」

近付いてきた舎弟が叫ぶ。

「ハア……？ どう見ても貧相な女子高生じゃねーか。なんかの間違……うござおッ！」

沙龍の喧嘩はいつも問答無用の一発、一撃だ。

彼らに見えたかどうかは分からないが、無遠慮に近付いてきた一人の男の正面に正拳突きを入れた。

鼻の骨が折れただろうが、そんなことはどうでもよかった。

「こ、こいつ——っ!？」

乱闘になる前に、沙龍は一番近くにあった電柱の根元にも同じような攻撃を叩き込んだ。

折れるはずのないコンクリートの電柱がミシツと音をたてて崩れ、すぐ横の二階建ての建物に激突し、壁を抉った。

中に人がいないことを祈るしかない。

建物は半壊状態である。これでは建て替え必須だな、と木佐は思った。

「よし」

なにが「よし」なのか分からないが、沙龍の意図した通り、火花を散らしていた電線はすぐに役立たずになった。

途端に辺り一帯が真っ暗になる。

都市は電気が命だ。停電になると全てが無力化する。

しかし、その真っ暗闇の中で、沙龍の姿はほのかに発光しているかのように見えた。

(やっぱり「そう」なのか……！)

暗闇の中で骨が折れるような鈍い音や、男たちの野太い悲鳴やうめき声が次々に聞こえる。

木佐も二人ほど足を払って転びしたが、気絶させるにとどめた。

「な、なんなんだよ、貴様は、いったい、なんなんだよ！　こんなことをして、ただで済むと……！」

沙龍は吠えている男の胴体を踏みつけて言った。

「怒ってんのはこっちなんだよ、ザコが！」



木佐から見ても禍々しい光が、沙龍の体を包んでいる。

あれは黄金色こがねの光だ。

人がそのために殺し合い、欲することをやめない、美しく、輝くもの。

「東方青龍、西方白虎、南方朱雀、北方玄武——！」

小さい頃、それは祝詞のりとだと、教えられた。

古いにしえから続く、契約の言葉でもある、と。

だから、初めて黄龍を召喚した時も、沙龍はその言葉の意味は分かっていた。  
かった。

しかし、今なら分かる。

「まさか……」

木佐小次郎に会ってようやく分かった。

四神は、黄龍を制御するための存在だ。

この凶暴な、人の身に余る殺戮と破壊の力を、抑えるための存在なのである。

「甲斐さん、君は……！」

「古の盟約の下に、四方将神の力をここに借り——」

木佐小次郎もまた、この時、気付いたのだ。

自分の本当の役割と、なすべきことを。

小さい頃から呪いの力と言われ、忌み嫌われ続けたこの水神の力を、ビニール傘を鋼鉄よりも硬い氷の剣にすることのできるこの力を、本当はなんのために使うべきなのか。

「だめだ、『それ』は！」

「我、唯一の神獣にして無二の存在——」

「それはやめろ！ 頼むから、それだけはやめろ——！」

この黄龍召喚を止めることができるのは四神の中でも北方玄武、すなわち、木佐小次郎だけなのである。

青龍の力を持つ董天にはできないことだ。

具体的には召喚呪文をリセットすることができるのだが、そんな力のからくりなど、今の二人にとってはどうでもよかった。

いつの間にか雨はやんでいる。

この停電の闇の中で、空には星が輝いていた。

地上では建物の下敷きになったり、気絶した男たちが居るのだろう。

「……」

「……」

抱きしめるようにしていた沙龍の身体を離して、木佐が静かに言った。

「僕が止めなかったら、本当に黄龍召喚するつもりだったのか、君は……」  
沙龍は答えない。

ただ、にっこり微笑んでいるだけだ。

が、表情とは裏腹に、沙龍は力が抜けたのか、座り込んでしまった。

文字通り、木佐が一時的に沙龍の力を吸い取ったのだから、立っていられなくて当然である。

「まさか、僕の力が見たくてわざとやったのか……？」

「さあ？」

「結構、策士だな……」

それが正解だろう。

この小さな悪魔は、見た目が小さいだけで中身は大魔王クラスじゃないか、と

木佐は思う。

「改めて自己紹介しよう。私は李沙龍<sup>リーシャロン</sup>。多分、貴方に会うために、日本に来た」

「またしても『多分』という言葉を使ったことに本人は気付いていない。

「シアルン……？」

「沙龍。まあ、呼びにくければ、日本名でもいいよ」

「名前にこだわりはない。」

「沙龍のそれは木佐にとっては不思議な感覚だった。」

木佐にだって、黒田と名乗りたくないといった意地みたいなものがあるのに、このチャイナ・ガールは二つの名前を持ちながら、そのどちらにも思い入れというものが無いらしい。とても自由だ。

「甲斐さん、君は中国人なのか？」

「いや、一応両親は日本人らしいが、私は中国で生まれ育った」

「何故、君は黄龍の力が使えるんだ……？」

黒田の家では水神の加護を得た者は、金色<sup>こんじき</sup>の龍を探せといわれてきた。

最強とされる龍の力を、唯一しのぐことができるのがその水神だからだ、と。しかし、木佐自身は、大陸の守護神である黄龍に縁があるとは思っていないなかった。

「『何故』というのは私も知らないが、『いかにして』なら答えられる。つまり、私は物心ついた時から既に黄龍と共にあったからだ」

「成程、先天的って事か……。僕と同じだな」

「キサさんもやっぱりそうなんだね？ 貴方の力は、北方玄武だよ」

「四神の、玄武……？ しかし、どういうことなんだ？ 僕の実家は確かに北を護る役目があるが、玄武の加護を受けるいわれはないはずだ」

「加護じゃない。そのもの、なんだよ」

「……？ 意味がよく分からないが……？」

「私もうまく説明できないんだけど、そんな気がする。だって、董天とキサさんじゃ、桁が違う」

「董天？」

「ああ、私の、知り合いなんだけど……」

そこを説明するのはそれこそ面倒くさかったので、省略した。

いずれ話すこともあるだろうが、今は晴れて想いが通じたようなこの達成感に浸っていたい。

「うちは京都に本家があるんだが、遡れば先祖は渡来人って事になるんだろうな。弥生時代くらいにまで遡りそうだが……。古いしきたりに縛られた、窮屈な家さ」

木佐が座り込んだままの沙龍に手を差し出す。

この人から、こういうことをしてもらえる日がくるとは思わなかった。いや、案外早かったのかもしれない。しつこくまとわりついた私の勝利だ、と沙龍は思う。

木佐の手を取って、よっこいしょと立ち上がる。黒い夜空を見上げると、雨上がりの澄んだ空気のせいか、いつもより星が綺麗に見えた。

「中国ではね、あの星の事を『紫微星』しびせいというんだ」

柄杓型の星座、北斗七星の延長上にある星を指差す。

「北極星か」

「そう。昔は、船乗りが目印とした、指標となる星だ」  
北極星は北天にあつて、唯一『動かない星』である。

沙龍はそれを木佐に喩えたのだ。

「私は『孤蓬（※根無し草）』でね、紫微星を目指し、導かれて、今、此処に居る。しばらくは第二の故郷に根を下ろす事にするよ」

「嫌だと言つても居座るんだろ……？」

「そうだね、行くなと言つても居座る——」

「……!？」

その時、木佐の視界で人工的ななにかが光った。

それが沙龍を狙う殺意の一部だと分かったので、木佐は沙龍の身体を押しつけて自らが盾になり、一発は耳元を掠めたが、二発目は撃たせなかった。

暗がりて銃を構えていた若い男が、木佐の一撃をくらつて昏倒する。当身技だ。

さらに、彼の持っていた改造銃は、木佐が握りつぶしたように見えた。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

木佐のそばまで行って、哀れな男の末路を見下ろした。

「チュンツァイ蠢材」 (※マヌケ)

沙龍が中国語でぼやくと、木佐がしげしげと見つめてくる。

「ん……？」

「いや、馨の日本語がヘンな男前である謎がやっと解けた。外国人だったんだな

」  
木佐が笑っていた。

沙龍が初めて見る笑顔だった。

【後編につづく】